



岳 山

第 十 九 年
第 三 號

山 岳

第十九年第三號

大正十五年二月發行

目 次

五 月 の 山 旅
赤 石 岳 の 想 出
五 月 の 赤 石 岳
三 月 の 藥 師 岳 へ

圖 版

○ 守門山東頂直下より前守門を望む○ 淺草岳東腹	對頁
○ 守門山東頂	一八
○ 守門山腹より淺草岳及鬼面山を望む○ 守門山頂の北西	二四
○ 上横田附近の只見川○ 手前御神樂より絶巔を望む	三二
○ 大聖寺平より見たる西河内岳	四〇

藤 島 敏 男	一頁
前 澤 政 雄	二九
鹽 川 三 千 勝	四二
田 部 正 太 郎	五四

○赤石山頂より惡澤岳、農鳥山、間ノ岳、魚無河内岳、鹽見岳及仙丈岳を望む	四八
○赤石山頂より聖岳及上河内岳を望む	五六
○上ノ岳頂下より藥師岳の一部と赤牛岳を望む	六二
○タウヤクリンダウ○センブリ	八八

雜 錄

○地名の變遷(武田)○山旅のノートから(竹内奎)○高山植物雜記(武田久吉)○磐壺池と大沼池(藤島)○山岳漫言(笹魚生)

雜 報

○燒岳の噴火○金峰の雪で遭難○日本アルプス新登山道

○會員通信

會 報

第二十九回小集會記事○第三十回小集會記事○幹事改選○會費滯納に就て○臨時大會記事○會務報告○梅津親光君の訃○會員の訃報○退會者○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

五 月 の 山 旅

藤 島 敏 男

大正十四年五月十二日より十七日まで。同行者岡山俊雄君。
参照地圖 守門山、只見、御神樂嶽、津川の四圖幅。

未だ見ぬ山へ

まだ見ぬ山、耳遠い名を持つ山、高きをのみ求めて山に登る人々から顧られぬ不遇な山、さうした山に對するあくがれとも慕はしさともつかない心持が、私の胸底に芽生えてから、考へて見るともう随分長い年月が過去の頁に繰入れられていつた。

そしてその長い年月、私は上州の國境を繞る山々だの、秩父の谷奥の山々だのを彷徨ひ歩いて、自分にもはつきりとはわからない、ある山の姿を探し求めてゐた。

それ等の山々の中には、今でこそ人に忘れられてはゐるものゝ、むかしは宗教的な登山者が敬虔な態度で、その頂上へ、身も心も淨めて、苦しい登攀を續けたものであるとか、交通の不便な時代に幾日も幾日もかゝつて峠越えをした旅人が、惡路に難みながら、その怪奇な山貌に身を慄はせたものであるとか、その山の抱く底知れぬ溪谷に、美しい、或は怖ろしい、また悲しい傳説を藏してゐるとか、心を躍らさずにはゐられないやうな話を耳にしたものもあつた。

かすかな、道としも思はれぬやうな、しかし曾ては何人かゞ草鞋脚絆の紐を締め直し締め直して、辿つたであらう木の下道、針葉樹のあのしめやかな咽つばいやうな香が靜かに大氣に薰んじてゐる間

を、遠ざかつてゆく谷の水音に耳を傾けながら、氣永く登つてゆく小みち、ゆきゆけど果てしのないやうな氣がして心細さがそろ／＼湧き初める頃、ひよつこりと頂上に出る。切開かれた山頂にはさ、やかな祠がしよんぼりと残されてゐたりした。いつからとも知れず氷雪風雨にさらされてゐるらしい石の祠などは、刻まれた文字もさだかには見えなくなつてゐた。未知の山頂に立つて、幾重にも幾重にもかさなる山波のうちに、或は嘗て辿つた山稜の複雑な起伏を、或は心に描きつゝも未だ攀ぢるの機會を持たない山々の姿を、眺めやつて、心は満たされし歡びに躍りながらも、また往時の登山者達のたゞつゝなしく山靈に默禱を捧げる姿を偲んで、逝きやまぬ時の流れを、見えぬ輪廻に削られてゆく山谷を、沁々と懷ふのであつた。

山巔に思はず時を過ぎて、重い荷を再び肩に、見ゆるかぎりの山々にひとわたり左様ならを言つて、生路に踏み入る氣持。夜の宿も、それと胸では定めて來たものゝ、下りゆく谷に、かよはい人間の身を阻む瀑でもあれば、樹の下、岩蔭に夜を明かさねばならないかも知れぬと考へる時の輕い不安。

右岸に左岸に幾度か徒渉しながら、辛くも足の踏場を探しつゝ忍びよる夕明りに地圖を按じては、もう人里に出さうなものと思ふも、溪谷の末は、兩岸よりいくつかの瘦尾根の重り合ふに隠されて、夜の幕のすべてを包んで了う前には、どうやら宿には着けさうもないと思つた時の小さな失望と焦燥。朧ろな光をたよりに、危げな足許に氣をとられて、時の移るのも、道の捗りも念頭を去りかけた頃、不圖眼を上げて、山の端の樹立と覺しいあたりに、かすかな火明りを見出した瞬間の大きな喜びと安堵の心。

かうした追憶のいくつかと、未知の山を戀ふの心とが、私をして、ともすれば、標高に於て劣り、且つ著名でない山々に足を向けさせたのである。

日本に於ける著名な高山の巔がほとんどすべて登り盡された今日、所謂登山期の雑踏が言語に絶するやうになつた今日、人の世の煩はしさに堪え兼ねて、少時なりとも自然の懷に逃避せんとするもの、或は眞に山を愛するものは、勢ひ登山者の蟬集せぬ、高度から言へば二三流に屬する山に向ふか、夏期を除く他の時期を選ぶか、何れかである。

赤城、榛名のそゞろ歩きを出發點として、私の山旅は、東へ北へ西へと、段々擴げられていつた。

東は那須の三本槍、西は上信國境の四阿山、北は越後魚沼の駒ヶ嶽、是等を連ねる線の内に含まれる山々の巔に、幾度立つたことであらう。溪谷のいくつかを溯り、また下つたことであらう。頂上に立つごとに、いつも心を惹く山の一つ二つを見出さぬことはなかつた。溪谷を溯る時、水上の峯々はきまつて、登攀の願望を私の心に芽生えさせるのであつた。盆地を彷徨ふたとき、私の心は、谷奥の高原に靜まりかへつてゐる湖沼に、怪しくも誘惑されるのであつた。

赤城、黒檜の山頂に立つて、亂れ飛ぶ綿雲の斷れ間から、豪宕な山容を持つ武尊山を眺めやつた私は、數年の後、旬日に餘る一人旅の終りに、冷え冷える晩秋の美日を、花咲の寒村から、霜枯れの落葉松林を抜けて、前武尊の頂上へ、久しく胸に描きしその山に會ふ欣びに一杯になつて、疲れた身を運ぶ旅人となつてゐた。

つめたい秋雨の二日も三日も、降り續いたあとの、想起こすばかりでも心地よい小春日の朝、白骨のやうに冷かな色をしてゐる假松を踏んで、裏岩菅から、焦茶に素枯れた苗場山南面の、方一里もあらうかと思はれる、廣い／＼臺地、そこには無數の小池が、矮生の梅、樅と共に風致の妙を盡して散在してゐると聞いてゐた、その高地を、見下すほど近くに望んだ私は、ひどい暴風雨の中を、眞夏だのに慄へ乍ら、苗場山頂の小舎に雨宿りして、足早い霧に隱見する、茫漠として捉へ處のない曠野の

やうな、山頂とも山腹ともつかない所を彷徨ふの日を持つた。

快い響を有する山名と、端正な双頭とを持つ皇海山、日光諸山の盟主、奥白根から南下する上野州國境の連脈中にあつて、何處からでも可成著しい姿を認め得らるゝ山、その山に登つた翌朝、宿を借りた伐材小舎の窓から、殆んど眞西に、上半身を眞白に輝かす一尖峯を見出し、それがかの三國峠近くの仙ノ倉山であると知つた私は、明くる年の夏、越後土樽の村から七八時間の苦闘を続け、思ひを寄せたりし山から、期待に背かざる満足を得たのであつた。

大利根に貢流する幾多の支流、その川上に聳える山々のいくつかに攀ぢた私は、聽てまた大利根の水源、文珠菩薩の乳房から滴り落ちるとの口碑を持つその水源に、無限の憧憬を抱き、雪多き高峯を見捨てゝ、執拗な矮樹の茂みに惱まされ勝ちな苦しい山旅を十日餘りも続け、秘められし深き溪谷、踏み荒らされざる未知の山稜、神秘的な無氣味さを藏する自然林、などから、はかり知れぬ自然の聲を聴いたのであつた。

千八百米に近い尾根上の野營地は、兩側の谷から吹き上げて來る風が、身を切るやうに冷かであつた。燃えさかる焚火に溫りながら、蒼茫と暮れてゆく夕空に黒々と怪異な山貌を浮き出させてゐる、中ノ岳から駒ヶ岳への連嶺を、私は拜跪したいやうな敬虔な心で仰いでゐた。八海山に參向する行者達が奥駈けと稱して、この山稜に精進したと傳へられてゐるが、ほんとうに誰しもその前には跪いて祈りを捧げたいと思ふやうな威容を持つ山であつた。

大水上山から東する時も、私の心は始終この二つの喬岳に惹かれてゐた。枳尾又の湯から一日半の苦しい登攀に依つて、駒ヶ嶽山嶺の三角櫓の下に安置された約三尺程の鑄造佛の前に輕からぬ荷を下ろし、友と喜びを分つたのはその翌年の夏であつた。

かうして山の巡禮は、登りし山を指折り數へて喜ぶと共に、また登らむ山の數少くなりゆくのを淋

しくも思ひつゝ、過ぎ去りし旅の回想に耽り、見ぬ山のあるこれを心に描いてゐたのであつた。

守 門 山

雪の多い北國の山寄りの田舎町に共通な地方色が、長岡からまだるっこい輕便鐵道の通じてゐる栃尾町にもあつた。

低い底が町並の兩側から長く突出してゐて、家の中は、どこもかも薄暗いやうに見えた。檜皮葺の屋根には、きまつたやうに、黝んだ石が行儀よく列べられてあつた。丁度藟の出来る頃だつたので、モンペイを穿いた人達が、空になつた籠を背にして、聲高に話しながら通つたりした。

澁塗りの格子戸をずつとはめ込んだ家の多い町で、ペンキ塗の役場や、鍔張りの小學校などが著しく目立つてゐた。呉服物から書物まで賣るといふやうな商店が一二軒、くすんだ町の色の單調を破つてゐた。河沿ひの一筋町、町裏の田はやうやう植付が濟んだばかり、その向ふには松山が逼つて、山裾の廣からぬ平地に、營まれたさゝやかな町をなつかしいものにしてゐた。

刈谷田川を渡つて町を外れた。

きのふまでの快晴が、けふはすつかり曇つて、雨を誘ふやうな蛙の聲がいやに耳につく。人通りの少い街道を、天候を氣遣つたり、荷の重いのを啣つたり、汽車中から僅かに窺ひ得た守門山腹の非常な残雪の事を話合つたりしながら、卷淵、吉水などの部落を過ぎて、上檜出から島田へ長い峠を越す。

ポツリ／＼と落ちて來た雨も、島田からマギ峠をマギに越した頃には、止んだ。上りゆく谷の右岸、五百米にも足らぬ端山の北面に可成な残雪があるのを見出した、また遠く烏帽子山と思はれる尖峰が一面の雪に蔽はれて頭を出してゐるのを眺めて、冬の降雪量を想像し、明日越ゆべき八十里越の道を

氣遣つた。

ミズキ峠を下つて、八十里越街道へ出たのは午後の二時頃であつたらう。雪融の水は青白く濁つて、守門川の水勢は凄まじい。肩の痛いのも忘れて、私達は明日の守門登りに胸を躍らさずにはゐられなかつた。

荷馬車の通ふほどのこの街道は、八十里越を通るやうな旅人が極めて稀になつた今日でも、吉ヶ平までは立派に保修されてゐるが、私達の通つた五月の中頃でもまだ車の通行し得ぬほどの残雪が道に横たはつてゐた。河筋を吹き抜ける風は、いかにも雪白き山から、春甞はの野に下りてゆくにふさはしいなごやかさと、快よい冷かさを持つてゐるやうに思はれた。

斜めになつた陽が、番屋山の北、雨生^{アモウ}ヶ池のあるあたりのなだらかな斜面に映えてゐるのを、真正面に見て、私達は吉ヶ平の部落に入つていつた。

長い冬籠からやつと醒めたといふやうなこの村は、咲き誇る櫻の花に、杉の木立で啼く鶯の聲に、疎な枝にやうやく新芽が萌え出した梧桐に、喜ばしさうな聲を揚げて、雪しろ水が躍り流れてゐる守門川の河原に、否み難い春の色が動いてはゐたけれども、蕭條たる姿をしてゐた。ひっそりと話聲もしない家の後庭には、まだ雪が残つてゐたり、稀に通ほる村人が、厚ぼつたい綿の入つたものなどを身につけてゐたりするのを見ると、春がほんとうにこの山あひの村に訪れて来るのは、いつのことであらうかと思はれた。

木ノ根茶屋は二軒とも、二年程前に倒壊して了つたといふことや、八十里越の道から丸倉鑛山へ道の岐れる邊(カラホリ)に炭焼小舎があるが、それも冬以來まだ誰も往つたものがないから果して泊れるかどうか分らないことなどを、道連れになつた人から耳にした私達は、小舎泊りの用意もしては來たのであるが、重荷に可成疲れてゐたし、それに守門山や淺草岳の様子も聞いて置きたいと思つた

ので、部落唯一の旅舎らしい宿、守門館に投じた。

煤びた、ガタビシいふ二階で、炬燵に當りながら私達は、きのふ通れて來たあのせゝつこましい繁雜な世界と、甚しい距りのあるのを沁々と感ぜずにはゐられないやうな、この山懷の靜寂な春宵をいつくしみ、語り更かすのであつた。

雪の曠野に道を失つて、一人彷徨つてゐる。降りしきる雪が小止みとなつた。遙か遠くの方に、小さい黒點が見える。随分道のりがあるらしい。頭の上に一杯に擴がつてゐる鉛色の空は、東の端からもう暮れ初めたやうだ。遺瀨ない心になつた私は、重い荷を揺り上げて、足に穿くスキの上に眼を落した。淋しさがこみ上げて來たのだ。その時、どうしたといふのだらう、足許の雪が眞二つに破れてアツと言ふ間もなく私は底知れぬ闇へと落ちていつた。どうすることも出来ない。私は聲を出さうとして眼が醒めた。夢だつたのだ。

何年も張り換へたこともないらしい障子が、ほのかに白くなつてゐる。疲れたのだらう、友はまだ夢路を辿つてゐる。下ではバチ／＼と柵火の燃える音がしてゐるやうだ。そつと床を抜け出して、前の河原へ下り立つ。切れるやうな川水に顔を洗つて、朝の大氣を胸いつばいに吸込む。山に登る朝の心のとさめき。山を戀ひ、山に旅する者のみの味ひ得る喜びを感じないではゐられない。

屈強な若者一人を加へて私達は、午前七時半、守門川の左岸を溯り始めた。

大池の畔りまで、まだ雪の消えぬ田の間を、ゆるやかに登つてゆく。杉の木立に圍まれた池は、向ひの山の殘雪を清冽な水にうつして、幽邃な趣はないまでも、山端の池らしい美しさを持つてゐた。林の茂みで鶯が頻りに啼いてゐた。

谷の奥へ炭焼にでもゆくらしい、蓑を着けた五六人の村人と一緒になる。

「お山へ行かつしやるかね、えらい雪だに。」

と聳深い山の人は、不思議さうな眼を私達に向けるのであつたが、雪が多いと聞けばさくほど、心は躍るのであつた。

大瀧の方から来る澤を過ぎる頃から、行手に守門の北面が仰がれた。淙々と流れる河に逼る兩岸の尾根の間に、高く、はるけく、わが守門は、その名に似つかはしい儼然たる姿を見せた。大きくカール状にえぐられた上半身は、全く雪の蔽ふ所となり、僅に露出せる岩が、到底千五百米の山岳とは思はれないやうな、高山的な景觀を呈してゐる。雪の上を歩き勝ちな道は左岸に沿うてゆく。氣懸りだつた空も、雲が動き出して、晴れ上りさうになつて來た。

烏帽子山から落ちる湯の澤を過ぎると、水の流れは、谷を埋める雪の下になつて了つた。廣い雪溪を、いよ／＼高くなつて來た峯頂を仰ぎつゝ、登つてゆく。右から下アヒ澤が入る。前守門（一、四三二米四）の東面は非常な雪で、背稜には大きな雪庇の連續してゐるのが望まれる。

前守門に取付いてから、絶巔に志すといふ登路も、私達の心に可成強い誘惑を與へたが、今日の行程の長いのを慮つて、下アヒ澤合流點の一二町上から右岸の尾根へ登り初めた。

守門の東頂から北に派出するそれである。桺、樺などの喬木、下生えに檜、ツゲ、根曲竹などの密生繁茂するこの尾根に、吉ヶ平からの登路がある、今はすつかり雪に押伏せられてゐるが、所々雪を破つて出てゐる所を見ると、夏日の苦闘が思遣られる。半年近くも雪に埋もれてゐる山稜の、逆茂木のやうな矮樹の中を分け進むことの苦しさは、高い山々の偃松の海を泳ぐのに比して勝るとも劣らないものであることは、降雪量の多い上越、或は上信の山々を雪のない季節に歩いたものゝ誰しも痛感するところである。私達は、金標の齒がサクサクと喰込む音に聴惚れながら、これほどの残雪に恵まれやうとは思ひもかけなかつたので、今更のやうに幸運を喜び合ふのであつた。

右は守門川の源頭、硫黄澤を隔て、前守門の素晴らしい雪壁を望む。飛ぶ雲の影が悠々と谷から



守門山東頂直下より前守門を望む



藤島敏男氏撮影 浅草岳東腹

峯へと這ひ登つてゆく。翼を擴げた鳥のやうなのだの、桐の葉の格好をしたのだの、影繪のやうに、あとからあとから飛んでゆく。

左は湯ノ澤を隔て、突元たる烏帽子山が近い。恐ろしく急な斜面の雪に、水々しく若葉した白樺が、もう大分高くなつた陽を受けて、長い影を落してゐる。冬の雪とも、夏の雪とも違つた耀きを持つ春の雪の銀白色と、黄の勝つた若葉の色とが持つ調和の美に、私達は飽かず眺入つてゐた。

木立は一、二〇米のあたりに盡きて、これまでの細い尾根は幅廣い雪の平となり、頂上直下の雪壁が、のしかゝるやうに逼つて來た。こゝから斜めに右に絡んでも山頂に達し得られさうではあつたが所々に龜裂を生じてゐる雪が雪崩れぬとも限らず、一方益々露れて來た空が一刻も早く南方の展望に接したいとの思ひを強めさせたので、私達は東頂への路をとつた。

大きなデグザグを描いて登る。壯快な滑降が享樂出來さうな斜面だ。背稜に近くなるに従つて段々傾斜が増したのに加へ、まともに受ける日光が堪え難く暑い。雪から跳ね上つた灌木をたよりに最後の十米ほどを攀ちて、遂に背稜に立つた。そして更に二百米ばかりの登攀を續け、東頂に立つた私達は、そこに荷をおろした。時に午前十時を過ぐる半刻。

見よ！眼路のすえ、はるばると、數知れぬ雪の山、荒磯に寄せては碎ける白波のやうな鋭い美を持つもあり、或は蒼穹に舞交はす、美しい柔毛を胸に持つ白い鳩のやうな可愛らしい美を持つもあり、或は饗宴の夜を躍り狂ふ、白絹の衣着た舞姫のやうな魅力ある美を持つもある。綺麗星の如くとも言ふのだらうか。だが星も、晴れ晴れしい春日には光を失ふであらう。何と形容すればいいのか、私には言葉の持合せがないやうだ。

はじめて相見る山々の、あまりにも耀かしい姿に、言葉もなく、私達はたゞ黙つて、こみ上げて來る感激を緊りと胸に抱いて、目の前に展開された大觀を目の痛くなるほどみつめてゐた。

我立つ東頂の南面は、窺ひ寄るさへ怖ろしいやうな絶壁をなしてゐる。南下する大白川の溪谷は雪に閉されて、雪融の水もまだあの喜ばしさうな聲を揚げ得ないのであらう。

米澤川と黒又川との兩谷に深く剝られた、毛猛山の一群、殆んど山頂まで残雪に蔽はれ、どれも見事な雪溪を懸けた姿が先づ眼を奪ふ。山腹を繞ぐる一帯の闊葉樹林は明るい若葉が、もう大分高くなつた陽光に透き通つて、緑を含んだ黄金のやうな色に光かる。その上に抜け出したやうに雪嶺が立つ。林の中の雪を踏んで、樹がくれに仰ぐ雪の峯に攀ぢてゆく時はどうであらう。明日の淺草岳が思はれる。

大鳥嶽は檜嶽あたりの蔭になるらしい。未丈ヶ嶽の尖頂が遠くに見える。やゝ右に寄つて、眞白な駒ヶ岳、中ノ岳が久闊を敍してゐる。それから東南へ、大利根水上の山々が、曾ては、あれほど私を苦しめた藪もすつかり埋まつて、春霞のうちに、白い姿を緩るく起伏させてゐる。苦しいいくつかの思出の絡まるそれ等の山々も春らしい長閑な姿をしてゐる。

遠く遙かな山々を、なつかしみ眺めてゐた私は、平石川の谷を隔て、近く淺草の大岳の雄姿に眼を轉ずると共に、久戀の山の思ひしに違はず、堂々とした山容を持つてゐるのに、心からの満足と感謝とを染々想ふのであつた。

二つの峯頂は雪に輝き、北にひく早坂の尾根はなだらかな線に柔かきものを藏し、南、鬼面山に續く山稜は鋭い尖峯を起こして、この方面からの登攀の苦を思はせる。北西に面する山腹は、ゆるき斜面ではあるが、深く入込む數多い谷々が、いくつにも尾根を切込み、櫛の深林が一帶に擠がり、山裾から緑が上へ上へと匂ひ上つてゆく。

左澤ノ野地、右澤の奥、蛙野地、大野地などのあたりは廣い雪田に、まはりの林が濃い影をひいて、割られた空に飛ぶ白雲の動きに見慌れてゐると、ふと何處からともなく、籠つたやうな山鳩の聲がき

こえて來るのであらうなど、想像するだけでも心が躍る。

無限の愉快に浸つてゐた私達は、我に復つて下りゆくべき道を考へねばならなかつた。烏帽子山への背稜を傳つて、鞍掛峠から木ノ根茶屋に出て、五味澤へ下ることを考へて來たのであつたが、見ゆる限りの尾根のどれもが全く下生えを雪に埋め隠されてゐるのを見ては、大きな弧を畫く豫定を遂行するよりも、こゝから東南に引く尾根を傳つて五味澤へ下り込んだ方がよさうに思はれた。

東頂に立つて眞西に望む守門の主峯、突元と盛り上がる峯頂は、今にも雪崩れ落ちさうな雪が、所々の裂目から猛烈な灌木の茂みを見せ、急な登りはこゝ東頂から往復一時間でも難しいかと思はれたので、先をいそぐ私達は絶巔に立つの願を棄て、下り始めた。

吉ヶ平から連れて來た若者は、來た路を飛ぶやうに下つてゆく。私達は未知の尾根に踏み入つた。小鳥のやうな軽い氣持で、少しゆるみ始めた雪の急斜面を、驅けるやうにして下つてゆく。左側は本澤の源頭、榎、白樺の交じる闊葉樹林が雪の上に一面に擴つてゐる。烏帽子山の岩峯がいつの間にか高くなつて來る。振返れば日を受けた南面の雪壁に、今私達が下つてきた足跡が、雪の上を小走りに馳しる小鳥の足跡のやうに、こまかく、づつと續いてゐる。

東頂から一三六七米八の三角點に續く尾根と、眞南に一一七七米二の三角點への尾根とが分れる所まで、それでも一時間ほどを費した。この邊までは全く雪稜傳ひである。何物にも煩はされない、自由な心で、私達は雪の上を、荷の重いのも、行手の懸念も、みんな忘れて、益近く高くなる淺草岳の大姿に見惚れながら歩いて往つた。

南する背稜に入つて、暫らくゆくと、見事な榎の林がある。高い故かまだ芽も出さないやうだ。疎な梢の間から、守門の頂上が仰がれるかと、振返つたが、間近い尾根に遮ぎられて見えない。クロヒメ澤一帯の緑が左に瞰下される。澤の末、平石川の本流は、兩岸が障壁をなしてゐるらしく、五味澤

へ工合よく橋でもあれば、兎も角、さもなくば對岸へ渡るのに困難が伴ふかも知れぬと思はれた。一一七七米二の三角點までは文字通りに背稜を傳ふ。所々に雪が崩れ落ちて、頑強な矮生木が出てゐる所があつたけれど、雪の上を選んでいつたので、大した苦勞はせずに済んだ。大日の部落附近で本流に合するジャクヅレ澤の北の尾根を五味澤へ慕地に下り込むにきめて、一休みしやうと私達は、三角點の南、千百米と記るされるあたりの、豁らけた場所を選んで、もう大分疲れを感ずる身を筐の上に置いた。

日はやゝ西に廻つて、こゝろもち黄と赤とを帯びた光が、雲もない紺靨の空に溶けこんでゐる。眺めやる雪嶺の半面は金色に光り、陰つた半面は青白いやうな、黝んだやうな、つめたい色をしてゐる。深い谷の底には既に夕べの色が漂ひ、雪上にひく木々の影はだん／＼と長くなつてゆく。烈しい五月の陽光にゆるんだ雪もまた堅くなつてゆくのであらう。郭公かと思はれる啼聲が二聲三聲、かすかに聞えたやうだ。人の心を寂しがらせる聲だ。だがこんな雪の多い、若葉がやうやう谷間にのみ萌え始めたやうな寒い所へ、もうあの鳥は來てゐるのか知らななども思つた。

腰を下ろすと、中々立上る氣になれない程疲れた身を起こして、夜の宿の暖かきを願ひつゝ下つてゆく。樹木がだん／＼大きくなつてくる。東南に向いてゐた尾根が南へ折れるあたりまで來ると、背稜の雪は左右に破れて、戰慄に値する茂みが頭を擡げてゐるので北に面した雪の上を辿り辿りゆく。河の水音が近くなる。斜陽を受けた對岸に、田甫らしいものと、家が一軒、取残されたやうに立つてゐるのが望まれる。五味澤の部落だと安心する暇もなく、雪は絶へて藪の中へ飛で込んで了まふ。やゝ白く濁つた雪しろ水が、溜々と流れてゐる川原がすぐ目の下に見える。木の根につかまりながらに落ちるやうに下ると河畔に出た。五味澤の澤の字あたりらしい。

兩岸は絶壁をなしてゐるので、己むを得ず川沿ひに下つてゆく。二三丁も行つて、半分雪に蔽はれ



影撮氏男敏島藤 頂 東 山 門 守

た田を見出した私達は、その邊に當然道のあるべきを思つた。然しそれは誤れる期待であつた。

冬の眞中には、積雪が三丈といふ一寸信じられぬ程の深さに達する此處では、河に沿ふ道などは殆んど毎年新たに作られると言つてもいいのである。崖の上に立つて、橋らしいものを認めながら、それへ下る道がどうしても分らず、雪上にかすかに残る輪標の跡を趁うて、私達はどんなに道を探したこどだらう。遂に意を決して崖を落ちるやうに下つた。川に架せられた橋は半分しかない。流の中の岩に橋は終つて、あとは徒渉より外に術がない。川上から吹き下ろすつめたい風の中で、終日雪の上を歩いて冷切つた足を、この見るからにつめたさうな水の中に踏入れるのかと思つた時、我知らず嘆息せずにはゐられなかつた。

疲れた足を踏占めて、やつと渡り終つた時、夜にならなかつたのが何よりだと思つた。見上げる空は夕映えて、星が一つ二つ。周囲の山々の巔に、餘光が僅かに残り、谷の底は早や夜の色がだん／＼と擴つてゆくのであつた。五味澤の一軒家に、宿を乞ふて、燃上る爐の火に冷切つた身を暖めながら私達は、はるばると越えて來た雪の山の姿を幻のやうに思浮べるのであつた。

浅 草 岳

六十里越、八十里越の名を耳にする者は誰しも、その昔、關東から北陸へ、幾日も幾日もかゝつて峠越えの長い旅を續けた旅人達の身を、憶はずにはゐられないであらう。明るい表日本と、暗らい裏日本とを結び付けるこの二つの街道を、様々な想ひを持つた旅人が、道連れになつた他國の者と、他國自慢でもしながら、十日も半月もかゝつて、通つたことなどを想像して見るのも興が深い。

交通の發達がかうした街道を荒廢させるのは當然である。要件を持つ人、視察なる名目の下に鷄目鷹目で物を見る人、是等の人々の旅には便利といふことが、何よりも重要視される。かくして山越え

の街道などは荒果て、了ふばかりである

岩越線が通じて以來、八十里越もすっかり寂びれ、行商人が稀に通る位になつて、木ノ根茶屋もとう／＼立腐れて了つたのだ。國道である峠道さへかう荒れてゐるのだ。二つの街道の間に位する五味澤などは、よくこんな處に人の住むものと思ひ議に思はれるほどである。

今は、老夫婦、若夫婦、娘一人、孫一人の一家族が、川縁に開墾されたほんの少しばかりの田を耕して、住んでゐるのである。四十年程前にこの老夫婦が此處へやつて來た時には、一緒に三四家族が來たさうであるが、山中の生活に堪兼ねてか、みんな里へ下つて了つたと言ふ。長い年月浮世の波をよそに、幾多の艱難に打克つて來た山人達の身には、力強い何物かゞ充ち溢れてゐた。

方四尺もあらうかと思はれる大圍爐裏に燃上る楷火が、この居間にも寢室にも客間にもなる大きな部屋を明るくした。重い口から語られる山の話に、私達は貴い説話を聴くやうな氣持で耳を傾けるのであつた。

秋は十月の末にもう雪が来る。燃立つ木葉が惶だしく散つて仕舞ふと、それから雪の來る日がやうやく多くなつてゆく。收穫れた稻を乾すやうな日は珍らしくなる。そんな日には鐵砲を擔いで獵に出るのだ。さうしてゐる内に雪が上へ上へと積む。

眞冬は三丈からの雪があるといふ。三日も五日も降りつゞく時は、夜晝ヨルヒの差別がつかなくなる。音とし言へば、爐の火の燃える音と、湯の沸く音位のものであらう。死を想はせるやうな沈黙シヅメの中に、この人達は嘗て宿を乞ふた旅人の噂でも話合ふのであらう。一年に一人か二人の闖入者が、この人達に與へる印象は、その生活が單調だけに、殆んど想像も許さぬほどである。氣紛れな旅人や、小林區署の役人などのことを、珍らしい出來事のやうに、大層らしく語り聞かせて呉れた。

雪が融けて了ふのは六月の中頃だといふ。私達の行つた時もまだ周圍の田圃は殆んど雪の下になつ

てゐた。苗代から收穫までが、こんなに短い所も少なからう。稻が刈取られるともう雪が近くへ來てゐるのだ。

盡きぬ山物語に夜は更けてゆくのであつた。

白ら／＼と明けゆく春の朝は、快きかぎりである。冷かな大氣を吸ふべく外に出て、仰ぐ大空には一點の雲もない。日本晴。川下の山肌シメに清々しい朝陽が光を投げ、露を含んだ梢がきら／＼と光り、姿を見せぬ小禽の聲が朗らかに聞かれる。

一夜明けたきのふの思出が、胸の裡に蘇へり來て、遙々越え來た悦びとなり、やがてそれはまた遙々越えゆかんと願ひ變つてゆく。

今度の山旅は最初の計畫では、木ノ根茶屋を根據として、守門、淺草の兩山に登る豫定であつたのが、頼みにしてゐた茶屋の潰滅と、意外の残雪量とが、全く豫定を變更させ、従つて寒い思ひをしないで済んだのは何よりも好都合であつたけれども、私達は不要になつた防寒具だの飯盒だので可成重いリュックサックを擔ぎ歩かねばならなかつた。

それで前日も案内を兼ねて、守門の上まで吉ヶ平から若者を頼んで來たのであるが、その爲めに登路は極めて樂に且つ著しく捗り、生路を下るに充分な時間を持ち得た。今日も亦淺草岳の頂上まで宿の若主人を煩はすことにする。

守門からの下りに望んだ淺草岳西側の澤は、孰れも上部は雪溪になつてゐるが、下方は残雪が斷續して溯行の困難を思はせたので、登路は雪溪の現はれるまで尾根を絡み、流れが雪の下に隠れたならば澤に下りて澤傳ひに登らうといふことに決した。

いつの日か再び訪れることもあるまいと思へば、一夜の宿をかりたこの山中の一つ家にわけても名

残は惜しまれるのであつた。山に生れ山に老ゆるこの人達の上に幸あれと祈り、温き接待に心からの感謝を述べて、七時半私達は五味澤を後にした。

家の前から、まだ日の射さぬ堅い雪の上を二三町も登ると、柳の大木の見事な林へと導かれる。若葉する梢は繁り、灑ぐ日光も地を蔽ふ雪までは届かないこの林の中は、すべてが緑光に包まれて春五月といふに何となく薄ら寒むいやうな感じを與へる。樹間を縫ふてゆく私達の先へ先へと、消魂しい聲を上げて梢から梢へと渡り移る鳥がある。殆んど姿を見せぬキツ、キダといふ。「ホーホー」と山鳩が何處かで啼く。淋しくあきらめたやうな中に柔味のある聲だ。間を置いて何處からともなく響いて来るその聲に耳を傾けてゐると、何處か遠くにある、何だかはつきりは分らないものに憧憬れるやうな氣持が心に湧いて来る。人を默想に誘ふやうな啼聲だ。

ゆるやかだつた山はらがやゝ急になり、左手に對岸の尾根が逼つて來ると共に溪流の音が高く響き轟く。ムジナ澤（五味澤の五六町上流で平石川に合するもの）の流れが眼下に望まれる。水量は左程多くないが、雪の斷續はなほ澤の中に下り立つを躊躇せしめた。澤に近い所を絡んで十町も溯つたであらうか、樺、樺などの針葉樹が現はれるあたりまで來ると、淙々の音はいつしか止み、雪に埋もれる深谷には無氣味にさへ思はれるやうな静寂が擴がる。私達は雪溪の上に立つた。

高距は辛うじて七百米内外に過ぎないのに、溪谷の中ではあるとは言へ、殘雪量優に六七尺に及ぶのは、如何にこの地方が深雪地であるかを充分に語つてゐる。大町の奥、鹿島の部落から祖父岳に攀ぢたのは四月の中頃であつたが、澤に残る雪は五六尺には達しなかつたことなども想起された。瀧を一つ（ベンザラ瀧）高廻りしたのみで雪溪を極めてゆるく登つて行く。鬼面山への背稜から落ちて來る澤と分れ、冬枯れたまゝ未だ芽の出ない立木の梢の間に淺草岳西頂が仰がれるまでは、やゝ倦怠を感ずるほど遠かつた。足下に踏締める雪の軋しむ音が沈黙を破る唯一のものであつた。想ひをたゞ

山頂に馳せて二人は黙つて歩を運んだ。振返へる谷の末には守門から南にひく尾根の輝けるが望まれた。

澤が東北に向ふやうになつてから四五町も行つて、私達は澤を離れ最後の登りにかゝつた。最後の登りと言つても、標なしに登れる程度の雪の斜面である。それでも、久戀の山頂に一步步近くなるを思ふて、私の心は怪しくもときめくのであつた。十時、脊稜に立つた。崩落ちやうとする雪の間から一四八四米の突起が頭を擡げてゐる。熊らしい足跡、それを趁ふたらしい人の足跡が、雪の上に入亂れて残つてゐる。

雪に閉された山谷に、獲物を探求めて彷徨ひ歩く獵人の生活、其人達の目には人跡稀なこの深い山谷も、鳥獸の隱家としか映らぬであらうけれども、損はれぬ自然に接し得ることに於ては何人も及ぶべくもない。この點に於て、私はかゝる人達の生活を羨ましく思ふことさへある。雪融水の滴りも凍り、凄まじい風が怒りの叫聲を揚げて粉雪を捲上げ一寸とした隙間からも吹落して来るやうな冬の夜、爐に燃上る威勢のいゝ樺火が、誇らしげに獲物を語る獵人の鬚深い赭顔を明るくする有様などを想像すると、山に遁れ入つて生きんとさへ思ふこともあるが、所詮山の人に成り切れぬだらうと考へては、胸底に寂寞感の湧き来るを禁じ得ない。

今日も昨日に劣らぬ美日である。僅かに残れる三角標木の傍に、私達はかゝる日に久戀の山頂に立ちし幸福を喜び合ひつゝ、言ひやうのない感激に心は一杯になつて了つた。高度から言へばとるに足らない山である。行程もこの頃なれば五味澤から僅々三時間半を要するに過ぎない。心を躍らせるやうな岩壁の一つもない、見やうによつては平凡な登路であつた。而も尙私の心の琴線は歡喜の情に高く鳴響くのであつた。忘れられたる山に寄する思ひのかくまでに深く強きものがあらうとは、吾ながら驚かれるのであつた。

鬼面山東面の素晴らしい絶壁、やゝ遠く朝日嶽の雪峯、それから南に續く會津駒への連嶺、東には思ひしよりも遠く御神樂岳^{ミカケラ}の盛上つたやうな姿が二日の後に迫れるその登攀の苦を思はせるに充分な山容を見せる。下りゆくべき只見川沿岸の山々には著しい残雪もなく、昨日から殆んど土を踏まぬ身にはいかにも暖かさうな山はらの畑などが、不思議な誘惑に感じられた。

頂から北へひく幅廣い早坂尾根、雪の大通^{オホドホリ}、ところ／＼に榎や樺の木立が黒い影を落してゐる。木ノ根茶屋さへ満足に残つてゐたならば、私達はこの廣々した人通りのない大通を、朝の散歩のやうな快さを以つて歩いたであらう。

田代平の谷地は一面の雪だ、鞍掛峠への道が林の中に白く見える。四月の中頃、その時分はまだ春雪の降る日も多からうけれど、スキーを穿いて吉ヶ平から叶津まで八里に近い峠道を辿つて見たい。守門、浅草兩岳を近く遠く眺めながらゆく旅人となつて見たい。過去に登つた山の裾を歩いて、逝きし日の幻影を、仰ぐ山姿に夢みるやうな旅も私は好きだ。

眺めやる守門は、南面の雪壁に一杯の春光を浴びて、王者の如く君臨する。北越の雄たるに恥じない姿だ。均整な三頂、見事な岩壁、それ等に纏付く夥だしい残雪、何といふ立派さだらう、今更のやうにいゝ山だと泌々思ふ。

五味澤からの若者は、右澤の方へ廻つて、兎の一匹も土産に持つて歸らうと、慣れた足どりで北の方へ下つて往つた。春日に夢みるやうなこの快さの内に一刻も長く漬つてゐたいとの願が、私達を一時間半も頂上に停まらせた。

雪の原は格好の傾斜を持つて一里近くも續いた。先きに滑出した友の後姿が見る／＼内に小さくなつてゆくのに目をやつて、さあゆかうと自分も滑降を始めるやうな氣持を味へないのが残念であつた。それでも三つの目的の二つを達した歡びが、自然と私達の足を速くさせた。

懐しの山を振り返り振り返へり、小三本澤に沿ふ背稜を下る。雪消えて後は、到底歩けまいと思ふやうな茂みが時々現はれてゐる。やがて喬木帯に入つて緑光の灑ぐ中を歩く。細くなつた故か尾根の上は雪が杜切れ／＼になるのを、縫ふやうにして進む。右手に岩壁が現はれる。入叶津あたりからも明かに認められ、スダレ岩と稱するものだ。

仔熊を見たのはこの邊であつた。頑強な灌木を押分けて身の樂になつた私は、後からの友を待つべく荷を下ろさうとしたが、行先を氣遣つて不圖向ふを見た。丁度其時である。小さい窪みを隔て、檜の大木の枝に仔熊を見出した。好物の檜の實の味でも賞してゐるのであらう、私達には氣が付かぬやうである。ものゝ五六間も離れてゐない。その内に悠々と木を下りて藪の中へ姿を没して了つた。この間五分ばかり。恐らく彼は私達の存在に氣が付かなかつたのであらう。谷に下つたのか、あとは靜寂にかへつた。無氣味さを念頭に置く暇もなく藪を分けねばならなかつた私達は、熊の行方などを忘れかけた時、大變なものを見出したのである。

それは外でもない。傳ふ尾根の北、雪に蔽はれた小三本澤と大三本澤との間、目醒めたやうに若葉する深林の中に、一つ二つ三つ四つ、碧玉、と言つてもこのやうな冷たく澄み冴えた色を持つものがあるかどうか知らないが、碧玉とでも言ふより適當な言葉を見出し得ないやうな小池が俯瞰されたのだ。雪の中に象眼された之等の池は、凄艶な蒼黒色を帯びて、物語に聽いて身を慄はせた雪女の瞳を聯想させ、池畔に走寄るよりも寧ろ遠くからじつと眺めてゐたいやうなものであつた。然し山中の小池湖沼に限りなき執着を持つ私達は、この秘められた仙境を見捨てゝ去るに忍びなかつた。

二人は池を目當てに、雪の急斜面を飛ぶやうに驅下つた。小三本澤のさゝやかな流れを渡つて、池の畔に立つた。地圖には十一の小池が記されてあるが、實際はもつと澤山あるやうだ。幾段にも分れて存在してゐるらしい。私達は流れに近い最下段のもののみで五つほどを數へ得た。どうして出來た

ものか、一寸珍らしい。底に沈む枯木などがはつきりと見える所からすれば、大した深いものとは思はれない。五つの池は上方に位するものから段々と水が下のものに流込み、連續してゐるやうであつた。水面以外は全く雪の蔽ふ所となつてゐたので、よくは分らないけれども、或はこの邊一帯が沮洳地なのかとも考へられる。守門圖幅にある稍大いのを曲沼と呼ぶ外、總稱して小三本の池と言ふことは入叶津で聞いた。

池畔に荷を置いて、林の中をカメラ片手に歩廻つたり、水面に宿る梢の影を細かい漣が崩してゆくのに見惚れたり、池から池への小流れのかすかな忍音に耳を傾けたりして一時間餘も、私達はこの幽遠な趣を持つ池の畔を去り兼ねてゐた。晴れ／＼しい頂上の氣分に比して、是はまた何といふ落付いた靜かな境地であらう。南から西への空を急峻な尾根が狭く限り、北は夏ならば光をも透さぬやうな深い林が果しもなく擴がり、東も重り合ふ山裾に人里の近いとも思はれず、この頃では訪れる人のあらう筈もなし、たまさかに兎が水飲みに來て水鏡に映つる姿に見惚れる位のものであらう。尾瀬ヶ原の壺沼に若い乙女の水精が棲むならば、こゝ小三本の池には年老いた老嫗の水精が隠れてゐやう。滴り落ちる水の共に只見川へ注ぐのも他生に繋がる縁かも知れぬ。若葉の梢で郭公が頻りに啼く、一羽ではならしい。

先きのことも懸念されるので、残りおしいけれども出掛けることにする。左から大きなガレが落ちてゐるのも、すつかり雪だから歩きよい。澤を渡つて七二〇米と記されたあたりを越え、八十里越街道に出るまで昨日のやうに藪に苦しむこともなく濟んだ。雪の街道に大きな輪櫓の跡を見出して、人里の近いのを思つた時、氣が張つてゐた故か餘り感じなかつた疲れが一時に出て來た。雪に濡れた足のつめたさと、荷の重さとを苦しむ、それでも兩岸の若緑と残雪に目を慰めながら、大分重くなつた足を運んでゆく。入叶津の橋の上で一休みして淺草岳を仰見る。

薄曇りの夕空に高く高く、あの眞白な峰頂が聳えてゐる。四時間ばかり前にあの巔に居たとは思へない程遙かに遠い。西から見たのとは違つて、立派な金字形に見える。堪らない嬉しさが溢れさうになる。何とは知らず熱くなつて來た臉、私は眼を伏せて雪融水にやゝ濁つた河の流をぢつと凝視してゐた。

蒲生の部落のとある小さな宿室に荷を下ろすまで、私は幾度振返つてこの氣高く白く清らかな山をなつかしみ眺めたであらう。そして私は誰に言ふともなく、「谷の奥に雪白き山あり」といふ文句を繰返すのだつた。

隣りの部屋の五六人は大分威勢がよく、私達は遅くまで寢付かれずに弱つた。翌朝出懸けに尋ねたら、鳶口一本を元手に山の奥谷の奥を渡つて歩く所調「木流し」連中だつた。丁度増水期なのでこの河筋はかういふ連中が、五人十人と隊をなして流木の後を追ひつゝ川下シホに下つてゆくのであつた。四五年前ある山旅に伴つた老人が、露營の夜語に若い時分木流し渡世をして色々な危い目に會つたことを、問はず語りにきかせて呉れたのを思出す。人を吞まうと待つてゐるやうな深い淵、滑つたら助りやうのない急湍、翼なきものゝ傳ひやうもない急崖。そうした中で幾度か命を奪はれさうになつた経験談のいくつかが、今でも私の記憶に残つてゐる。襷を着て鳶口を肩に、輕るさうな足どりで出掛け、てゆく人達の後姿には、どことなく悲壯な影が宿つてゐた。

今日は朝から細い五月雨が煙るやうに落ちてゐる。七時に宿を出た。昨日の疲れが抜切らないのと、今日は川沿ひの往還を下つてゆくのだといふ心安さがあるのとで、行程は大分張つてゐるのだが、急ぐ氣にならない。

漫々と大河の相を持つ只見川の驚くべき水量に川上の山谷を想つたり、時々振返つては淺草岳から

鬼面山への雪稜を詠嘆したり、急な山はらに嚙付カッリいてゐるやうな寒村を眺めてはそこに住む人々のことを考へたり、過ぎし三日の旅を話合ひなどして、この人通りの少い街道をゆく私達は、きのふまでの緊張に引かへ何となく物憂いやうな心持に充たされてゐた。

瀧の部落を過ぎて山の端を北へ廻るともう淺草岳も見えなくなつた。雨脚は漸く繁くなつて来る。あたりは低い山のみとなつて目を樂しませるやうな風物もない。地圖を出しては道の遠いのを歎ずるばかりである。

橋立温泉（と言つても河邊の岩の間に石で疊んだ極めて原始的なもので、殊に増水を慮つて屋根もすつかり取除かれてあつた）で雨に濡れながら、浴槽（？）にひた／＼と逼る急流を隔て、對岸の岩壁に懸る瀧を賞嘆したのが、この單調な一日の唯一の慰めであつた。

本名の村から長坂峠を三條へ越える頃には、身は疲れ果て、それに三條から果して御神樂岳へ登れるかどうかとも判然とせず、私達はたゞもう遺溺ない氣持で一杯になつてゐた。そして一刻も早くこの冷切つた身を暖い爐邊に横へたいと願ふのみであつた。そぼ降る五月雨の中に見出した三條の部落は、貧しげな佗しい山間の僻村であつた。見慣れぬ旅人を泊めやうと言ふ家は中々見當らなかつた。まして御神樂岳へ登るなど、言つても相手にしない。方々尋ねあぐんだ擧句、明日晴れたら案内しやう、今夜は泊めてもやらうと言ふ家を探し當てた時、二人は救はれたやうに上框に腰を下ろして、ぐつしより濡れた草鞋の紐を解いた。

御神樂岳

御神樂岳ミカゲラ、名からして何か宗教的な由來のある山に違ひないが、無精な私は古るい文献を漁るほどの根氣もなく今だにこの山の持つ過去の印影の就いては、何等知る所がない。たゞ地圖を擧げて、恐

らく豪宕無双であらうと想像されるこの山に、いつかは登攀したいものだと思分久しい間思續けてゐたのである。

山麓の部落では、この山に登れば必ず雨を呼ぶとの迷信(?)が存してゐて、早魃の際雨乞ひに登る外殆んど登る者もなく、往年高頭氏が登攀を企てられた時には、岳麓の部落民がどうしても同伴を拒み、遂に登山を断念して引返へされたとの話である。

私達の行つたのは五月中旬であつたから、深雪地のこの邊ではまだ田植も始まらず、雨が降つては農家が困まるといふやうな時季でなかつた爲め、登山を阻止される懸念はなかつたが、導者を得られるかどうかは大分氣に懸つてゐた。登路と言ふべきものの殆んどない、而も山頂まで猛烈な藪に蔽はれてゐる山に、導者なくして登ることは、勞力と時間とに於て多大の無駄を餘儀なくされることである。私達は案内を承諾して呉れた男が、獵のために一二度頂上近くまで登つたことがあると言ふのを聞いて、大した無駄なくして山頂に至り得べきを思ひ大いに喜んだのであつた。たゞ降路に就ては、室谷へ下るにしても、廣谷銅山(現在休坑)へ下るにしても、全く彼は知る所がないとのことで、是は絶頂から觀望した上で決する事にした。

小止みもなく降る雨が、夜更けまで軒を敲いて私達の心を滅入らせた。いくら雨乞に登る山だとして登らぬうちからかう雨を降らせるのは聊か非道いと愚痴も出たが、仕方がない、あきらめて寝る。

午前五時頃目が醒めた。耳を澄ますと雨は止んだらしい。爐に柁の燃上る音がバチ／＼と威勢よく聞える。朝飯の支度をしてゐるに違ひないと、床を抜けて爐邊へゆくと、いゝ天氣になつたと言ふ。筧の水に口を嗽ぎながら中天に残る曉の月を仰いで、遠く尋ね來た山の巡禮に與へられた山の幸を喜び合つた。

山に向ふ朝の澄み張切つた心、身體を驅廻ぐる血の躍り、それももう今朝丈け、明日は山を離れて

里に歸りゆくのだと思へば、人知れぬ淋しさも湧く。けれどもまた、暗いランプ、黒い米飯、重い蒲團、それ等の物を後にして、明るい町、そこには山の人達の目をみはるやうなもの、多いであらう、その町へ歸へる日を心待ちに待つてゐるやうなことはいかど、心の隅で何者かゞ私に問ふてゐる。はつきりした答への出来ないのを、私は寂しく思はずにゐられない。

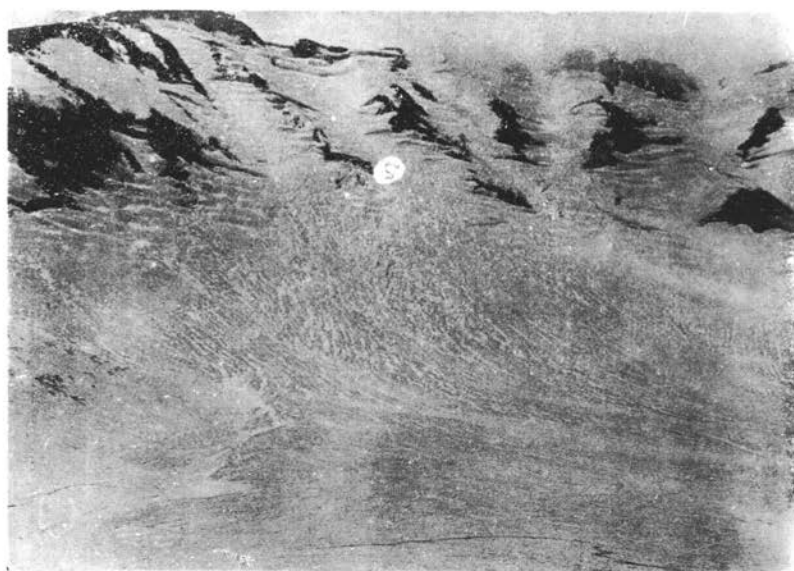
六時、案内に頼んだ家の主人を先きに、三條の部落を後にして、霧來澤キリキダの左岸に沿ふ露深い小徑を進む。金丸澤一帯の新緑が朝日に映えて、眠り足らぬ眼に眩しいほどの印象を與へる。小鍋岐を過ぎ、谷はやゝ豁ダイラらけ僅かな平に田などを見るあたりへ來ると、行手に遠く手前御神樂の巍然として聳えるのが望まれる。重合ふ尾根、それ等を蔽ふ闊葉樹林の滴るやうな若緑、その上に傲れる如くそゝり立つその山の姿、南面の雪壁は人を近付けぬかの如く急峻に峭立する。その描くスカイラインの力強き起伏、思はずも足を留めて私達は人の心に逼まつて來るこのおほらかな山を仰ぎ見るのであつた。胸を張つて長嘯する巨人にも似たる豪放な山容に眺め入る私は、自己の餘りにも小さく力弱さをつくゝ思はせられるのであつた。

大石田澤の落合で右岸に渡り、道は暫く河を離れ櫛櫛などの林の中を辿る。谷はやうやく通り地は雪に蔽はれた所が多くなる。やがて人の踏んだやうな跡もなくなり、流れに沿うた岩をへッルやうにしてゆく。前日の雨に岩のともすれば滑りさうなのに氣を取られてゐると、不圖蹣蹣の音が耳に入る。八乙女瀧へ來たのだ。瀧は狭くえぐれた岩の間を幾段にもなつて落ちてゐる。水量が少いのと、高さが大したこともないので、期待して來た程の壯觀は得られなかつた。名の示すやうな優麗な趣もない。八乙女の由來に就て案内の男に問ひ訊して見たが要領を得なかつた。臆測を逞しうするならば「ウヲドメ」或は「イヲドメ」が轉訛して「ヤオトメ」となつたのであるまいかと思はれる。

瀧の落口で小憩。瀧を過ぎると谷はまた幾分か豁らけ、兩岸には夥しい残雪が現はれる。瀧から五



む望を(右)山面鬼及(左)岳草淺りよ腹山門守



影撮氏男敏島藤 面北の頂山門守

六町も来た頃、澤は大きく二分する。右の方から来るものに入つて暫らくは雪溪の斷續に惱まされたが、それもほんの短い間で遂に谷は全く雪の埋むる所となり、水音はすつかり止んで、私達は眉に迫まつた來た前面の雪壁の素晴らしい輝きを仰ぎながら登つて行つた。兩岸からいくつも雪崩の押出しでゐることは、この邊の雪深い低い山々が崩雪期に入つてゐるのを思はしめた。仰ぐ岩壁に残る雪は、所々に裂目を生じて今にも崩落せんばかりになつてゐるのが多かつた。

行手を赤岩瀧に阻まれたので西に折れ、手前御神樂から南に派出する尾根の上まで、可成急な雪溪を攀ぢる。雪に反射する五月の陽光は随分私達を暑がらせた。やつとその苦が濟んだと思へば、尾根の上は頑強な灌木の藪だ。展らけて來た眺望を擅まにすることも出来ない。守門、淺草兩山では免れ得た藪潜りの苦も、此處では避けやうがなかつた。

千米のあたりであつたらう、吾立つ岩の二三間下から轟然たる音を立て、落ちゆく雪崩を見た。樹木を押倒し、岩を轉がし、大きい小さい雪塊が揉合ふやうに煙を揚げて落下するのは蓋し壯觀であるが、その落ちた跡の荒廢はまた實に凄絶を極めてゐる。

手前御神樂は雪のある西側を絡んで鞍部に出た、右側は切立つ岩壁に辛くも獅嚙みつく雪が、今にも崩落せんばかりになつてゐる。東方の笠倉山あたりからこのカール狀の二つの谷を望む壯觀は、蓋し想像に餘りあるものであらう。絶頂への山稜は猛烈な藪に蔽はれ足の踏入れやうもないが、幸ひ左側は残雪に藪も辟息してゐるので、左の方へ絡んで愈最後の登りに掛つた。打出澤源頭の急峻な雪の斜面、そこに點綴された闊葉樹の新緑、振返へる日尊倉山、貉ヶ森山の雪の耀き、軟雪の急斜面に苦しみつゝも私達は身を取圍む自然の美に、幾度か賞嘆の聲を揚げるのであつた。

軟雪でも雪上は藪の中に比すれば、ずつと樂である。その雪も遂に絶へて愈藪の中へ潜込まねばならなかつた。五時間半餘も殆んど休息なしに登り續けて來た身は、疲れと共に空腹を訴へて來たが、

灌木、偃松の茂みを尙三十分足らず泳がねばならなかつた。十一時半、笹の中に見出された三角標石の傍に、リュックサックを下ろした時にはほんとに疲切つてゐた。

見ゆる山々のあれこれを指示する友の言葉も聴かず、笹の上にぐつたり身を横へて、あくがれの山頂に達せし歡びを深く胸に膨付けやうと、私は高鳴る心を抑えしほし瞑目するのであつた。何物にも代へ難きこの大きな喜び。心に描きし、胸に秘めしその山の上に今私は立つのだ。言ひやうのない感激が身を驅めぐつてゐる。嬉しいやうでもあり、悲しいやうでもあり、淋しいやうでもある、感傷的になつた心。山を慕ひて山に登るものゝみが、この法悦境に入り得やう。貴いまでに純な心のときめき。書くべき筆を持たぬ自分が恨めしくさへ思はれる。

守門、淺草、さては朝日岳の峻峯も遠く遙かになつた。西南に當つては那須のあたりと思はれる山々の、幾重とも知れず重り合つてはつきりとは見分けもつかない。最も私達の目を奪つたのは、殆んど正北にあくまでも大きく高く廣く、夥しい残雪を擁して東北の雄たるに恥ぢぬ姿を見せる飯豊山塊であつた。上半身の全く雪に蔽はれてゐるのを見ては、流石に夏期に於ても残雪の豊富なのを以つて鳴る山と頷かれるのであつた。

頂上直下から大きく弧を畫く岩壁は素晴らしい景觀を呈してゐる。取付きやうもない嶮壁には雪もあまり残つてゐない。雪崩落ちて了つたのであらう。この方面からの登攀は不可能でないまでも相當の苦闘を覺悟せねばならないと思はれる。廣谷川兩岸の山稜には期待したほど残雪がない。それに廣谷銅山も廢坑になつて久しいと聞いては、北へ下ることは斷念せざるを得なかつた。

降路に就いて知る所のない案内の男は、晝飯を濟ませると荷を私達に渡して、遅くならぬ内にと下つて往つた。私達も疲れた身を起こして下りゆくべき方面を考へねばならなかつた。頂上の周圍は身動きもならぬ茂みで、之を拔出さなければ行先の様子も分らない。登路から推して、下りにも大分苦

しめられるかも知れぬと思ひつゝ、荷を肩にして頂上を後にした。午後一時。

三角點から十間も距つた所に小石祠を見出した。「社掌、大竹光保」とあるのみで、年號などは見當らなかつたからいつ頃擔上げたものか不明である。頑強な藪の中を四五十米も下つてまた雪の上に出る。頂上の北に隣りする突起の上に立つて、北西に派出する尾根を俯瞰すると、一〇四八米の三角點あたりまでは幸ひにしてずつと残雪が續いてゐるらしいので先づ一安心と荷を置いて、山頂だの、日尊倉山だのをレンズに入れ、愈下り始めたのはもう一時半に近かつた。この邊に杉の叢生してゐるのを見掛けたが、千三百米を超えてゐるから野生とすれば珍らしいと、之は後日武田博士が寫眞を見ての話であつた。

可成急な雪の斜面を驅けるやうにして下つてゆく、蕎麥谷の源頭は、守門、淺草のあたりに比べれば劣るが、まだ一面の雪と言つてよい。残雪の上に擴がる闊葉樹林の新緑の美しさを賞しながら、やゝに疲れた足を運んでゆく私の心の中では望みの協つた後の満足と、それに伴ふ一種の哀愁とが入り交つてゐた。雪が段々と少くなつて、ともすれば藪の中へ飛込みさうになるので、そのたびごとに樹の間を透しては雪を探しつゝ、縫ふやうに歩いてゐるため一向捗らない。七二〇米の圈を有する突起のあたりまで來ると、尾根の上には全く雪がなくなつて了つた。大沼池の方へ續く尾根には、杉の群生する小突起がいくつもあるらしいので、道を右の短い尾根へと取る。所々に人の通つた跡らしいものがある、雨乞ひに登つた道かも知れぬなど、思ひながら下つてゆく。澤音が漸く近い。袴腰山がいつのまにか間近く高くなり、その翠巒に傾いた夕陽が美しい光を投げてゐるのに私達は時の知らぬ間に移つてゐるのを驚くのであつた。見下ろす瀬戸澤の谷はまだ雪に埋もれてゐるのを見て左側の急斜面を滑り落ちるやうに下つた。果して谷は一面の雪であつた。夕べの色の漂ひ初めたこの深い谷には、雪の上を撫でゝ來る冷かな風が兩岸の深林を騒がして吹いてゐた。雪溪は右から瀬戸澤の本流が

合する所まで續いてゐた。雪溪から離れた私達は疲れた身を室谷まで十町餘の間、つめたい澤傳を餘儀なくされるかと思つたが、圖らずもこの合流點に木挽小屋があり、柚の通ふ道を見出した。

室谷川の河畔に出で、思つたよりも家數の多い室谷の部落を對岸に望んだ時は、既に日は沈み晴れ渡つた空に残る反映が水面にはかない餘光を投げてゐた。部落唯一の旅籠に腰を下ろした時には、草鞋の紐を解くのも憶切なほどに身も心も疲れ果てゐた。下り來し尾根の黒々と軒に逼るのを仰いで、言葉もなく私は今日一日の苦闘を想ふのであつた。

慕ひ尋ね來し三つの山、守門、淺草、御神樂。その三つの山の登攀を首尾よく終へて、旅の最後の夜の夢は圓かであつた。

山から里に下る日は、御神樂登山の御利益か、薄曇りの空は今にも泣出しさうな風情であつた。積もる疲れに懈怠るい身を起し、爐邊で親切な宿の心づくしの朝飯を濟ませ、七時この室谷川最奥の部落を後にした。河に沿うたり離れたりしてゆく道は、遠くに大日岳のあたりが夢のやうに浮ぶのが眺められるばかり、それも廣瀬の部落に入る頃からとう／＼落ちて來た雨のために見えなくなり、津川の町へ着くまでの單調な街道は飽き／＼するほど長かつた。

後記

この三山の内でともかく登山路らしいものゝあるのは守門山だけで、それも夏時は相當の藪に苦しめらるゝを覺悟せねばなるまい。他の二山に至つては登山路といふべきものは全くないので假令澤傳ひに登るとしても、澤を離れてからの藪潜りの苦は想像以上のものがあらうと思はれる。

然しながら年に依て異なるのは勿論であるが、先づ五月中旬までならば、驚くべき量の残雪にこの

猛烈な簑は全く屏息してゐるから、至つて樂に上下し得るのみならず、雪に蔽はれたこの地方の複雑な山谷の壯觀に接する者は、絶大な歡喜の情に躍上らずにはゐられないでせう。

守門南麓、淺草岳一帶の自然林、御神樂岳東面の岩嶂、共に山に入る者を喜ばせずには置かない。

五味澤と室谷の部落は其處に宿る山の巡禮を、淳朴愛すべき山の懷味ある暖かさを持つて迎へて呉れるのだ。吉ヶ平の傾きかけた旅舎に往時の繁榮を偲んで懷古の情に堪へぬ思ひをした者は、また三條の寒村に、生きんとするものゝ苦しみをまぎ／＼と見せられて、何物かを考へさせられるであらう。

過去の日となりしこの六日間を想ふとき、私は壯快な登山の追憶に胸を躍らせると言ふよりも、むしろのんびりした旅を沁々と懷しむやうな靜かな氣分に充たされるのを感じないではゐられない。

赤 石 岳 の 想 出

前 澤 政 雄

瀬 の 音

俄に豫定を變更して、午後三時頃、赤石岳の麓の村の大河原市場おほはらかはらいちばを、土の子(森識)とブラ／＼出かける。ちよい／＼行き逢ふ村人から

『復、岳へお出かけかな』

など、先を見越した言葉をかけられる。實は之が六回目、山家は一月おくりの盆も近い十一日、例年の通り天氣はあがつたぞと、明るい心持で歩を運ぶ。

市場を出て、半道足らずの上藏まで來たら、もう汗しつとり、平治元年の建物といふ福德寺の縁に腰を下ろして一服吸ふ。大きな公孫樹の右から向うへ赤肌の赤石岳が悠然とそゝる。

道は小湫の流を下にして、遠く山の腹をうねりながらめぐる。人夫も連れず二人ぎり。尤も簡易な夜營準備をして、荷にするを厄介にして身體に着けた黒羅紗の冬服へ、傾きかけた日が横手の反射を加へてチリ／＼煮え込む。汗は留途なく流れる。釜澤で小河内川を渡り、三正坊を過ぎると、僅に通じる小徑一つ、女郎花が殊更明るかつた。萎々と茂つた葛の葉の間から、燃え立つやうな撫子がチラ／＼動いた。

暮れかける時分、道は二つに分れた。上は高山へ。

『此處だつたかなむ』

土の子は振り返りながら駄目をおして、俄に強くなる勾配の『く』の字坂を下りかゝると、行く手に黒い物が動く。私はつか／＼傍へ寄つて、

『やあ、お老爺、お頼みよう』

と、顔をすりつけるやうにしてどなつた。もう水音は近く高い。それに湯の主人所平老爺は耳が遠い。『ヤツハツハ、よくお出でたなむ。今朝おかみさんが一人たつのを送つて、道を作りながら歸るところだが、今夜は一人ぎりか知らんと思つて居たのに。やれ嬉しや。さあお出でなんしよ。私も直ぐ後から参るで……』

二人は、とつと先に下りて、湯場の前の竈から口移しに冷たいのを一杯やり、途中から提げて來た葱と馬鈴薯を洗つた、傳手に身體を拭いて居ると居爐裡から赤い舌が展びて、煤けた障子を賑やかに彩つた。

『今日は誰もお客が無いので湯をたかなんだが、岳のお歸りには、たいてお待ち申します』

『明後日か其の次の日には歸るよ』

『はあ、さうかなむ。丁度お天氣があがつたで運がいい。降つちや何とも仕ようがねえで……』
何十年と此谿底に棲んで居る老爺さんの、天氣の保證にすつかり安心してしまつた。

土の子は器用な手つきで調子よく胡瓜をきざむ。汁は煮たぎつて快く食慾をそゝる。まあ一杯といつて老爺さんのさしてくれた焼酎を一寸嘗めて箸を持つた。

『あゝ、賑やかで嬉しい。私も一しよに戴かず、ヤッハハハ、』

と箱膳を出した。直き此頃連れ合の老婆さんが亡くなつてから全く一人ぼつち、此山奥の一軒家に小澁の瀬音を聴きながら箸を動かして居ると、今迄の人のさゞめく世界は、夢の帳を隔てゝ見るやうな淡さに遠退いて、此處ばかり孤立した小さな天地に、押し縮められた沈黙が、三つの生を嚴に見守るやうな氣がした。

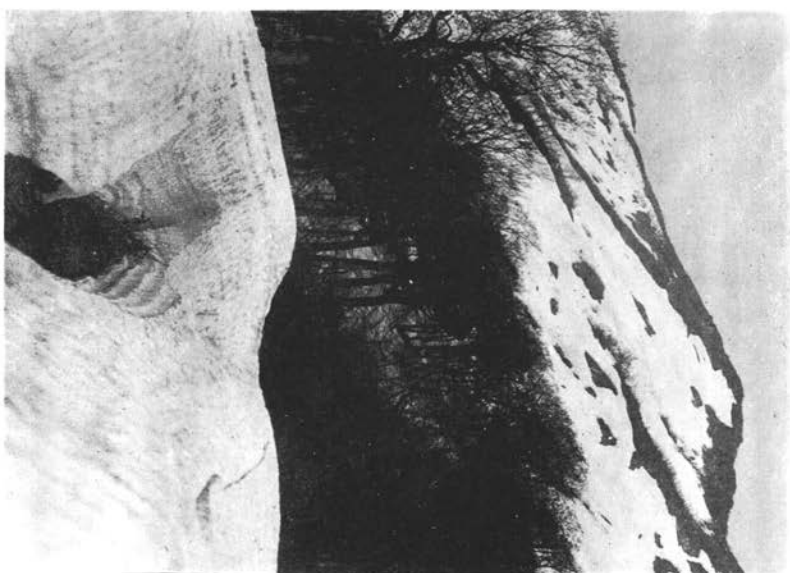
徒 涉

『それではお大事に、お湯をたいとるでなむ』

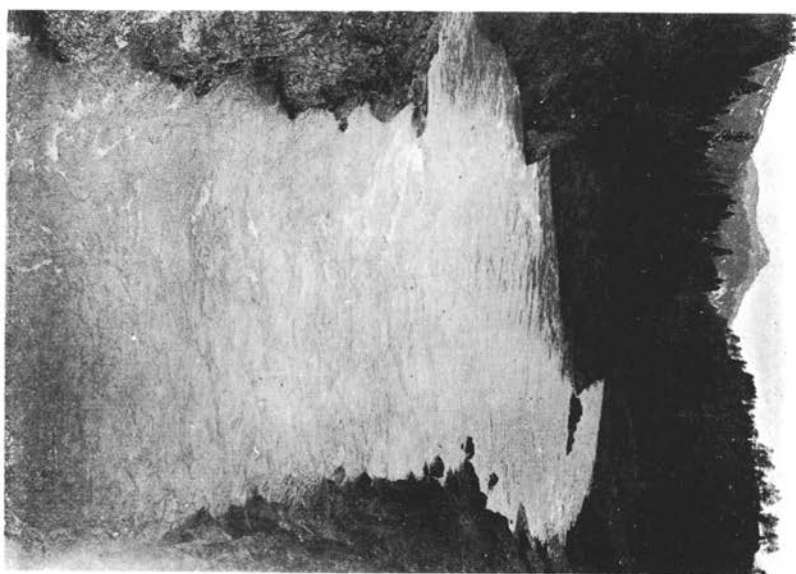
門口まで送られて、母屋の前に建てられた浴舎の裏手をト、ト、と下りると、もう河原である。蚤に責められて眠り足りなかつた眼に、冷いやりと旦の氣が泌みる。

足を落すべき石へ石へと、たよりを求めて溯る。振り返つて見ると浴舎は尾根に隠れ、兩岸には額の先から強い傾斜で天を突きながら、翠に凝つた樹立がコンモリ迫つて居る。『此處でやらう』と土の子をうながす。もう第一の徒渉にかゝらなければならなかつた。太古の巖をくゞつて、又新しい生活に遷らうとする強い流れが、先驅者の狂熱を以て遮る物を噛み立てゝ白泡を吹く。峽を傳ふそよ風は、人里の親しみを知らず、凡てを嚴肅に封ずる堅い冷たさを持つ。

手前御神樂より絶嶺を望む



上横田附近の只見川



易な事でないと言つての経験を明らかに見た。昨夜の蚤からの睡眠不足が祟つた。

『天氣がいいから幸福だ』

斯ういつて、今から豫想せられる一切の難場を切り抜ける困苦を消さうとしたけれど、瀬に逢ふ毎に之は裏切られてしまつた。

な つ あ か ね

日がさして來たので暖になつた。小鳥の唄ふのが胸を爽かにさせる。

アツバメシバミが誇らひの翅をかゞやかせて石に止つたが、捕蟲網を出さうとは思はなかつた。

サカサハチモンジが幾つも見をやすめたけれどもチラと見たばかり、ナヨ／＼と飛ぶ幾多のシリアダムシをさへ振り捨て、先へ／＼と氣ばかりあせる。

俄に闇と目先が開いた。キダ澤口である。此處からの河床は際立つて急勾配となる。それから二十分程で廣河原となつた。右から來るフツ川を涉つて腰をよろし、一服してから晝にした。

左から來るキド川と荒川と、其の上を仰げば、牽牛花の葉を倒に並べたやうな鋭い切れ込みを空に突き立て、此方に向つた面が、ガイッといたましく搔きむしられて居る。

『あれが、荒川前岳(西河内岳)の一部だよ』

『偉いもんだなあ』

土の子は、團飯を噛みながら凝と仰いで居る。私は、そこらに轉がつて居る見上げるばかりの岩に眼をつけた。そして、直ぐ下流を眺めて、水面より二丈も高い岩の凹みに残された砂利や、奇麗に長く作られた高い砂のバンクに眼を吸はれ、もしや歸りに……と雨する時の荒暴を、其れから其れと聯想せずには居られなかつた。

空を仰ぐと、やはり美しく晴れて居た。あたりには愛らしいナツアカネが柔和に舞ひながら、テラ／＼翅をかざやかせたり、自分の影を趁ふやうにスウツと下りて石に張り着く。屢々川原の水溜にチヨシ／＼臀を突き入れて卵を産むのを見たが、あれが、よしや孵化したところで此荒暴の水に……いや現に此通り數多の蜻蛉となつて居るではないか。

私は、しげ／＼自分を心のうちで見守つて、顚顚にトットと脈打つ血の急がしい循環を氣にしながら空を仰いだ。白い雲が一つ、高山の後の方へ擴がつて行く。

『さあ出かけやう』

それから、右手の森林へと吸ひ込まれた。

森の香

シ、ガシラを踏み、艶々したイハカミに足を撫でられながら登りにかゝる。苔や落葉が碎けて土に歸り行く屍の上は、川原をせりあげて來た足の裏には、快い柔かさを傳へて來る。

上へ、上へ

永くこがれて居た或る物が頻に急き立てる。上へ、上へ。けれども、脚は次第に重くなる。ぺたりと仰向になつて、其の儘の褥に、木立の枝深く差し交した繁みの隙から空を透かして、遠く奏でる谿流のせざらぎに取り卷かれ、頭の上から此閑寂を刺すふくらみのある小禽の唄を聽いて居ると、眼は自ら閉ぢて、身體はピツタリ地に吸ひ着けられた儘、何時としもなく音無の國に連れて行かれる。

『出かけまいか』

前途を案じる土の子に促がされて、又デリ／＼登る。額から冷たい脂肪汗が流れる。頭の何處かがむづがゆいやうになつて、眼は閉ぢ相になる。眼が閉ぢようとする時、足を強く踏みつけた刺激を頭

に盛り返して、眼を大きく見開いた刹那、ふと暗い死の影に對して、打ち震ひつゝ攀ち登らうとする自分の姿を、まともに視た。

やにはに腰をおろして、膝に兩肘をもたせて前へダラリとした。漸く、靜に、冷たい汗を拭いて寶丹を甜めた。欠伸を一つすると稍身體が引きしまつて來た。

『僕の親父は不時の過勞から頓死してしまつた』
土の子は眼を光らせて

『そんな事を考へるからいけない』

左様だ。忌むべき安息に馴致される心は、疲勞を殊更尨大する。そして、其の灰色の外廓に身を潜めて、はかない感傷に浸る。

と見る、其處にはゴゼンタチバナが明るい眸を親し氣に向けて居た。

消え去りし浪の穂頭つゞり行けば

あまりはかなし吾といふもの

敬虔の搖籃に在りし明るさを

離れし事のをぞましきかな

扉の隙

フナクボで休む。荷を軽くする爲、寒さにさいなまれぬ爲、羅紗の上衣とズボンとを着けた。其の上大桐油紙一枚は土の子が背負つてくれたので、俄に身輕さを覺えた。一歩々々、愈靜に進む。

『靜なものだ。何にも音が無い』

斯うつぶやいて、土の子は、天狗の髯のやうなサルヲガセを枝に垂らした小暗い樹立の中に佇立して自然の波動の微細をも受け容れようと凝念した―その姿に少時私は見惚れて居た。

木の根を誇ぎ、石を乗り越えデリ／＼進むと、肌あざやかな岳樺が出て來た。キド川の方へ、一氣に走つた尾根の面は其れで包まれて居る。其れは恰も太い赤珊瑚が枝を差し交はして、心の故郷を守る第一の門とより外思はれない。右に走つたフッ川の尾根も其れである。私共は今、其の門の扉の隙を見出して、つゝまじやかにくぐり入るところである。

其處から、巨人が打ち碎いてバラ播いた石片が胸を衝いて上の方に延びて居る。

急に元氣づいた私は先に立つて、息をはづませながら石の洪水を乗り越えかゝつた。

間も無く石楠花を見た。廣やかなツヤ／＼と照りのある其の葉は、誠に不思議な力を以て私に近寄つた。やがて偃松を握つた。こそばゆい手の感觸が全身へ電撃を傳へたので、キッと身が引きしまつた。私は指して『あれが廣河原で一部を見た前岳だよ』

『フォーム、いよ／＼來たな』

フォームに力のはいつた土の子のうなづきは、期待にそぐふ原始の姿が、親接の瞬間に強い握手をさせた事を直覺せしめた。

私はいよ／＼元氣づいて、偃松の切當をたどつて稍平なところに出た、俄に萬竅は怒號する。急いで笠を下ろしてしつかり握つた。

心の故郷

此處一帯がダイシヤウジ平である。其の左手の凹みを下へ／＼と行くと、奥西河内の水源地に、自然が築いてくれた齋戒の道場がある。之をダイシヤウジ平の岩小屋と呼ぶ。岩小屋といつても、唯僅

に風をよける窪地に過ぎないが、近くに何時も絶えない水が涌いて居る。

先づ桐油紙で屋根を張つて、上から偃松で押さへ小枝を中に並べて居る間に、土の子は米を洗つて炊事にかゝつた。天氣がよい。

手許が少し暗くなる時分、悉皆とゝのつた。偃松の上に着莫産を敷いて、足袋を新に履き替へて座敷に上り、前に少しの焚火をしながら、身體を緩々伸ばして楽しい夕餉に向つた。

『いゝね』

『フーム』

それつきり、後は黙つて箸を動かした。

豫期以上の満足に、張りつめて居た氣も緩みを覺えて、箸を措くか措かないかのうちに倒れた儘、何の記憶も無い時が流れ去つた。

『寒くなつた』

といふ聲で目が醒めた。二人は前後して起きあがり、偃松を加へて火を吹きつけ、メラ／＼とあがる炎に時計を見ると、未だ十二時にはなつて居ない。

天氣はつと再び這ひ出して見ると、空は雲に閉ぢられて居たが、全くの闇黒ではない。北から東へ突き出した荒川岳の一族は、一きは黒く王者のやうに肩を聳やかせて居る。それに較べて、一點の黒子にも當らぬ此岩陰を頼みにして、更に小さい我身を一大事と守つて居るのである。

併し、塵にまみれた昨日の身體ではなかつた。人間と人間との交渉が、めまぐるしい迄展開される時、不識の間に恐ろしい勢で彩つて行く自負と虚偽とを離して眺められた。

卒然として地球の大變動を想ひ出した。

『日は毛布の如く黒くなり、月は血の如くなれり。天の星は、無花果の樹の大風に揺られて未だ熟せ

ざるにその果の落つるが如く地に隕ち、天は巻物を巻くが如く去りゆき、山々島々みな移りてその處を離れたる』

其處に何がある。自負は……虚偽は……、けれども生の執着はある。ノアは難破船から助からうとして、人肉、しかも我が肉を割與する約を蛇に結んだ。

『地を滅す洪水再びあらざるべし』

生は此處に落ち着きを得た。其れから又自負と虚偽とは助長せられた。ノアはガブリエルの勸告を容れて、肉を割與する代りに蛇を焼き殺したではないか。嗚呼、山に歸れ。岳に歸れ。此處に心の眞の故郷が待つ。

頂上へ

うと／＼眠りに就いて、又寒さに起された。

『降るかも知れない。早くしよう』

盛に火を焚きつけておいて、氷のような水で申譯だけに顔を洗つた。

サツ／＼と白い帳が音を立て、過ぎながら、あたりを凡て濕ぼす。二人がボカアンと身體をあぶりながら眺めて居るうちに全く明るくなつて、やわらか味のある碧空が仰がれるやうになつた。

土の子は鉛筆を削つて外に出た。其處から見える荒川前岳（西河内岳）、中ノ岳（魚無河内岳）、東岳（惡澤岳）、千枚澤ノ頭と、矗立した素肌のスケッチする間、私は依然として焚火にあたつた儘、空虚になつた心を抱擁して、空の明るみへ面を向けて居たばかりだつた。

身仕度をととのへて、取り附きの斜面を少し登ると、天龍川を隔て、木曾駒の連峯と其の後の御岳とが現はれた。足許に心を配つて一步步々攀ぢる。タカネツメクサやミヤマミ、ナグサが、いぢら

しい姿で積み重なつた硬砂岩の傍に息をして居た。短い莖に大きな濃碧瑠璃の冠を着けたチシマギキヤウが幾つも並んで震へて居た。赤味をこぼしたのはヨツバシホガマやミヤマシホガマ、白つばいミヤマウスユキサウは艱苦を凌いだあでやかな人を想はせる。

尾根の頭へ出ると、烈しい風が駿河の方へ駆けぬける。其の方向に富士があらはれた。

『ホウ、大きいなむ』

と、土の子は坐りこんだ。

先の窪地へはいると、バツタリ風は消えて、蒸風呂のやうに暖く、青い毛氈の中に點じたウサギギクは、まぶしく鮮かな黄色を空へ吹いて居た。

『頂上は何處？』

『其の先の高い小赤石を越すと、もう百尺ばかり高いのが出で来る。其れだ』

『未だなか／＼あるなむ』

誰でも左様思ふ。登り盡したかと思へば又下つては次の隆起を越えなければならないから。

かれこれ一時間ばかり費してから、二人は赤石の頂上に立つた。私は目標のつけ易い荒川から、鳳凰、農鳥と連なる山々の名を指示した。笠にまつはる風がグラ／＼頭を揺るがす。

『風が眼に泌みて、しやうがない』

土の子は、うるんだ眼をしばだゝいてつぶやく。東へ五六歩下ると風は無かつた。

土の子は寫生に取りかゝる。私は尙も四圍の連山を、と見かう見して居ると、何處からともなくピグ、ハ、ビィ／＼となつかしい聲がする。二人は耳を傾けた。

『あれはつ』

『雷鳥だよ。子連れで居る』

土の子はスケツチを止めて、フツ川へ續く南の方へ靜に脊梁を下りて行つた。

此時、駿河大井川の谿谷から、一つの黒い物がナギに沿うて空中を此方へ上つて來た。近づく儘に眸を凝らせばミヤマカラスアゲハであつた。私の頭上高くいよ／＼信州へ乗り越えやうとした時、烈しく風に吹き揚げられて、空高くクル／＼と飛ぶや否や、風の方向を示して矢を射るやうに駿河の方へ消えてしまつた。

と見る。又元のナギをかすめてヒラ／＼登つて來る。今度はと注視して居ると、も少しと思ふところで揉み揚げられて吹き飛ばされた。又やつて來る。四回まで繰り返したが其の目的を達せず、暫く待つたが又と此遊戲は見られなかつた。

『雉の雌のやうな鳥だなむ』

土の子は、何時か歸つて來た。

『いゝ天氣だ』『本當に……』

二人は相並んで身體を横へた。そして黙々として富士のかゞやく肌を眺めて居た。

斯う記るしたのは、大正四年八月の事で、五年亦登り翌年流感に罹つてから、すっかり弱くなり、いよ／＼赤石も七回でお別れかと凡そあきらめをつけて居たところ、生きのびた身體が又若返りしたらしいので、先づ試みにと去年七月木曾駒を宮田口から登つて赤穂へ下り、續いて八月初め木曾駒山脈の一部安平路を訪ねてみた。

之ならといふ自信を得たから、今年（大正十四年）七月廿二日、東京駒場農大の丸毛（信勝）博士一行の案内旁雨の中を攀ぢ、八月三日下伊那農學校の生徒を連れて又赤石を訪づれた。

成る程變つた。僅此處數年の間に、著るしく人の香が沁みてしまつた。をりもをり梅谷長野縣知事



影堀氏邸一源川宮は(夏)鳥 雷 影堀氏勝千三川鹽 (月五)岳内河西るた見りよ平寺聖大

が赤石山系北半の縦走を行ふといふので、此處彼處重なる箇處に假橋が出来た爲に、第一の難關に數へた小湫川徒渉も四五回で済み、ダイシャウジ平には九尺に九間の小屋も設けられて居た。それだけ心安だてになるところから、以前のやうな嚴肅な心持になり惡くいので、古びた登山記も反故にするに忍びず、此處に發表する事となつた。

唯此九回目登山に嬉しかつた事が一つある。其れは雷鳥に關する事である。

八月四日の朝、此日荒川山塊を訪ねる日程になつて居たのでダイシャウジ平の小屋を出て、直ぐ北側の傾斜面を攀ぢ、それから隆起を二つ越えて下ると、荒川前岳（西河内岳）へ續くガレの裾にお花畠があつて黒百合はかなり多い。其處迄來ると、グ、グ、と聞える。久しぶりで雷鳥に逢はれる喜びを包んで、お花畑の斜面へかゝらうとする時、偃松の傍を逍遙する彼を認めた。

だん／＼近づいて三間ばかりの距離となつたが他へ立ち去る氣色はない。私は腰をおろした。

『宮澤君一枚』

人夫は寫眞機をおろした。三脚を展ばす時、日光を反射するのに稍おどつて、グ、と鳴きながら立ち去るけはひを見せたので、横を向きながらビ、と雉の眞似をやつたら、きつと頸をのばして振り返りつゝ三四歩此方に近づいた。斯うして居るうちに宮澤君は自由に位置を變へながら間近に寄つて三枚も寫した。

たゞ／＼通人は、雉を捕へてくゝりつけ、親鳥をおびき寄せての方法も試みられるが、育雛期であるならば、左様な無理はせずとも、此手でカメラに収められる。宮澤君はすっかり悦に入つて、

『かあいゝ鳥ですねえ。今度の收穫は之で十分です』
といつて居た。

五月の赤石岳

鹽川三千勝

去年は不運にも感冒に犯されて、且君一行と共に赤石に登山する事を得なかつたが、何時かは踏破したいといふ希望に満ちて居た。今年（大正十四年）二月三峠山に遊んで、飽く迄も清澄な碧空の奥に燦く赤石連峯の秀容を見出した時以來、此の意圖は益々募る許りであつた。四月中旬爺岳の登山を終へて後も、壯心尙止み難かつたが、適當の休日なく、又主峯に取り付く迄の時日と勢力の少なからぬ事と、天候が割合不順である爲等の理由から、同志の糾合困難を極めて實行に悩んでゐた。幸に石原が行かうと言ふ事になり、切めて三人位の一行にしたいと思つたが、結局二人切りで兎も角も出發と定めた。で早速大河南市場へ葉書を出し、森上智司を人夫に備ひ度い旨を言ひ送つた。

五月六日。午後十時飯田町驛發。先輩五氏は見送りに來られ、種々注意を與へて下さつた。登山に際し、下手の横好き乍ら寫眞撮影を趣味とする私は且君から理研フィルムターを驛で手渡してもらふ約束であつたが、僅か數分の差で汽車に間に合はなかつたのは如何にも残念だつた。五氏とは新宿で別れた。星降る武藏野の夜を驀進する車中に二人は暫く雜談に時を移したが、明日の仕事を考へ、八王子を過ぎる頃にはいつか夢路を辿つてゐた。

五月七日。熟睡に一夜を過して日野春で目が覺める。目前に峭立する甲斐駒ヶ岳の積雪は意外に多量で一行を喜ばせたが、八ヶ岳山麓から染め始めた著しい朝焼の眞紅は、天候を何より懸念する登山者を心配させるに充分であつた。辰野驛で伊那電車に乗換える。其の客車は省線電車と同様で誠に心持よい種類のものでは。變難たる朝霧を透して僅に見ゆる木曾駒連山の雪を賞して居たが、何時か

假睡し、目を覺せば最早上片桐驛に着いてゐた。狼狽して下車する。(午前九時四十分)。

霧は漸く霽れて、春とは言へ重荷を背にする身には可成の暑さを感じ、汗の自然に滲むのも止むを得ない。凹地を越す事一度、鶴部、松川の小部落を経て天龍河岸に出る。これ迄には數回道を間違へたが、約一時間で橋の袂に達した。連日の雨に増した河水は、河原を極端に狭め、滔々と奔下してゐる。橋を渡つて右折し、暫くの後左折して間道に入る。桑畑を横斷し、雜木林の下を迂曲しつゝ登る事十數分で再び本道に合する。さつぱりした松林も長くは續かず、單調な緩傾斜の登りを大鹿村の方へと迫る。進むに従ひ僅に圓頂を現はしてゐた聖岳も奈部を過ぎる頃には復た姿を沒し、道は兩側から崖壁の迫つた澤の底に入り、尙も蛇行を續ける。櫻の未だに満開なのは流石に山國に入つたといふ感じを強めたが、残念な事には連日の降雨に全く色が褪せてゐた。新緑に打交る蹣跚の淡紅色も、道ばたの淙淙たる小流と共に、汗に滲む一行の元氣を鼓舞する。下峠の附近で晝食にする。少憩して後再び單調な登りを繰り返し、柄山の部落を右に瞰下して、峠に着いたのは午後二時であつた。一たび回復の兆あつた天候は再び惡化して、今にも降り出しさうである。口でこそ明日の天氣が今から解るものかなと言ふものの、矢張心細い。まづ明日は雨だらう。降るなら早く降つてしまへと念じつゝとある茶屋に一休する。一杯の水に渴を癒して再び歩を運ぶ。暫くして小澁川の波光が遙か翠嵐の下に輝くのを瞰下した。道は急傾斜の山腹を絡み、迂曲に迂曲を重ねて進む。茶屋から北條坂の上迄は實に長いと感じたが、初めの日で肩が慣れぬ爲でもあつたらうか。坂上で一休する。此處で初めて赤石の厩大なる姿に接した、尤も頂上は密雲に秘められてゐた。走る様にして坂を下り、暫く行くと右から清冽の流れが主流に合するを見、飽まで掬んだ。蘇生とはこれをいふのであらう。桶谷で川を渡り、ひた歩きに歩く。道は木材搬出用のトロに沿ひ、斷崖の横を穿鑿して進み、小澁川の急流は脚下に玉を散らしてゐる。けれども前途を急ぐ疲れた身には、山水の美に陶醉してゐる餘裕はない。一時

間の後遂に大河原に著いた。丸川旅館に投宿する。(午後五時)。

夕食後隣に住む智司を呼び、荷物などを取りきめ、岳の様子を尋ねる。彼は中肉中背、煙草はのむが酒を好まぬと言ふ屈強の若者である。軍隊に居た事があるとかで、地圖も大體讀める。雪の山の經驗こそないが、此の地方で信賴出来る者の一人であらう。前澤市次郎と云ふ老人も、齡七十を越えてゐるが、陸地測量部員の案内をしたことがあり、赤石を中心とし、惡澤、兎附近へ掛けて非常に精通してゐるとの事である。此の他吉川某なる者が人夫として適當らしいが、詳しくは知らぬ。

準備品に付いて概略を記せば、次の如くである。

一、防寒具。夏季北アルプスに野營する程度の外に、スエーターを一枚餘分に持った。出来る事なら寝^{スリーピング}袋^{バッグ}が好いが、防水布か油紙の様な耐風性の物を持つて行く事は是非必要である。

一、天幕。二人用のものに三人無理に寝た。荷を輕ふする爲である。併し小屋では、張る程の場所がなかつた。

一、標。輪標と金標を併用。大河原には爪の長いのが無いから、人夫用の標も持つて行く事は注意を要する。

一、ピッケル。

以上が重なる物で、全行程を通じて、網を用ひる様な難場は一つもない。

赤岳會の人が晩に訪問された。大河原に本部を置き、赤石登山の世話をし、且宣傳に努めるのがこの赤岳會である。

八日。漸く持ち堪えて來た天氣も、未明から遂に雨になつた。朝食を終へた所へ森上が來て、「何うなさいますか」と尋ねる。石原と相談の上で滞在と答へる。切めてもの腹癪せに、紅茶や、キユーブを盛んに飲んだ。晝過ぎからは篠つく雨となり、河原は濁流に蔽はれ、流木は盛んに下つて來る。徒

渉は先づ見込がない。「明日は高山を迂回しなければなるまい」などと話し合ふ。

單調な宿屋の滞在は、何うしても空と睨み合ふ時間が多くなる。先程から幾度ガラス越しに雲行を凝視した事か。併し小降となつた以外、目に見える變化は少しも現はれぬ。五月に大雨は永續せぬものと決め、明日の好晴を、不安の心の内にも念じて床に入る。

九日。雨は全く霽れて雲の片影だに無く、曉の微光が、かすかに搖曳してゐる。靜かな朝だ。只小澁の流れのみ滔々の音を立てゝゐる。

橋へ行けば岳が見えるとの事に、顔を洗ふのも待遠しく、揚子片手に宿を出る。智司も家を出て此方へ来る。「雨で大分少くなりました。大聖寺寄りの方は岩が少しも出てゐなくありました」と雪の少くなつたのを残念相に、又安堵した様に、軍隊言葉で云ふ。併し去年とは比較にならぬ程多いさうだ。

宿に歸り、朝食を終へたのは午前七時である。雲は片々として動き、山歩きに適當な、暑からず寒からずの天氣となつた。小澁川は相變らず濁流で、昨日の名残を止めてゐる。仕方が無いので徒渉を斷念し、高山を迂回する事に決した。

七時四十五分出發。緩勾配を登り、羊腸たる山道を小澁川の北岸に沿つて進み、上藏を経て、更に進めば、釜澤の部落が眼下に展開する。急傾斜を走り下り、釜澤の怪しげな橋を渡つたのが九時十分。神社の向ひ側にある獵師の家に腰を下し、ウドを生のを、酢に漬けたものを馳走になる。一寸苦味はあるが、捨て難い味がした。四十分程休んで出發する。

前茶臼、奥茶臼の水を集めて流れるハンノキ澤の合流するのを右に見て、小澁温泉道と別れて爪先登りに喘へぎ登る。道の再び分れるのを右へ取り鑛泉の附近へ落ちるアカベ澤を過ぎて、枯落葉のカサ／＼言ふ音を喜びながら尙も進み、板屋谷へ出たのは一時四十五分である。伐採に人夫が入つてゐ

るので、事務所と覺しき立派な小屋がある。今も途中で此處から市場へ下る人に出會つた。

橋を渡つてからは、二千米近くまでぐんぐん登り続け、丸山に源を發するキダル澤は遙か下の方に見下した。今日唯一のまとまつた登りで、二三回ジクザックを登ると、必然的に腰を下さなければならなかつた。

所々に伐採の小屋を見る。千古斧鉞を入れぬ大密林は無殘に切り倒され、氣味惡くも白膚を晒した木材は四圍に散在して悲惨である。時には道も踏み迷う程に荒れ、曾ては懷しき香を送つた薜苔の群も全く乾涸びてもとの面影は見るよしもない。止むを得ないとは言ひながら、大自然と面接する事によりて唯一の喜悅を感じる吾々は、轉々涙を禁じ得ない。

道が少し下り氣味になり、森林の下の矮生の笹をかさ／＼分け歩けば、暫くにして高山澤に出る。高山の南斜面の水より成る澤で、ガレの記號より上流に出た。少憩して食事をとる。智司は八貫を負ひ、加ふるに道が荒れ、倒木を踏み越え踏み越えして行くので、意外に時間を要したのも止むを得ない。直ぐ下流に瀑が懸つてゐる筈であるが、鞆鞆の響が聞える許りで、姿を見る事は出来なかつた。この澤を境界に國有林となるので、始めて美しい森林美に陶醉することを得た。涙ぐましい喜に満ちる。道は益細くなり、荒れては來たが、何時とはなしに歩も進んで井戸澤の岸に出た。とある岩に腰掛けて休む。西河内岳の西斜面の磊々たる岩の中から流れ出る水が、次第に集まつて此の澤を形成するので、豪雨にも濁らない爲に此の稱があるのだと、智司は説明して呉れる。

數町を川に沿うて下つてから對岸へ渡り、又荒川をも越えた。河原の、唐松叢り樺の喬樹群れてゐる所を一夜の床と定め、邪魔な石を除き、枯草を敷いて天幕を張る。五時五十分。随分時間を費したものだ。小澁湯から徒渉して來れば、午後二時頃にはゆつくり到着する筈の所なのである。

緑の壁を回らした峡谷の奥底の夕方には、夕燒の華かさがない。突兀として、西河内から西北に蜿

る國境の山稜が、僅にバラ色に染まつたのを名残として、夕暗は靜に忍びよる。何處からともなく現はれた霧は集團をなして、荒川を消し巢澤岳をも蔽ひ始める。先程までキラ／＼と燦いて居た星の瞬きも掻き消され、どんよりと夜の幕は吾々を壓し付ける。焚火の光のみ、ゆら／＼として明る。山に憧憬れる三人が靜かに、其れから其れへと、山の神祕を語り合ふ内にも、夜は遠慮なく更けて行くのであつた。

十日。何時頃だつたか、焚火のブス／＼云ふ音を聞いたが、再び目を覺した時には、午前四時二十分であつた。直ぐに食事の仕度に取り掛る。水くみに行くボンヤリと明滅する提灯の光が、岩を越え、岩を越えて、遠ざかる様は、霧の朝に似合はしい。思はず薪伐る手を止めて見とれる。滅入りさうな曉だ。瀬の音のみ淙々の音を揚げ續けてゐる。

人手が少いのでなか／＼思ふ様に抄らず、出發は六時半になつてしまつた。河原石を飛び越えながら、暫く溯つて尾根の道へ入る。入口は雜木が茂つてゐるので、案内無しでは非常に求め難い。木陰には、所々に、枯草や落葉に汚れた雪の横はつてゐるのが、朦朧と見える。

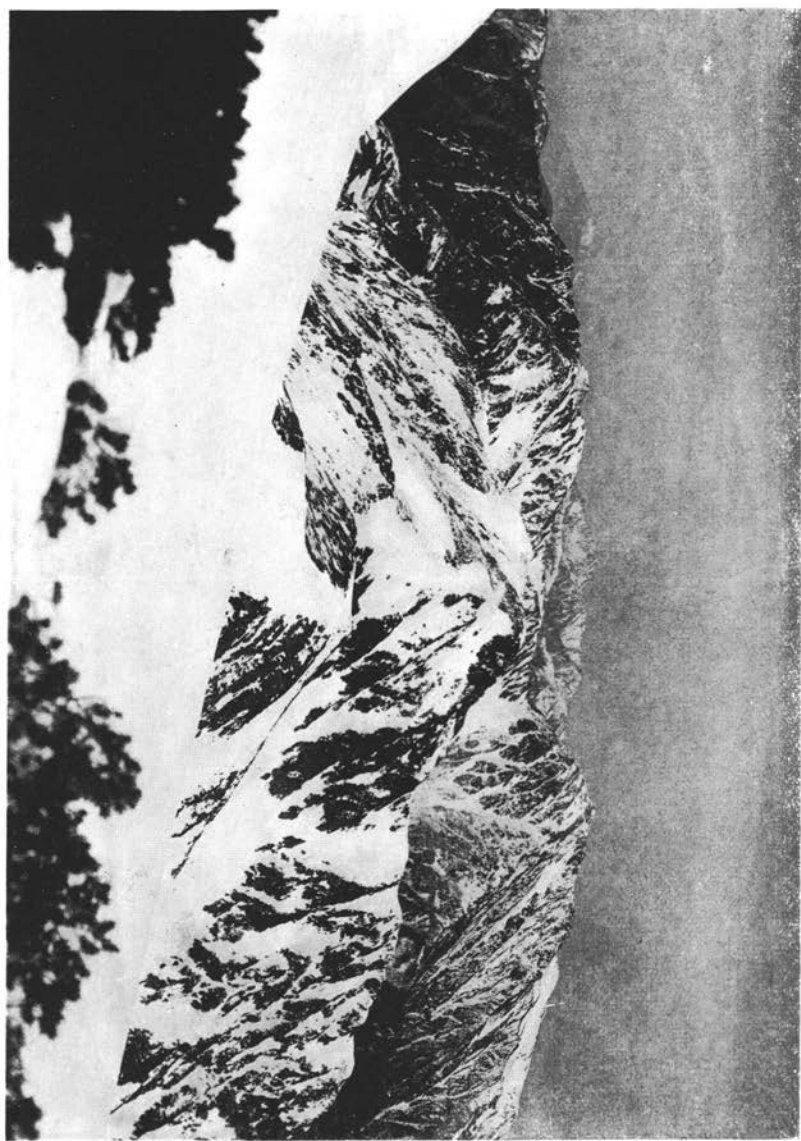
三十分も歩いたかと思はれる頃、合流點から登つて來る路と出會ひ、完全に尾根の背へ出た。智司は荷が重くて、後れ勝なので、一緒に登ることの不得策なのを考へ、此處で別れて、二人は先へ行く事にした。

道は瘦尾根の上を、森林の下を、霧の彼方へと消え、行者岩と云ふ、里で豫め聞いて居たので其れと肯かれる様な貧弱な岩をも過ぎた。汗をかいいた様にじめ／＼した岩、其の岩に蔽ひ被さつた蘚苔の蒸れる様な匂は、如何にも深山に入つたと感じさせる。可成急になつた登りは、躊躇なく到る所で腰を下させてしまふ。と木々の梢からサルオガセの奇怪な姿が垂れて、少年時代に讀み耽つた御伽話の、魔女の住む森を思ひ出させる。

一八〇〇米突の附近からは、北側の斜面は急に雪を増して、更に百米を登つた時には、輪樑が無くては、倒木の間に膝迄落ち込む程になつた（八時二十分）。先程から少しづつ、動く氣配を見せて居た霧は、此頃一時に霽れ始め、思はぬ下の方から青空が顔を出す。一時間の後には、巢澤岳の圓い女性的な姿も、旭光に輝き、西河内岳の赤黒い崖も、碧空にくつきりと浮び出した。つい快哉を叫ばずには居られなかつた。尙も絶えざる登行の努力を續ける。が行けども行けども森林は盡きない。荷が割合に重い私は、石原の平氣で歩いた跡でも、不意に落ち込んだりして、無駄な努力に思はぬ疲労の度を加へた。舟窪から左へ行くと教へられて、充分氣を付て歩いたが、明白にそれと指示される所に出合はず、森を透して青空が近くなつたと思ふ間も無く、樺の林に出た。多年風雨と戦つて、押し付けられた様に曲りくねつた樺の、膚も褐色となつて、點綴してゐるのを見ると、頂も近いと暗示される様な、鼓舞される様な氣持になる。森林の掩護の下に、漸く軟さを保つて居た雪は、全く硬くなつたので、金樑に換へた。

樹枝の邪魔が除かれて、初めて空容を現はした荒川岳の峨峨たる岩壁を、左手に賞しながら、地圖の約二千米突線に沿うて、雪溪を横ぎり、幾分登り氣味に行く。少時の後雪が切れて岩片の堆積した所に出て、とある岩陰に風を避けて腰を下した。大分空腹を覺えたので、冷飯の残りを平げる。此處からは、岩の上を重に歩けさうに見えたので、樑を解いたが、果して豫想通りであつた。十二時大聖寺平の鞍部よりは相當高い所へ出た。始めて惡澤岳に御目に掛つたが、幾條もの雪溪が相錯雜して、深く谷へ食ひ込んでゐる。素張しい雪の世界である。

一時飛散した濃霧が、再び相寄つて山を包み始めた。高く懸つてゐるが、灰色な陰慘な雲と、亂れ飛ぶ霧と、上下から攻められた群峯は、それにめげずわれは顔に、傲然と聳立してゐる。沈黙と力の世界だ。時々起る突風のみ、谷から峯へ、峯から谷へと、叫喚の聲をあげて、狂奔するが、これも暫く



及(みの上頂)岳見驪 (左)岳内河無魚 (中央)岳ノ間と山鳥麿 (右)岳澤惡りよ頂山石赤
影撮氏富邦垣々野 (月五) む望を岳水仙く達

にして去り、沈黙は再び四圍を征服してしまふ。

リニツクサツクを假松が現はれて島の様になつた所に置き、寫眞器を肩に、赤石に向つて出發する。
(午後十二時四十五分) 寒風に曝されて堅く成つた雪は、面白い程に金標が効く。ピッケルを補助に非常な急傾斜面を登る。一寸ピッケルを緩めると直ぐに滑りさうになる。緊張の内に三〇〇米突を登れば、既に小赤石である。雪の中に小祠がある。

東斜面の雪は想像以上に多い。山稜の右側は二間或は三間輻位に雪が附着し、所々雪底を作り、落ちかゝつて龜裂を生じてゐる所もある。小赤石と本岳との間に抱かれた北澤の源流は、巨岩を點々と現はした外、一面に雪に蔽はれ、遙か下へ雪溪と成つて連り行き、大きなうねりをつ見せて、森林帯の中に姿を隠してゐる。之に反して西斜面には雪が少い。狂暴な冬の風は、容赦なく尾根の雪を吹き拂ひ、赫々と燃える午後の陽光は、僅か許りの残雪を融かしてしまふからだ。大河原から一抹の黒線が限空線に沿うて認められるのは是である。併し下れば矢張雪の世界で、森林帯にまで及んでゐる。歩を進める内に、赤石の屋根形のピークは、益々明かに現はれ、二時には遂に頂上に著いた。

頂上は割合に廣い堆石で、其の間に三角標がある。赤石から急に西折した主脈は、百間平より一度低下して更に大澤岳を起し、兎岳に連り、更に大に隆起して聖の臥牛峰となり、赤石澤をへだてて赤石岳と韻頭するものゝ如くである。目を北に轉ずれば、魚無河内岳と惡澤岳との間には、白峰の間岳と農鳥山とが峭立し、仙丈の大カールは左方に白く輝く。木曾駒連山の霧にかくれたのは如何にも残念であつた。

三角標の西南に風の當らぬ所がある。二人は成功の握手を交した後、こゝに休んだ。廣河原一圓の澤から立ち昇る霧は激しく、百間平を越え、大澤岳を吞まうとしては消える。一人づゝ二枚の記念撮影をする。

二十五分の後、再び前の途を大聖寺平に引きかへす。下りは早い。またたく間に小赤石の急斜面迄來た。智司の徘徊してゐるのが蟻の様に見える。後で聞いた話だが、煙草入れを落して、探しに來たのださうだ。幸に小屋の中の雪の上で發見された。臀を下し、ビッケルをブレーキにして滑り下りる。斜面が急なので、少々危険と思はれる所は、立つて靜かに下りた。試みに石を落して見る。猛烈な速力で走り、岩に當つては數丈も飛躍したが、遂に奥西河内の下の方へと眼界を去つた。三時十五分、リュックサックを残して置いた所につき、飯盒の殘飯に腹をこしらへ、同五十分には小屋に着いた。

岩を積み、屋根にトタンを置いた夏用の小屋である。冬に荒れ狂つた吹雪の名残はひどく、天井に達する許りの雪がある。智司は三時間も掛つて掘つたと云つて、四尺四方位の氷の張り詰めた所へ案内して呉れる。兎に角トタンを敷いて腰懸ける。もしシャベルを持つて來なかつたら、到底泊る事は出來なかつたであらう。

春季高山の幕營に苦心するのは燃料である。一日の勞働に疲勞した身體を、無理に動かして、土にしがみ付いた様な偃松の瘠枝を集めるのは、並大抵ではない。一晚の暖を取るに充分な量を得るには、可成の時間を要求された。

飯を炊くに雪を融かさねばならぬ。夏は雪の割目から、ささやかな音を立てて流れ出る水も、今は全く氷つてゐる。米を磨ぎ、湯を沸かす量を得るのは容易な事ではない。鍋に一杯の雪も、融ければ僅かに小桶を満たすに過ぎない。食事の用意の出來た頃には、提灯の蠟燭も大分短く成つてゐた。

六時頃から、風は雪を伴つて來た。明日の天氣が心配である。一同の顔には憂色が浮び、話は直きに悲觀的な方面に向けられる。

十一日。寒さに思はず身振して目を覺ます。焚火はとろ／＼と今にも消えさうになつてゐるので、暗を探りながら生木を寄せ集める。バツと火がついて身體が温まつて來ると又う／＼とする。と氷

柱の融けた水が脊頸にヒヤリと滴つてハツと醒める。斯うしておちおちと眠りもしない中に、黎明の光が訪れて來た。外の二人はぐッすりと寐てゐる。足音を忍ばせて、睡目を擦りながら小屋の外に出て見る。何たる幸運であらう、空は全く晴れてゐるではないか。今しも大聖寺平の鞍部に落ちんとする十六夜の月は、青白く有り明けてゐる。時々吹きつける曉の風に、捲き上げられた粉雪が冷く顔を打つが、喜に満ちた私には、何でもなかつた。

太陽が登る。遍く微紅の漂ふ天から旭光の第一箭が、愉快にひたつてゐる山人の目を射る。惡澤の頂上が薔薇色に輝く。魚河河内岳も光り始めた。夜の暗は頂から谷へ、東から西へと、追拂はれて、残月も全く姿をかくして了つた。平和な曉である。

八時に小屋を出發。智司は先に廣河原へ下らせる事にした。

小屋から眞北に、昨日偃松を伐つた邊りを踏んで、西河内岳の南側の窪地へと向つて進む。硬雪の上に新しく雪が五寸位積つてゐるので、滑り勝ではあるが、ビッケルを力にして、標は付けないで歩いた。途中一個所、偃松が少し現はれてゐる、腰近くまで落ち込み、困難したが、やがて二つの隆起を絡み終つて、鞍部へ出る事が出來た。

何たる壯觀。西駒岳の連峰は、清澄な朝の大氣を透して、雄偉な姿を現してゐる。昨年の九月末に縦走した事のある私には、一つ／＼の峯に夫々意味があり、あの紅葉に彩られた山の記憶を呼び起す。殊に南駒岳から一筋深く深林に迄喰ひ込んでゐる間ノ澤の白線は、瀧又瀧に苦められた憶ひ出に、一番懐しく思はれる。連脈の後には御嶽が靜に聳てゐる。霞のかつぎを被つた北アルプスは、さながら白い帶のやうで、穂高の峻嶲のみ漸くそれと察せられる。

小屋の方から見ると菱形の紋章を刻んだ様な岩の急な登りは、ここから始まる。不安定にごろ／＼轉つてゐる岩片は、踏む度毎にゆら／＼するが、危いと言ふ程でもない。右側に添ふて登り切ると、

傾斜は大分緩になるが、今度は雪の吹溜りで、もぐる所が所々にある。そこで輪標を附けたが、一二町歩いてから金標に變へた。

ふと振り返ると、赤石の白銀に輝く姿が目射る。小澁川と奥西河内に踏み跨つた強い根張りは、雄勁な中凹の曲線を描き、其の合する所漸く尖つて、小赤石の頂をなし、主峰は僅に頭角を背後に現はしてゐる。薄く雪に被はれた偃松の群落が、木炭繪に見るやうに、或は日本畫のぼかしに見るやうな、淡調な模様を表はして一寸珍らしい景色を作つてゐた。

西河内岳の單調な峯頭を過ぎて、廣い雪の山稜を辿り、九時二十五分魚無河内岳の頂に立つ。北側に雪の積らない岩と矮生の偃松の露出してゐる所を見付けて休む。

底知れず澄んだ、寧ろ黒味勝な青空に亂立する雪の山の群。それは恒久の自然に向つて、撓まざる登高の努力を續ける人のみが享ける喜悅の世界である。圓頂形の鹽見岳は、大きく根を南の方に張つて、三伏峠を絡ませ、間ノ岳の豪壯、農島岳の奇秀は雪に飾られて更に麗しく、僅に尖端を天際に聳立する甲斐駒は金字形を呈し、仙丈岳は雪の懷を東に大きく擴げ、鳳凰山塊はその後衛を務めてゐる。

何時迄眺めても限りが無いので、三十分の後には、前に來た道を下り始め、十一時小屋に歸着した。智司は、晝食の用意を仕て置く様云ひ含めて、先に廣河原へ下らせたので、中には誰も居ない、徒に雪駄の音のみ喧しい。食事と小屋の後片附に一時間を費す。

天は益々晴れて來た。碧空と銀雪の此の世界に、輝ける光線は躍り狂つてゐる。高山とはいへ流石に五月だ。偃松を包んだ雪の衣は、はかなくも消えて、その老骨は自然の狂暴に對して己一人尊しとやうに見えた。

人夫の足跡をたどり、登つて來た時より幾分の近道をして、今度は二四〇〇米突邊で、舟窪と思はれる窪地を通り、走る様にして、二時間後に廣河原へ着いた。途中樺の林の中の雪滑りは、目的を達

した安易の心持で、存分に其の快さを味はふ事を得た。

智司の豫め炊いて待つて居て呉れた飯で腹を満たし、鑢詰の汁粉を味はつて、悠つたりした氣持になつた。雪に濡れたズボンや、汗で濕つたシャツなどを、裸になつて乾した。靴を草鞋に穿換へて徒渉の準備をする。三時十分に出發した。

歩き出すと直ぐに對岸の河原へ涉つた。水が思つたより溫いのでまず安心する。高山の瀑の邊を過ぎてから、徒渉の回数も増したが、熟練した案内により、六七回で終りを告げた。最後に右岸へ渡りて、しばらく行つて溫泉の出る所へ來ると宿が目の前に見える。小澁の湯に着いたのである。もう此處は岩石と氷雪のみの死滅した世界ではない。人の世に歸つたのだ、過ぐる二日の出來事が走馬燈の様に頭の中を廻る。あれこれと思ひ回らす中に、石原はすっかりぬれた服を取り換えてしまつた。耳が遠くへ逃げてしまつたと大聲で話す半聲の老爺に送られて、再び歩き始めたのは五時を二十分も過ぎてゐた。

荷は輕くなり、道もよく、且つ程よい下りなので、歩は自ら進む。釜澤で神社の側の家によつて水筒を返し、ひた歩きに歩いた。上藏で日は全く暮れ、靴の鉾が石に觸れて發する火花が光る。兎角する内に大河原の燈火が目に入り、間もなく親切な宿の人達に迎へられた。

十二日。久し振りに疊の上に寝たので、安眠を食つた。午前七時起床する。連日の疲勞をゆつくり休めて、十二時近くに宿を出る。來た日と同じ道を取つたが、成功を喜ぶ安易の氣持に、一路何の倦怠もなく、大島驛に着した。

「さらば、赤石の雄峯よ、小澁の溪谷よ、長しへに健在なれ」と心に叫びつゝ、後髪引かるる思で伊那電車中の人となつた。

三月の藥師岳へ (スキーにて)

田部 正太郎

日 程 大正十四年三月。

十五日 午前七時四十分芦峠寺出發、九時四十分藤橋著、午後三時十分鬼ヶ城小屋著。
曇、雪。

十六日 午前九時出發、午後一時四十分眞川下小屋著。

吹雪五寸、眞川下小屋附近は一丈五寸の積雪あり。

十七日 滞在。

吹雪、積雪一丈二尺五寸。氣溫最低攝氏零下五度五分、最高六度五分。

十八日 滞在。

晴、吹雪、一丈二尺五寸の標木全部埋る、氣溫最低零下六度二分、最高七度。

十九日 滞在。

曇なれど晴間あり、午後五時より吹雪、積雪一丈三尺五寸。氣溫最低零下四度五分、最高八度二分。

二十日 滞在。

午前六時には全く晴天なりしも、間もなく曇り、午後一時晴天、午後二時吹雪となる。積雪一丈三尺。氣溫最低零下五度二分、最高七度。

當地は朝九時、午後二時三時、夜の一時二時には晴るゝものゝ如し。

二十一日 滞在。

岩井谷まで道をつけに行き、午後十二時三十分同所著、米を吊し置き、午後四時小屋に歸着。

午前九時迄雪、晴天、二寸の新雪あり。氣溫は昨日と同じ。

二十二日 午前四時起床、六時三十分出發、八時岩井谷、十時十五分シウジ平、午後一時二十分雪崩兩岸に迫る、三時眞川

小屋著、九時臥床。

快晴、夕方早乙丸岳の肩の邊に雲あらはる、風を霽すものの由。

二十三日 眞川小屋滞在。

夜十二時頃より風止みて雪、後雨、二時曇天。

二十四日 午前三時起床、五時三十分出發、六時四十分太郎山西側の針葉樹林を出づ。八時太郎山。九時藥師岳の登りに懸る。

九時四十分二の越、食事。十時五十分藥師岳頂上に着、三十分休憩。十二時二の越。午後一時太郎山、食事、午後二時出發、二時三十分小屋歸着。

終日快晴。

二十五日 午前六時三十五分眞川小屋出發、七時十五分小畑尾峠。九時有峰。食事。十二時大多和峠頂上。食事。午後二時大

多和。五時土。五時四十七分茂佳、泊。

曇 後雨より雪に變じ、復た曇天となる。

二十六日 午前七時三十分出發、午後十二時五十五分笹津著。

晴天、亂雪飛ぶ。

同行 廣根、奥の二君

案内 佐伯 宗作

人夫 勇藏、間左衛門。

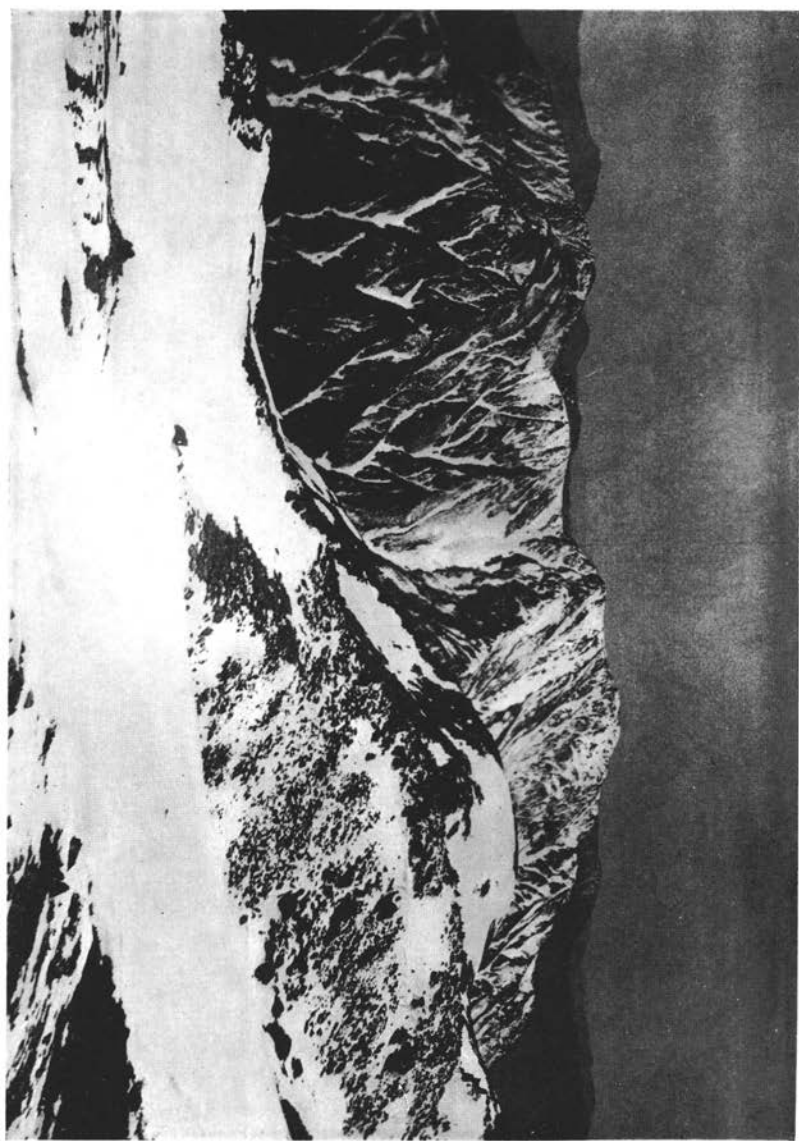
一、眞川下小屋迄

雨かと思つてガバとはね起きさまに戸を開けば、軒端を落つる雪解の點滴の音。芦峠の村は鉛色の天に覆はれて靜に白み行く。午前七時四十分、巢立ちする小鳥のやうに勇んだ吾々は、リュックサックを背に、スキーを肩に、軽い足取りで出で立つた、村人が吾々を見送つて呉れる。宗作と他の二人もやがて一緒になる、芦峠よ、さらば。

「今日まで長い間降つたのつて晴れますチャ」と宗作はいふ。間もなくスキーをはく、初めは夏道傳

ひに行つたが、程なく河原傳ひとなる。常願寺川の兩岸の景は次第に展開する、けれども歙崎山を雲の下からのぞき込むやうにせねばならぬ天候は甚だ不安である。

藤橋で、兎捕りだといふ四五人の村の若者に遇つた。栗巢野の平が薄靄に見えなくなると、道も愈悪くなり、雪もチラ／＼降つて来る。對岸では雪崩の音が時折耳を劈く。足場はよくない、おまけに犬が邪魔をして困つた。雪崩の爲に絶壁になつてゐる所で一寸スキーを滑らして冷りとする。犬が川に落ちて泳ぐ。實に悪い道である。リュックサックは四貫目内外であつたらうが、三人とも身體の工合がよくなかつたので、行程が尙更思ふやうに捗らぬ。スキーをはいたまゝ雪に腰を下して中食をとる、骨の中まで冷えてしまつた。宗作がこの林を追へと勇藏にいふ、間もなく一疋の兎が山の方へ逃げる、兎と宗作の間に吾々が食事して居るので發砲も出来ない。犬が跡を追つて行く。夏道によらうとすれば橋が落ちてゐるし、河原傳ひは道がわるいので、時間のかゝることこの上もない。廣根はフイットフェルトのビンディングを切つて修繕に手間がとれる。吹雪がそろ／＼やつて來た、宗作は元氣で人々を鼓舞する。午後二時半頃であつたか鬼ヶ城の隧道に著いた、雪崩の爲に入口が閉ぢてゐる。漸くスコップで開ける、提灯をともしてスキーを肩にして進む、靴全部がもぐり込みさうな水溜りがあるかと思へば、鐘乳洞の如く上からも下からも水晶のやうな氷の柱が立ち並んで居て通れるだらうかと疑はしめるところもある、何度轉んだか知れない、漸く行手に光明を認めて安心する、こちらの口は雪の爲めに小さくなつて居るやうな事はなかつた。最早既に三時過だ、とても明るい中に眞川下小屋まで行けさうもない。一同遂に鬼ヶ城の小屋に泊る事にいや／＼ながら賛成のやむなきに至つた。小屋と云つても貧弱なもので、吹雪は遠慮なく飛び込んで來る、兎に角火を起して暖つた。薪をくべる毎に皆の顔がぱつと赤くなる。熱い味噌汁は外の吹雪の寒さを打消すに充分であつた。シュラフサックに入つてからは翌朝までトロリとした。



影撮氏富邦垣々野

岳光はるゆ見に端右の聖 (月五)も望み(左)岳内河上及(右)岳聖りよ頂山石赤

人夫のくべた薪の燃えさかる光に目を醒す。外は盛んな吹雪だ。朝飯を済して暫く小止みを待つたが、其甲斐もないので午前九時遂に出發する。前の橋をスキーをぬいで渡る。彌陀原が南に向つて急傾斜でどつと落ちて居る。昨日の行程は辛かつたが、今日も決して樂ではない。それに吹雪が思ひ出した様に時には猛風を加へて吾々を惱ます。常願寺川を左手に見てぐんぐん進む。平の續いたのも暫くの間で切立つた様な岸が吾々を迎へる。むつくりふくらんだ雪塊のやうな中を物凄い流が渦を巻いて居る、やがて岩膚のあらはに見えて居る下には、激流が波を打つて居る處に出會ひ、仕方なく後方に引歸して山にとりつき、迂回して行くことにする。勿論徒渉はうまい處を見付けて行へば可能であつたかも知れないが、靴に水が入る不愉快さを考へると、時間を費すことには代へられぬと思つた。山裾の斜面は六十度位はありはしまいか、何しろ少し登るとまるで直角のやうに見える。それに下はすこし硬い雪の上に五分位の新雪が積り、交代にラッセルをやつて行くのであるが、何度流されかゝつたか分らない。奥が流された時などは寒けがした程だつた。側行進が一時間も續く。姿勢の取方が變な時などに流されたら、下の激流に投げ出されることは確實だ。早くと盛んに氣があせる。辛かつたので一寸廣場を見出した時には随分嬉しく思つた。昨日は滿洲の霾とか云ふ赤い雪だつたが、今日は白い雪で、昨日よりも急に山に深入りをした感があつた。此處を全部乗り切つて了ふと橋に出る。この橋を越えればもうすぐだと云ふ言葉を聞いて元氣が出る。この釣橋は處々の横木が落ちて居るので渡るのに随分考へた、宗作、奥と續いて私、ビッケルをリュックサックに縛り付けて邪魔にならない様にし、スキーをはいたまゝ、兩側の針金につかまつて行く、橋を渡つてこゝでも一安心。皆同じやうにして渡る、犬が三匹の中一匹は渡れないで川を泳いで来る。それから後はどん／＼切つて行く、左手の山の方に兎が逃げて行く。犬がほえる。間もなく平がバット展開する、嬉しい。「エホ、」をやると、雪の中から人が出て來るとても云つたやうに人が出る。小屋は雪で埋もれ、平になつて居るか

らである。飯を濟してもまだ時間があるので後ろの山でスキ一の練習をした。

二、眞川下小屋滞在

「まだ早いのであんにや寝とれ」「あら起るチャ」と云ふ調子の對話がこの小屋で交はされる。小屋は富山縣電氣局の眞川の水量測定所である。番人は二人、その一人は去年奥と共に立山に行つた藤吉で、それに吾々が六人と犬三匹、それだけがこの小屋の現在の住人である。

一丈有餘の雪中に埋もれて、訪はず音づれざる状態にある山中の小屋は、私の如きストーヴと瓦斯の東京で育つた者には随分面白く感じられた。藤吉は去年五月からこゝへ來てまだ一度も歸つた事がない、今年の五月で契約が濟む、早く歸りたいなどと云つて居た。一日の仕事は朝一度誰れかが水量測定器を見に行くだけださうである。講談物が四五冊棚にある。が、何もする事がないと云つてこぼす。日當一圓七十錢だとか云つて居た。

吾々五日間の滞在中は食事時が一番忙しいのであつた、食事といふても米と鹽水だけで、鹽水の中には干切大根が無雜作に投げ込まれて居るだけである。この小屋の味噌をあてにして來たが、味噌を切らして村に取りに返つた時であつた。味噌のないのは全く辛い。五日間も味噌なしで暮すなど未曾有の事であつた。併し時には山の珍味が添えられないでもない。晴間を待つて宗作が兎を打ちに出る、時には四五匹の兎を肩にして小屋の前にあらはれる。吾々は手を打つて迎える。それが色々に料理され、鹽水の中に骨まで入れられる事もあれば、スキートカレーに入れられることもある、この美味は忘れられない。肉の量の多いときには餅と食つて居るやうな氣のすることもあつた。併し吾々の前に兎が料理される過程は實に可哀相なもので、雪の中にねて居る兎は、足跡で居所をつきとめられ、夢を破られた時は既に耳を持つて差上げられて居る時なのである。岩井谷まで遊びに行つた時も、宗作

はあすこにと指さすと同時に一羽を獲た。その體が私のすぐ前に血にまみれて横たへられた時は眞に可哀相だと思つた。獵と云ふことは芦峯寺のやうに佛教のない、神道の行はれて居る處に盛んなので、そのくせ芦峯の夫人は地獄谷へ行くと恐しがつて「南無阿彌陀佛」を唱へてすぐに逃げて来る。全く面白い事實である。

吹雪が一寸やんで煙が眞直に上る時は吾々は裏山でスキーの練習に忙しい。この裏山は兎の巢である。と云つてもよく、實に澤山居る、夏は又蛇や蝮蛇の巢であるといふ。此のスゴ谷と眞川との合流點の森林は美しいものだ。概して闊葉樹林で、白樺の膚が美しい、森林の美は夏季のみに限られて居るやうに思つて居る人があるが、この雪に埋れた冬の美も捨て難い、闊葉樹でも殊に落葉樹の林の中には、春から秋に構成せられた豊かな物質が積まれて居る。あの死んだやうな静かな細かい枝の、雪の積つた乾いた樹皮の下に籠つてゐる偉大な力を思ふ時、それが活動して居る時よりも一層強く印象される。冬の森林、沈靜にして調和的な色彩と形態とを通じて強く現出する壯麗さが、樹枝にかゝれる白雪の空疎の間に充たされるのを見得る。

三、眞川上小屋まで

午前四時頃から起る。「晴れてゐる、星だらけだ」と勇藏の聲。六時半長い間の滞在を謝して小屋を出發する。朝の中とて氷つてばかりだ。昨日岩井谷まで道をつけ、木に米を吊して歸つた。その時のスプール通りに進む。こゝから始めて海豹皮をつけた。昨日は雪が深くて三時間もかゝつた道を、今日は二時間もかゝらない、荷は重いが雪がひきしまつたからである。小屋から岩井谷まではずっと登りが續く、鍬崎山、白い姿が雪の積つた木々を通して右手に見え、鉢伏山までも遠望された。振り返ると彌陀ヶ原の長く引いた斜面の上には、大日早乙女の諸山が姿を顯し、近く淨土龍王獅子の山々が

吾々を威壓して居る。天氣がよいので顔の皮がボロ／＼と砂のやうになつてはげる。「どだい好い天氣でなむ、叶はんですチャ」、天氣で小言を云ふ奴もある。行程は全部川原傳ひで、川は雪に埋れて居るので大體は安全である。シウジ平で一時間も休んで中食にした、飯盒を縄で吊して水を汲む、岩魚が水面の黒くなる程澤山に居る、もう少し時期が遅ければ面白い程釣れるさうである。此邊の森林は針葉樹になつて居る。けれどもまだ闊葉樹も多い、夏は藪と蝮蛇とで足も入れられない處ださうだ。眞川上小屋までに三個所兩側が絶壁になつてゐる處がある、壘々たる岩石が上の方にづつと續いて居て、雪崩で下は危い。中一個所だけは峯近くまで大きく迂回したが、他は雪の谷の上をどうにかして、一步一步物すごい流れを見つゝ、傾斜の方を氣遣ひながら兎に角渡ることを得た。四人が交代にラッセルをやつたが、そんな時には必ず宗作が先に案内をする。今迄通つて來た後が雪崩れたといふやうな事も一二度あつた。天氣が好いので氣持ちよく、もうすぐだと云ふ宗作の聲に力を得て、眞川の伊藤氏の小屋についたのが午後三時頃であつた。随分早い方である。難なくコヂあけて小屋に入る。上には一丈か、雪がどつしりと積つて居るが、小屋は實に立派なもので、七間四方とかの二階建、巨大な材木を使ひ、細心に注意して作つてある。一年程もかゝつて出來上つたといふ程あつて贅澤なものである。荷物を出して火を起す、少しもけむくないやうに裝置してある所など、手の入つたものだ。寢室と食堂とが別になつてゐる、湯殿や暗室でもある。それだのに誰も居ない。

やがて夕飯が用意される。この小屋で一番嬉しく思つたのは澤山の罐詰ではなく、三年越しの味噌であつた。私はこゝで始めて味噌汁の有難みを知つた。

四、藥師岳

此の小屋でも亦心ならずも二十三日は滞在のやむなきに至つた。其翌日である、今日は晴れたぞと



(月一) む望な岳牛赤と(前左)部一の岳師薬りよ下頂岳ノ上



影撮氏藏徹谷榎 (月一) 岳黒るた見りよ下頂岳ノ上

云ふ聲の主は珍しくも耳が少し遠いのと朝寝坊とで通つた宗作であつた。勇みに勇んで準備に取り懸る、辨當と綱トビツケルと金カンジキとがそれである。吾々の意氣は天を衝くの慨があつた。午前五時半に小屋を出る、四邊は未だほの暗らかつた。スキーに海豹皮をつけて行く。希望に満ちた、吾々は黙々として進んだ。毎日河原ばかり歩いてゐたのが、初めて本當のスキーをする事が出来ると云ふやうな心持になる。最初はずつと美しい針葉樹林が続く、そしてこの林さへ抜けて了へば太郎兵衛平が展開されて、寫眞で見た上ノ岳を右手に薬師を左に眺める壯觀に接せられるのだ、それを一時も早く見たいとあせる。雪が朝晴天であつた爲にバン／＼に堅くなつて居るのですつかり弱らされる。海豹皮が切れる。麻繩で縛つたが、他の方から又切れて四離滅裂の有様になる。私のは一番古いので最もひどかつた。針葉樹林を乗り切つて了ふと前にばつと太郎兵衛平が朝日に映じて強く目に入る。六時半頃である。吾々は榮光を浴びて無限の雪原を逍遙ふの觀がある。五人のシーファラーは黙々としてストッキングの中に總てを解するものの如くである。何んとも云へない氣分である。微弱な光度の明るみの増加が展望の擴大と相待つて益々自然の美しさを體驗せしむる。

底から抜けたやうな上天氣である。右手の上ノ岳は朝日に或る一部を映ぜしめて、凍りついたやうな玉膚を立體視せしめる。願ればスキースプールは夫自身互に相語り合ふが如くになつて居る。唯僅に跡がつくばかりであるから、スキーをはいたまゝ勝手に方々を歩き廻つた爲めである。鉢伏嶺の山々が桃色から白色に、それからまた藤色に燦んで、とけ込むやうになつて居る。白山は雲にかくれてその頂を纔に垣間見得るのみであつたが、飛驒山脈の山々は重り合つて空容を曝露してゐた。

それよりも吾々の目を惹いたものは、旭光に輝く薬師岳の姿であつた。一部は紫水晶のやうになつてゐる。山皺の多いゆつたりした山容は、前に伏したいやうな氣を起させる。左の大傾斜面の彼方に彌陀ヶ原が素直な斜面を見せ、其下の森林地帯はくつきりと限られ、早乙女岳や大日岳が胸の白い膚

を露はしてゐる。一昨日來た眞川の谷も、迂り落ちたやうな切り込んだ線となつて居る。

坂を登りつめて太郎兵衛平に立つ。前には切り込まれた黒部の谷があくまでも物凄く、奥の平は一またぎに行かれさうに見える。黒岳が眞正面に幾つかの峯頭を擡げ、北に續いて赤牛岳が大きく蟠つてゐる。吾々は叫んだ、唯何んだか分らないが嬉しさのあまりに叫んだのだ。靜かに見れば上ノ岳の小屋はその肩のあたりに見え、黒部五郎岳から三俣、双六と眞白な山稜の大波は遠く續いて、岩礁のやうな穂高の連峯に遮斷される、穂高に雪の少ないのは傾斜が急で岩崖が多い爲であるとは云ふものの、大分降雪量も立山方面とは異なるらしい、笠岳は勿論違ふ乗鞍岳の双尖も望まれた。

宗作に促されて吾に返り、まるで平原のやうに廣い尾根を傳つて行く。こゝで例の海豹皮をはづすと物凄い速力で飛ぶ、何しろバン／＼になつて居る雪の上なので恐ろしくて仕方がない、どうかして止めやうと思つて居る中に五六間前に投出されてびっくりする。「君もやつたのか」オヤ／＼といふ有様である。これに懲りて全制動で緩かに行く。愈々藥師岳の上りに懸ると云ふので、未だ九時にもならぬに食事をした。鹽鱈の煮たのと、牛肉罐だと思つて持つて來たグリーンビーとで盛んに詰め込んだ。グリーンビーは氷つて了つて全く弱つた、そこで罐切りで氷をこはすといふ騒ぎを演じた。

一休みして出かける。上ノ岳から氷雪の大平原のやうになつて居る尾根は、こゝで森林地帯になつてそのまゝ續いて居る。この樹林の中を縫ふのは左程困難でなかつた。やがて峯を右に搦んで藥師澤に臨むと、人を驚かすやうな大雪庇が吾々を待つて居た。其上雪が硬くなつてスキーがさかなくなる。それでシタイクアイゼンにはきかへた。有峯の人は此處を二ノ越とか云つて居るさうである。こゝにリニツクサックをも置いて出發する。藥師と云ふ山は峰が幾つも並んでゐて、どれが一番高いのかと疑はしめる位である。昨日は眞川の小屋附近では雨が降つたが、此處は雪で、それが吾々にとつては天佑であつた。綱も要せずビッケルもない。金カンジキのみで樂に歩める。其上急傾斜の下を這

つたり、ステップを切つて恐ろしい氷登りをやることもいらない。

十時五十分遂に頂上にある薬師の堂に著いた。先に來た犬が迎えて呉れる。三十分程寒風に曝られながら四周の大觀に耽つた。此處から見られる山といふ山は殆ど一として目に入らぬものはない、何といふ壯觀であらう、立山の連峯から白馬岳の方面へかけて日本北アルプス北半の大立物が孰れも眞白な姿を見せ、黒部の谷を隔てた黒岳や赤牛岳は手に取る如く近く峙ち、奇峭天を刺す槍、穂高の峯頭は、蓮華の穩かな山頂を超えて南方の空に寧ろ黒い鋸齒を亂立させて居る。富山平原とおぼしきあたりは判然しないが、白山は雲を披いて群山の上に君臨して居る。忽ち廣根の「大門だ。」と呼ぶ聲に、私達の視線は期せずしてその方に向つた、確に犀川の上流に立てる大門に違ひない。吾々の守り神の醫王に違ひない。吾々は醫王の下を去つて旬日、薬師の頂上に立つてこれを見たのである。

十一時二十分、飽かぬ眺めを割愛して下山の途に就く、スキーをぬいだ二ノ越へ十二時頃歸着して中食をとり、再びスキーをはいて下る。風を切つて進む吾々は耳朵に強く風を意識するのみである。太郎山の頂に達したのが午後一時前であつたが、フト廣根が居ないのに氣がつき、皆驚いて探しに戻ると、スキーの前鐵を折つたのだと云ふて悲しさうな顔をしてゐるのを認めた。

廣根がスキーを修繕中、吾々はスキーの練習をやる。ダラ／＼坂のゆるい勾配は何處までも續いてゐるので、スキーの練習地には眺へ向きである。しかし猛練習も一時間とは續かず、正二時に出發する。

此處から眞川小屋までの二十五分は、自分が這つて居ると云ふ感じより、飛んでゐると云ふ方が至當であるやうに思ふ。その間は殆んど無意識の状態である。最後に森林地に入つてからの半制動はいやになつたが、早く小屋に着いたのは嬉しかつた。間左衛門が待ち呆け顔なのが可笑しい。まだ三時

にもならないが、爐邊でゴロリと横になつてゆつくりと假睡の夢を食つた。

五、有峯、茂住、笹津まで

金澤を去つてからすでに十數日。その歸路を如何にとるか云ふ事で争つたが、結局有峯行が勝を占めた。

朝の五時頃遂に朝飯をすまして小屋内を整理し、六時遂に暖い小屋に別れを告げる。森林を縫つて小畑尾峠に出ると、太郎山に多數のスキースプールの未だに残つて居るのが見える。曇天で更に眺望がさかない。有峰への道は、ずっと谷傳ひで苦しかった、森林地帯である、有峰に着いたのは九時頃であつたらう、こゝで小晝飯にした。

有峰に就ては書く可き事がないでもないが、今は多くの人に知られてゐる事實であるから、私は唯この憶れてゐた山村が遠からず水力電氣の貯水池に變つてしまふことを悲しむに止める。

西谷を経て大多和峠の附近で晝飯を食した、丁度十二時である。降りだした雨は雪に變つたが、間もなく歇んで鉛色の雲が重く垂れてゐる。大多和に出る道はなか／＼容易ではない。夏道らしいものがあつたが、彼岸の山の雪や石や木や、總てを根こそぎ持つて行く底雪崩の小さいのがそこにもこゝにも起り、足もとの雪は水分を含んでグシャ／＼に腐つてゐる。大多和に著いた時は命拾ひをしたやうな氣がした、夫程此日の行程はつらかつたのである。

佐古を過ぎ、跡津川に沿うて残雪の上を迂りながら土に著いた。大多和峠の上で食事した後には全然食物が残つてゐないので、疲勞に加へて空腹の爲に皆弱つた。土からはスキを肩にして、午後六時茂住に著く、荷物を卸し濡れた洋服をドテラに着換へると、もう極樂に來たやうだ。宿の娘のやさしい視線が飛驒風に「岳山がへり」の吾々に投げられる。土と一緒に出た筈の勇藏は二十分も遅れて

到着した。今日の行程は確につらかつた。
炬燵にあたりながら皆して祝杯を舉げた。

二十六日の午後一時頃笹津に着く、今日は降られなかつた。夫からは汽車で神通川沿岸の景を賞しながら次第に平野へと吐きだされて行つた。そして富山に著いてから聞く所に據ると、龜藏が案内した立山組は、吹雪の爲に弘法茶屋から引返し、八郎が案内した白山組も頂上まで行けなかつたといふ。そして吾々の一行に關しては、行方不明説が傳へられたので、私の母は心配して東京から出て來た程であつた。

雜錄

○地名の變遷

『山岳』第十七年第二號にある、木暮君の「沼尻及野尻に就て」を見て、思付いたことを、雜然書いて見る。初から何等の秩序も一貫した考もなく書く一種の漫筆であるから、話がどう外れるか自分乍ら豫測出来ない事を、最初に御詫して置く。

沼其者に沼尻といふ名のあるのは随分變な話であること申す迄もない。然しこれは木暮君も説かれた通り、最初沼尻に部落が出来、其處が沼尻と呼ばれたので、沼尻（村名としての）の沼であるといふ意味から、沼尻湖となつたこと疑ふ迄もない。野尻湖の様に、其の土地に只一つしか沼のない時には、其の土地の人達は沼と云へば the lake なのであるから、その沼に特定の名を冠せしむる必要はない。只他國の人の立場からでは、その沼

に何か特定の名があつて欲しいから、沼尻の沼ならそれに沼尻湖なる名を附ける事にもならう。然し湖畔に人家が全くない場合だと、その湖には形状なり大小等によつて、何か名を附する必要があるから、その湖水發見後幾何もなくして名稱が出来る道理である。

湖名として沼尻といふ名は變に響くから詮議立もしたくなるのだが、中禪寺が建立され、やがて其の地が中禪寺と呼ばれ、そしてその傍の湖水であるからして、之を中禪寺湖と稱するのとアナログな話であらう。

中禪寺湖で思出したが、明治四年に日光の神佛分離の時、中禪寺の名を廢して中宮祠と改めた。それは排佛主義の實現として、第三者から見てもものでは勿論ないが、更に一步を進めて湖名迄を中宮祠湖と改める必要は毛頭ないのである。幸にして此の名稱は殆ど行はれないで、依然として中禪寺湖の名で通つて居る。

ヌをノと發音するに對して、漢字「野」を充てゝある場合は少くない様に思ふ。野田尻、黒野田

等はその例とするに足りよう。その「野」に引込まれて、平野又は原野の意を附會しようとする中々工合が良く行かない事がある。

「野」はまた「之」の代りに充當されることがあるが、これは斷じて賛成出来ないことである。甲州の上野原、信州の市野瀬の如きその例で、この場合強て漢字を用ひたくば、「之」を用ひるのが至當である。

市野瀬の市も一でなければならぬのは言ふに及ばない。

空澤と書いては貧乏臭いといふのか、縁起がよくないといふのか、唐澤とすることが少くない。

是等の例の様にホモニムであれば、景氣のよい文字と勝手に取りかへたり、又は語原や意義を詮議せずに好きな文字を充當することは、地名と限らず、昔から盛に行はれたので、寔に始末のわるいことが少くない。

それにまた、文字を知らない俚人に地名を聞いて、それに宛字する場合には、うまく行くこともあるが、往々飛でもない間違ひとなり、そしてそ

れが紀行や地圖上に用ひられると、遂に正名として通用するに至ることがある。

日原の奥から浦山に越える仙元峠は、元來淺間峠でなければならぬ。あれに登ると富士山が見えるので、淺間を勧誘して名としたものである。その淺間を仙元と書いては意味をなさないことになる。一體「淺間」をアサマと讀まないで、センゲンと音讀するのは亂暴な話である。駿州大宮にある淺間神社の如き、今はセンゲンジンジャと稱して居るが、あれもアサマジンジャでなくてはならない。

この仙元峠の東にあたつて、有馬山といふのがある。輯製二十萬の地圖には、正しく有馬山と記してあるに抱はらず、五萬分地形圖（秩父大宮）には、有間山としてある。その方が正しいと思ひ込むのであらう、名栗に有間水電株式會社といふ變な名の會社が出来た。

測量部の御役人方が、亂暴な宛字をされるには驚くことが往々ある。飯豊山の西北に續く地紙山に地神山といふ文字を配したり、大山の北に當る

高畑山を高旗山と書いたり、藤原の天ヶ禿を尼ヶ禿としたり、武尊川の支流雁又澤を刈又と記す等、枚舉に遑がない。

信州の穂高山麓にあたる上高地は、小島島水君によつて世間に廣く紹介されたのが、今日國立公園候補地とさへさへはがれる初めである。その頃から、同地は神高地又は上高地と書かれ、今では大抵上高地で通つて居るが、あれは勿論上河内とするのが正しいのである。

田の代を耕す頃山上の殘雪上に、馬の形の岩が現れるとかで、代馬山シロウマヤといふ名を得たものを、初めこの山を紹介した人達が、白馬シロウマとしたので、今日ではこの文字でなくては通用しない。ところで白馬といのは濁酒の異名であるといふところから、無理にも山名をハクバと變讀して、却つて惡罵をあびる愚人がある。甚しきに至つては、白馬尻をハクバジリ、略してバジリ等と呼ぶ無智の輩もあるそうだ。

無暗と音讀を用ひることのよくないのは言ふ迄もないことである。序に思ひ出したから書いて置

くが、甲斐シラネの白峯北岳で發見されたイヌナヅナの一種に、ハクハウナヅナといふ和名を命じたさる大學の先生がある。これを常識ある人士は何と見るであらうか。

赤石山脈の聖嶽は、普通ヒジリ岳と讀まれる。

會員前澤氏の説に、それは誤讀であつて、セイ岳と讀む可きものだといふ。理由は、その岳からセイ澤が流れ出る。その澤に因むだ名であるとのことである。このセイ澤なるものはどれであるか聞き漏したが、和田川上流の西澤にでも當るのであらうか。然るに會員岡田喜一氏が、昨年人夫から聞いた説によると、聖は澤がヒヂツて居るからヒヂリ澤といはれ、そこから山名が導かれたのであるといふ。ヒヂルとは曲るといふ様な意の由。この動詞はヒヂといふ名詞から出たものか、夫共古い日本語ででもあるのか、私は語原を知らないが、若し前者とすれば、ヒジリでなくてヒヂリである。従て「聖」の字を充てるのは無理である。何にせよ、聖岳には聖人や高僧は關係ない様である。

同じ脈の中に荒川岳といふのが二つあつて、折混雑することがある。一は地圖に鹽見となつて居るもの、一は吾々が西河内、魚無河内、惡澤と呼ぶ三山であつて、その中の魚無河内を地圖には荒川岳としてある。いはゆる鹽見岳は、荒川の源頭に立つ山であり、その北に續く峯に北荒川岳の名さへあるのであるから、これを荒川岳と呼ぶことには何等の無理は認められない。然るに赤石の北に續く方の荒川岳は、小澁川の上流廣河原で福川と合流する荒川に起因したのだといふ。左すれば荒川岳は西河内を指すものであつて、地圖の荒川岳はチト位置が面白くない様に見える。ところが、西河内は物の半分も缺けて居るのと、その直ぐ東北に續く魚無河内の方が高くもあり、本山らしい。それでこの方を荒川の頂上としたのだが、その直東にある惡澤は更に高度に於て勝つて居る。故にそれ迄荒川岳を延長して惡澤岳をその最高點とした譯であるといふ。由て細かく言へば、西河内は荒川の前岳、魚無河内は荒川の中岳、惡澤は荒川の東岳といふ譯である。であるから、

地圖の様に、魚無河内だけを荒川岳とし、惡澤岳を單に東岳と呼ぶのでは、意味が徹底しない。且又西河内の荒川岳を、惡澤岳迄延長する流義でやれば、方々で山名の改變を行ふ必要（？）も起らうし、どう見ても不都合としか考へられない、されば荒川岳といふ名稱はいはゆる鹽見の方に譲つて、南の方のは別々に惡澤とか魚無河内とか呼ぶだ方が、音無しくてよからう。

地圖にあるからといふのだか、それとも信州の名稱だからといふのだか、大河原方面の人達はどうも惡澤や魚無河内の名を忌み嫌ひ、そしてそういふ人達に限つて、鹽見の名を生かそうとする。鹽見といふ名が三峯川上流の荒川岳に果して當るかどうかは、私は今以て疑問とせざるを得ない。それについては『山岳』第十四年第二號に述べて置いたから、今は再說することを避けやう。

今では蝦夷富士の名で知られるマカリヌブリは、前には大抵後方羊蹄山と書かれて、シリベシ山と讀まれたものである。シリベシの語原は不明であるが、恐らくシリベツから出たものであら

う。シリベツはアイヌ語で、高所から流れる川の義で、今は尻別川と書かれ、マクカリヌブリの東から北を周り、西に流れて、鯉で有名な磯谷の海に注いで居る。この川の流域なるシリベツ野に二つの山があつて、一はシリベツ岳、他はマクカリヌブリである。マクカリヌブリは、マクカリベツといふ川に名を得たもので、此の川はマクカリヌブリの東南から、南麓を西流して、前記のシリベツに合流する。それでマクカリヌブリをシリベツと呼んだのは、多分シリベツ岳と混雜してのことであらうから、シリベシといふ名は好もしくないとして、マクカリヌブリといふ正名を主張する人が少くない。處が正名でも呼び悪い爲めに、依然シリベシの名を用ひ、又漢字を崇拜する處から、後方羊蹄山と書くことも、中々絶えないようである。けれどもフジといふ名に憧憬を持つ故か、夫共登山會の宣傳によつてか、蝦夷富士の名も、當今では廣く行はれる様になつた。序ながら記すが、後方羊蹄と書いてシリベシと讀む理由は、後方でシリへ、羊蹄はシといふ植物の漢名であるか

ら、この二字を連ねて、シと讀む譯だといふ。シは今いふギシギシの古名で、一にシノネ、シブクサ等とも呼び、近道に多い雜草である。されば測量部の地圖の様に、後方にシリと假名を振り、羊蹄にベシと付假名することは、正當ではない譯である。まして、洞爺湖畔の旅舎が、湖を距て、マクカリヌブリの峯頭を望めるといふ處から、望羊館と號するに至つては、沙汰の限りと云ふ可きである。(武田)

○山旅のノートから

竹 内 亮

以下の記事は主として予が日・K兩氏とともに大正十四年六月廿七日より七月十一日に亘り、阿蘇・祖母・九重を巡登したる山旅のノートから數項の小題について私見を述べたものである。

九州の山地は最も知られて居る様で事實はかへつて暗黒である。唯高い山、人氣のある山のみに注意を集中する時間を、忘れられたる山地に向けるのが予の希望である。

一 阿蘇大外輪の南東部のスケッチ

阿蘇大外輪の高原性地形の最美なる發達はその東部に於て見られる。宮地より坂梨を経て竹田に至る自働車線路は高原氣分の最高調であるとのことはしばしば耳にする處である。予は曾てこの大外輪の北部の一部を通過し更に今回六月卅日この南東部の一隅を通過したけれども、未だ宮地・竹田線を通過したることなきを遺憾に思つて居る。しかし予等が今回通過したる線は直ちに所謂地質構造上の外帶線と接するの部分であり、地形的に見て可なり興味ある部分であり、従つて予が曾て通過したる北部の高原と稍異なりたる景趣を有する點に於て予の興味を引いた。

大外輪に於ける北部の地形的特徴は平坦なる臺地と淺き谷とにあり、且つ樹林に乏しきやせたる草原に被はれたる景觀は時が晩秋であつた關係からでもあつたが底ひの知れぬ深いさびしさだつた。

しかしこの南東の一隅高森から津留への高原の路は高原特有の寂寥がその全幅を領するにせよ、

或は又時がはなやかな初夏であつたにせよ、とにかくそこには何等かの軟かな親しみ易い或物があつた。

北部の外輪の壁が概して一様に一直線狀に連續した平坦な一線をなして居るに反し、この方面では連山性で處々に可成著しい峯をもたげて居る。そしてその内側は北部と同様に急な斜面をなし、その上部は殆んど直立した岩壁面をもつことは他の部分と同様であるが、その外側は北部の平坦面をなすに反し美しき草原の緩斜面をなし、比較的深く侵蝕せられたる谷を持つ高原狀地に及んで居る。原野面は概して狭く谷には概して水流を持つて居て、それに沿つて部落が發達して居る有様は水準と聚落との密接な關係を示して興味深い。

路は丘から谷に下り、谷より丘に上り、草原より森林に入り、森林より草原に出て極まりなき變化を示して蛇行して行く。谷に下れば森林と部落があり、丘には緑なす草原がある。若し秋の旅ならば美しき紅葉は旅するものの心をどんなにか深くとらへることだらう。

津留に近づく頃から路は急に下りはじめて今二つの大きな地形の接觸點に来て居ることを明かに知ることが出来る。行手には祖母山縋きの密林に被はれた障壁が雨雲の斷間に隱見して居る。瀬戸内地溝線の大斷層面の一部は今予等の眼前に迫つて居るのだ。

急に瀬口川の上流の深い谷が開けて對岸の臺地に津留の部落の一團が望まれた。

曾て初めて阿蘇山より九重山への旅をした時の紀行で指摘した様に、阿蘇山の太外輪は北半と南半とに於て地形的に大きな差がある。地形圖によつて示さるゝ等高線の配置、祖母山・九重山等から下瞰した時の概観によつて見ると、予がすでに通過した二つの線の景觀は略この南北の二大地形の概念を示すものと見ても言ひすぎではない様に見える。

二 祖母岳の登路について

祖母山は一の標式的傾動ブロック山地の一部であつて、その北側及東側に於て斷層崖が保存されて居るかに見える。従つて祖母山の登山路はその

とる側によつて著しく難易の差がある。

大正十三年九月この山に登つた時は、北側の神原から東側の尾平への路をとつたが、今度は西側をとつた。

西側からの登路は祖母の表口とも云ふべき側である丈に可成よく知られて居て、今更予の記述はむしろ蛇足であるかと思ふけれど、予の見た丈のことを記して置く。

只今の處西側からの登路は略二つの系統に分けることが出来る。即ち一は熊本縣野尻村津留からのもの、他はその地から約二軒半南東にある宮崎縣田原村五ヶ所からのものとである。この兩地とも大分から延岡への縣道筋に當つて居て、大分縣竹田から自働車の便がある。又熊本縣高森及宮崎縣延岡方面とも自働車の連絡が出来る。

津留は可成の部落で旅舎も數軒あるし、郵便局・學校・巡查駐在所などがあり、一寸とした物資にも事缺かないが、五ヶ所は津留に比しては餘程の寒村であるけれど旅舎がある。普通の登山者は主としてこの五ヶ所から上下してゐて登路の指導

標など稍完備し居り、路の手入も行きとどいて居る。

五ヶ所から約一里は草原の臺地を登り、一の鳥居に到り小さな流れを渡り、急な斜面をヒタ登りに登つて約一四〇〇米以上の祖母山から西に出た大尾根にとつつき、その草原状の尾根を傳つて主峯に到るもので、この大尾根に出てしまへば登路には何等の困難がなく、極めて愉快な路である。

それから予には未だ未踏査のものであるが、五ヶ所登路の一の鳥居から右に谷に入り、途中風穴を経て密林中を直ちに主峯の西南部に出る路がある。距離が近いこと、植物の豊富であらうことなど是非一度通過して見たいと思つて居る。

津留からの登路は、津留から縣道を西に上津留に到り神原への岐路に入つて草原の臺地を歩き、神原の部落の盡くる處から谷に入り、密林の斜面を登り尾根に出で、五ヶ所からの路と上部の大尾根に於て合するものであるが、密林中では路は殆んど連續せず、山に馴れない登山者はしばしば困難するであらうと思ふから、出來得るならば大尾

根に出る迄丈でも案内者があつた方がいゝと思ふ。

津留での話によると、祖母山の西側には著しい地形上の危険がなく、どこからでも頂上目がけて登ることが出來ると云つて居た。

祖母山の地形を西方から概観すると、主峯から略西方に、先きに五ヶ所からの登路のときに引き合ひに出した大尾根が出て、西側の地形を南北の二つの谷に分つて居る。津留からの登路はその北の谷を、五ヶ所からの登路はその南の谷を歩き、上部で一つになるのである。神原からの登路もこの大尾根に出て居るし、いづれにせよこの大尾根に出ることさへ出來れば主峯へは極めて易々たる行路が開けて居る。

祖母山頂に於ける展望は昨年南の方が雲に被はれて居たので殆んど何等得るところがなかつたけれど、今度七月二日の登山では稀れに見る好晴に會したため、三六〇度の展望をほしいまゝにした。

祖母山に近い南及南東の密林に包まれた一三〇

○米乃至一六〇〇米以上の群山は、殆んど人々から忘れられたまゝに放置されて居るかの觀がある。

傾山の奇峯が稀に人々の注意を引くのみで、大崩山・五葉岳等の名は殆んど知る人もない。元來この方面は九州に於ける有數な鑛産地として、部分的に可なりよくその地質など調査せられて居るけれど、山岳そのものの狀況については、未だ充分に知り得たとは云ひ得ない狀態にある。吾々の注意は當然この方面に向けらるべきものであると信ずる。

傾山には昨年竹田營林署に於て登路を開鑿した由で、九十折鑛山を根據にして、一日で上下することは極めて容易であると云ふ。その他については予は何等の知り得た材料のないことを遺憾に思つて居ると共に、此の方面に對する同好者の共力を期待する。

三 平治岳と大船山と三股山と

九重火山群に關しては予はすでに本誌十七年二號及び十八年三號に於て記述する處があつた。予

の今回の九重行はピークハンターとしてでなく、他に目的があつたため、日數の割合に多くの峯に登ることが出来なかつたが、猶平治岳・三股山・獵師岳・一目山に登り、大船山の新道を踏査するところが出來た。猶予には黒岳・本山一帯の踏査が残されて居る。

平治岳は大船山の北部に接して噴出した小さな缺頂圓錐峯であつて、最高點は一六四三米に達して居る。全體として極めて簡單な單式火山で、山側の侵蝕は未だ甚だしく進んで居ない。頂上には舊火口趾である浅いV字狀の凹處があつて西に空澤狀に開き、北東南の三方面に圍まれて北及び南の峯稍高く、最高點は北壁にある。山側及山頂部には餘り大きくない岩塊散在し、ミヤマキリシマ、ノリウツギ、ヤシヤブシなどの灌木が生ずるが、大部分は草原で、外側はやゝ乾性草原をなして居るが、山頂部は中性の草原をなし、ミヤマキンボウゲ、ツクシヒゴタイ、ツクシシホガマ、シモツケサウなど美しい草原をなして居る。岩隙には少量のコケモモを發見した。

コケモモはさきに本誌十七年二號に於ても記した如く、大船山には全く發見し得ないものであるが、予が本誌十八年三號に於て便宜上區分した久住・三股・黒岩の三群には可成豊富に天生し、殊に三股山群に於けるものの如きは、眞に一大壯觀と稱すべきものがある。西部山群に於てはその最高峯湧蓋山に於て予は發見しなかつた（松村氏帝國植物名鑑には湧蓋山産を記せり）。そして今この平治岳に於てその少量を見たことは、何等かのアクシデントによつてもち來たされたか、或はモット重要な意味をもつものかの二つの意味を藏するものと考へ得るのである。

平治岳は今特に登路をもたないが、予及びK氏の七月六日にとつた登路は、大船山の北部から、大船山へ登る新道から平治岳の南側を山頂目がけて登つただけである。新道から分かれて約二十分、南方の一峯に攀ぶことが出來たが、北の最高峯には遂に登らずに下つた。

平治岳の北方の裾は著しい臺地をなして、飯田・阿蘇野の高原に臨んでゐるが、その臺地と大船山

の南方の都野村への臺地及び三股山北部臺地が、いづれも略同一高度で、かつ極めて相似た熔岩臺地の地形をもつことは、九重火山群の地形を見るものの見逃すことの出來ない對象であらうと思ふ。

大船山は納富氏によれば、南北の二火山より成立せる複式の山體であるといふ。而してその主要部をなせるものは、北部山體即ち納富氏の北大船山であつて、その頂部に存する雄大なる火口趾は、登山者の驚異である。

昨年竹田營林署に於て開鑿した新道は、大船山の北側より九重火山群中比類を見ない壯麗なる中性草原の斜面をからみ、所謂北大船山の第一次火口原なる段原ダンガンの凹地にある池邊を過ぎ、壯大なる第二次火口米窪の西壁を圍り、所謂南大船山の北部なる大船山塊の最高點の岩柱を攀ちて居る。段原一帯はミヤマキリシマの團叢密布し、景觀公園狀をなし、眞に雅趣盡くる處を知らず。路は更に南行して左に内壁を樹林に被はれ、濃藍の水を湛えたる御池を望み、や、行きて右に古池の乾凹所

を見て七里田方面に下る。御池は困難なく上壁に於てその周圍をめぐる事が出来る。東部に岩塊集まり小石祠を祀る。牛の頭部を似せたる木板を安置してあるのを見た。

早朝法華院温泉を發し、この新道によつて大船山を周遊し、夕景早く法華院に歸着し得る。眞に推稱すべき逍遙山路の一たるを失はない。

三股山は昨年その中途迄登つて引返へすのやむを得ざるに至つたが、今度七月五日は更に昨年豫定した登路をとつて些の困難なく東部の約一七三〇米の一峯を登り、更に西行して三股の最高點一七四五米を攀ぢた。この二峯とも三股山西部の約一六八〇米の臺狀地から一時間以内に踏査し得る。この二つの高い峯の北部に小火口趾があつて、小鍋の名で呼ばれてゐる。

東部の高峯の上部には岩石多く、岩間小灌木を密生し、その一部は三股山の南方に向ふ大鍋爆裂火口底に垂下してゐるが、山上の大部分は矮生のミヤマキリシマとコケモモの櫛の被ふ處で、壯觀其比を見ない。

三股山へは先づ南西部の約一六八〇米の臺狀峯に、千里ヶ濱から登るのが最も近道である。その他の方面からでは普通の登山者にとつて勞のみ多いであらう。

予が本誌十七年二號に於て九重山と久住山とにつき不用意な議論をしたことは、はしくも今度九重山の熱心な研究家である久住町の工藤元平氏の示教を受ける機會を得、或は古圖により、或は文書によつて種々予の淺見を啓發されたことを感謝する。あの紀行の記事に於て予の不用意な誤記から三三頁第一七行及第一九行の久住山を九重山としてあつたため誤解を受け、同頁一行乃至一四行の記事の意義を失つたことを遺憾に思ふ。予は當然九重山を全山群にあて、久住山を一七八八米の峯にあて、星生山を陸地測量部五萬分一地形圖の九重山の位置にあてて本誌十八年三號の記事を書いた。

九重と久住との字義上の疑問については、すでに他の二三の著者により論議されて居て、九重なる字が久住なる古字に對する文學者の戲的あて字

であるとの見解は畧妥當と信ずる。従つて個々の山名として久住と九重とを對立せしむることの無意義なること、九重は結局久住と同一物に對するあて字であることが導き得ると同時に、一步進んで九重を全山群の名稱として保存することの極めて有意義なるを信ずる。

四 千町無田高原

九重火山群北麓の裾野は野稻・崩平の二山の南部にある千町無田高原に終つて居る。その傳説的起原及び現況についてはすでに本誌一七年二號に於て記したからここに再記することをさける。

千町無田高原は火山岩屑の堆積した平坦原であつて、鳴子川は畧其中央を東西に貫流し、概して濕潤なる荒原狀をなし、その東南部は花牟禮火山と大船火山群との間の高原に及んで居る。千町無田の主要部は高度約八七〇米であるが、南東部の續きは九五〇米以上に及んで居て、千町無田と阿蘇野の高津原とを連ねる細徑を通じて居る。大船山からの遠望によるとその高原は、ゆるく起伏した草原で、所々に淺き沼を湛え、殆んど全く人家

を見ない。千町無田から高津原への小旅は予の大きな憧憬の一つである。

九州の如き暖地に於て、泥炭沼野の存在は疑問とされるところであるけれども、九州中央部の高原地に於ては、氣候的條件が殆んど全く北部日本に酷似し居る點より見て、その存在の可能を信じて居る。

予の數回に涉るこの方面への旅は、益々そのあり得べきことなるを信ぜしむるに足る資料を得つゝある。

九重山群の高地及山麓には多數の著しい池沼及濕原が存在する。高地の池沼及濕原は畧一五〇〇米以上の地にあつて、特種の植物景觀を示して居て、時に美麗なる水蘚層の發達するものあり、標式的なる高層沼地の型を示すものがある。山麓の濕原は概して大規模であつて、多くは地形的に湖跡原の型式をとつて居る。その代表的なるもの三つを數へることが出来る。

その一は法華院温泉の東方低地の大濕原であつて、廣大なる水蘚層を有し、主としてスゲ屬植物

の繁茂する處で、水蘚層は時に浮島狀をなして下部池水を伏在せり。現に都野村の共同放牧場となり居るを以て、植物景觀は著しく破壊されて居るけれども、畧スゲ蘚原の面影をしのぶに足りる。

その二は寒の地獄下方の扇狀地の末端の平坦地に於ける濕原であつて、前者の更に狀態の進めるものと見ることが出来る。即ち外見上廣大なヨシ濕原であるが、その構成を見るときは前者同様水蘚層の厚層を有し、スゲ屬植物の多種を包含して居る。

その三は千町無田濕原であつて、その原植物景觀はヨシ濕原の型式をとつて居つだものと思はれるけれど、今では土地改良工事の結果原景觀を破壊され、或限定された植物の群落を見るに至つた。

この三者を通じてその表土は著しく多量の有機物質を含有せる黒色の粘潤土であつて、未だ分解せざる植物體を混じ、特殊の土壤なるを知つた。

予等は未だこれ等の土地の垂直的構成に於て知る處が少ないことを遺憾に思つて居るが。これに

對して識者の示教を期待するものである。

千町無田高原は、その附近の丘地と共に植物の種類豊富な點に於て、九重山群中その比を見ないであらう。その内或物はその産地が局部的であるために絶滅の恐のあるものもあるらしい。それ等に對しては當然今の内に適宜な考慮を拂はるべきものであると思ふ。

五 獵師岳及一目山

九重山群中予が西部山群として一まとめにした區域(本誌十八年三號)中予の未踏査の區域は獵師岳と一目山とであつたが、今度の山行に於て七月九日この二峯の踏査を行つた。獵師岳は一四二三米に過ぎず、且何等吾人をひきつける程の奇をもたないが、瀬ノ本方面から望むと最も近く大きく望まれて可成人目を引くのである。全體の感じは只圓い大きな緑の山としてのみではあるけれど。予は筋湯より瀬ノ本への山路を八丁原に出で、獵師の主峯を右にして西の方の尾根の草原を登り、その上部で西に向つて容易に主峯に達した。南側は殆んど頂上迄クロマツの造林地であるが、可成

枯れてゐるので、本來の草原の面目を保存して居る。北の斜面は闊葉樹林の一團が繁茂して居るが大部分は草原又は造林地である。八丁原から約一時間を要して山頂に立つた。眺望には特筆すべきものがなく平凡である。下りは北西の尾根を谷に下り、八丁原に戻つた。

一目山は實に秀麗な倒扇形をした小さな草山で、一二八一米の高度は九重山群にあつては餘りに低い數字であるけれども、西部山群中にあつては湧蓋山に次いで人目をひいて居る。

八丁原から西に直ちに山にかゝることが出来る。約二十分内外で山頂に立つことが出来た。山頂には岩塊が少し起伏する他何等の奇もない狭い處で、西側の山側は東側に比しては著しく緩やかに臺狀に長く引いて居る。雷雨が近づいたため、山頂の佇立は長い時間を許されなかつたので、急いで北方に下つたが、途中遂に全く雷雲の包圍する處となり、一時金屬質の所持品を全部岩陰に放棄して草原中に伏し、危険を避けざるを得ざる至つたが、幸に附近に一回の落雷があつたのみで、

北東に經過し去り、危険を脱することが出来た。それから本誌十八年三號三頁に記した瀬ノ本に近い山名不詳の一峯に登つた云々のとは、その後肥前ヶ城であることが明かになつた。この南麓に岩井川の一軒家あり、鶴田形平翁なる山人ありて、久住山の地理に精通して居ると云ふことである。予は未だその地も人も未見であるが、久住の嘉門治として附近に名を知られて居ると云ふことを附記して、翁に敬意を表して置きます。

六 黒岳の傳説

九重山群の東端をなす黒岳は、その名の示す如く全山密林に蔽はれて、黒く何となく神秘な感じがする上に、古來この山に入つたものに生還したものがないといつた様な怪奇な傳説とともに、一種の強い憧憬がこの山に向けられる。

黒岳は一名あたふく山と呼ばれて居ることを今度久住の工藤氏にうかがつた。氏の指示に従へば久住町方面から見る黒岳は、實にあたふく面を仰向けに置いたそのまゝの形に望まれる。

黒岳に關して次の様な傳説が語られて居る。

阿蘇野の村にある古い小さな寺があつた。毎曉勤行の前に鳴らす半鐘が或朝何者かに盜まれてしまつて居た。それ以

來黒岳に不思議な怪物が出て人々を驚かした。

獵師が黒岳に入る

と一種不思議なけだものが疾風の様にとび出して眼前をすぎるものがあるのにビツクリして發砲したが、たしかに命中したと思つた怪物は唯カーンと云ふ金屬性の怪音を殘したまゝ姿を消した。

その不思議はそれ以來引續いて現はれたが、その正體は全然不明であつた。一二の獵師の見たと



(黒岳)山くふたおるた見りよ近附町住久

いふ處を合はせ考へて見て、それが上半身に黒い半鐘様のものをつけてゐるらしいこと丈がおぼろに知り得たにすぎなかつた。とにかくこんな怪異が度重るに従つて獵師も黒岳にはそう容易には入れなくなり、里では誰云ふとなく黒岳の藥罐太郎と云つて恐れおののき、泣く子も泣き止む程になつた。

かうなると黒岳の怪物はスツカリつけあがつてしまつて、だんだんに里近くに出て、畑作を荒すばかりでなく、人畜にまで危害を加えさうになつた。かうなつては里人もすて置くことが出来ないが、とにかく相手が不死身である丈に手のつけ様がなかつた。

餘りのことに三人の勇敢な獵師が七日間の願をかけて神にすがつたところ、その満願の夜神の御告げに各自一升の彈丸をつくり黒岳に入り、彈丸のつゞくかぎり打ちつゞけるがいゝ、しかし怪物は決して倒れることはないであらう。そしてもう數發の彈丸を残すにすぎなかつた時いよいよ斷念して、逃げ仕度にかかるだらう、その時怪物は

益々三人に迫るだらう。と云ふ丈のことを聞き、翌日各自一升づゝの彈丸を袋にして山に入ると案の定怪物に會つた。三人は力のつゞく限り彈丸の

つゞく限り打ちつゞけたが、依然として怪物は不思議な金屬音を残すのみで、少しもひるむ模様もなく、残つた彈丸も最早頼み少なくなつたのを知つては、三人も我身が恐ろしくなつて、逃げ仕度にかゝつた瞬間、怪物は疾風の如くに獵師の間近かに迫つて來た。獵師は最早絶對絶命で發砲した最後の一彈はさすがに見事怪物の急所を打ち貫き、遂にそれをその場に倒した。近よつて見ると年經た野猿が半鐘をかぶつて居たのであつた。そしてその半鐘には彈痕が無數にあつたと云ふ。それから云ふ迄もなくその半鐘は皆でなくなつた阿蘇野の寺のものであつたのだ。今でもその半鐘もある筈だと云ふ。(一九二五・七・一七稿)

○高山植物雜記 (五)

武 田 久 吉

十一 再度シャクナギにつき。十九年第一號一二

一頁以下に掲げた卑説に對し、斯道の大家牧野富太郎先生から、書面を以て有益な示教を得た故、次に掲出して、參考としたい。

「小生の國にてはシャクナギともシャクナゲとも云はずたゞシャクナンと一般に呼び申候小生の考にてはシャクナゲもシャクナギも矢張もとは支那の石南より來たりしものにて(タトヒ今日にては石南は我邦のシャクナギと別なることが明に相成り候とは言へ)始め石南花をシャクナンゲと呼びそれがシャクナゲと相成り次にシャクナギと言ひ易く變りて一般に呼ばれる様に相成り候と致し候事が何となく穩當な道行きの様に感ぜられ候「錫擲げ」などの事は固より一目して牽強附會の事相分り申候、小生の郷國土佐にてはシャクナンの尺度を大變に貴び申候それはアノ通り幹が屈曲致し居り候に付其眞直なる尺度を得る事甚だ困難故其二尺ある尺度などは殊に貴重仕候(小生の郷家には二尺の眞直なる尺度有之候ひしが今如何相成り候哉)先きに高知縣廳にて編せし『土佐國物産説』に「邦俗衣服ヲ裁スルニ日ヲ占ス柳ノ裁板ニ石南

ノ尺度ヲ用ユレバ其占日ニ及バスト云故ニ女兒輩
之ヲ得ンコトヲ欲シテ柳ハ得易ク石南ハ得難シ
と有之候又同書に之れにつゞけて「邦俗曰クシヤ
クナ^南ハシヤクナ^尺無^シノ義也コレ此木ノ屈曲シ
テ一尺ノ直木ヲ得ルコト難キノ謂也ト頗ル俗説笑
フベシト雖モ尺度ノ材ノ得ガタキコト察ルベキナ
リ」と有之候。

正に一説として傾聽す可きものであらう。私は
その後美濃や信濃でも矢張りシヤクナギと呼ぶこ
とを確めたが、奥上州の赤谷では、シロシヤクナ
ギが本當のシヤクナギで、普通のはウラジロと呼
ぶ可きものだと言つて居る人にも出會つた。

『土佐國物産説』といふ書物に、シヤクナは尺
無しから出た名だといふ俗説のある由を載せてあ
るといふが、私の甲州で聞いたのは、シヤクナギ
は、どんな大木でも、幹の周囲が一尺未満即ち尺
無い木と言ふのから、起つた名だといふ事であつ
た。勿論附會の説に相違ない。

だが實際、シヤクナギの大木でも、幹の周囲一
尺に達するものは、未だ見たことがない。シヤク

ナギよりも大きくなるシロシヤクナギでは、八ヶ
岳の中腹で、幹の高さ約二間半、根元の周囲三十
五センチを算するものに逢着したことがある。
十二 タウヤクリンダウ。大正十四年八月一日發
行の『子供の科學』第二卷第八號の一二頁に、牧
野富太郎氏は、此の草を「とうやく」といふわけは、
その細長い葉が、どうやく（一名せんぶり）とい
ふ草に似て居るからであらう」と説いて居られる
が、これは兩者の類似から出た名では、恐らく無
からうと私は考へる。

藥は苦いものと、昔から相場の定まつて居た日
本では、センブリだのタウヤクリンダウの様な、
苦味質を含むだ植物を大層珍重した。いや現今で
も、センブリは茨城縣あたりから、莫大な額が、
越中富山に輸送されて、何かの原料となり、動物
性の苦味質の代用となるとか。餘談は別として、
千度振り出しても苦いといふセンブリや、高山植
物のタウヤクリンダウは、共に藥に當るものとし
て貴重され、それにタウヤクの名が出來たので、
一は低地の當藥、一は御山の當藥位に區別された

ものらしい、實際藥草掘り等は、タウヤクリンダウをそんな長大な名では呼ばずに、只當藥と言つて居る様である。又伊藤圭介博士の『日本植物圖說』を見ても、タウヤクリンダウの木曾方言オヤマノタウヤクといふ名だとか、又はセンブリリンダウなる異稱が掲げてある。

普通のセンブリは、素人目にはリンダウの類とは鳥渡思はれない位であるが、タウヤクリンダウの方は、誰にもリンダウの一種と認められる。さればリンダウの一種であるタウヤクとかセンブリとかいふ意味で、タウヤクリンダウ又はセンブリリンダウといふ名稱が、起つたものと考へられるのである。そしてタウヤクリンダウの葉が、センブリの葉に似て居ることから、その名が導かれたといふ説には、遽に首肯し難い様に思はれる。

センブリとタウヤクリンダウとの異同は、對ハ十八頁に掲げた寫眞版によつて、比較して頂くことゝしよう。

十三 ウサギギク。同じ頁に、ウサギギクといふ名は「多分兎の居るやうな草原に生えて居るから

ではありはしない？」と牧野氏は言はれるが、私は全く別の考を持つて居る。ウサギギクといふ名こそ、葉の形狀から導かれたもので、決して兎の居るやうな草原に生ずることからではないと思ふ。

ウサギギクの葉、殊に莖の下部にある長大な葉は、莖が十分に伸びない間だの、花を生じない株などでは、二枚相對して生ずる狀が、一見ウサギの耳を揃へた有様に比較出來ないことはない。ウサギギクといふ名は其處から起つたものと、山で此の草に出遭ふ度に、私はよくそう思ひ／＼した。

ウサギギクは、所謂中性御花島に生ずる草で、時としては、ウサギが出て遊びそうな原——勿論高山上の平地——に生ずることもある。殊に夕張岳の一部では、それが群生して、實に美しい金色の御花島を現出する。とはいへ、ウサギの居るやうな原にある草といふ意味で、此の名が出來たとは、どうしても考へられない。

長楕圓形の葉が二枚相對して生ずる狀を、ウサ

ギの耳と見立てることの、類例として、會津草鞋を兎耳と呼ぶことを附記するのも、無益な業ではあるまいと思ふ。

ウサギギクは、諸方の高山に稀でない。内地の高山はもとより、北海道にもあるし、延て千島にも分布し、更に北して、アリニューシヤン群島に及んで居る。その癖樺太には未だ發見されないで、その代りにオホウサギギク一名カラフトキンゲルマといふ、特産種が生ずる。

○琵琶池と大沼池

燒くやうな烈日が、山の高みの残雪を日ごとに融かし消してゆく七月に近い頃、私は友から山旅のたよりを得て、どんなにか喜んだであらう。だがたよりはいつも嬉しいものを齎らすとは、きまつてゐなかつた。

「前略：波坂から杓打茶屋までは、途方もない櫓が立ちならび、あちこちに天幕張りの飯場のやうなものもあり、やがて澗滿の瀧が止まり、琵琶池が干涸らび、既に大沼池はコンクリートの、エ

ンバンクメントでかこまれてゐるさうです、唯幸ひ、丸池附近は殆んど前通り、渚に花が咲き亂れ、青葉の中では郭公、時鳥が啼きかはして、破壊されゆく中に、僅かながら平和の一所を作つてゐました。志賀の高原もこの夏を限り、もう行く氣の出ない所に、なつて了ひさうです。……後略」

美しい山川湖沼が、殆んど片端しから、心ない人達に依つて破壊されてゆくと言つても過言でない今日、あゝまたかと言つて了へば、それまでの話であるが、私は我庭にトロッコ道が敷設されたほどに驚きもし、憤りもし、悲しみもせざるを得なかつた。眼中利慾しかない電気事業者とやらの餌食となつて仕舞ふには、それ等の愛らしい山湖は、惜しむでも惜しむでも尙ほ足りない、私の追憶の種であつたのだ。

數多い中でも、好きな山の温泉の一つとしてゐる發哺温泉も、今度干されて了ふといふ琵琶池から近い。杓打茶屋の力餅に舌鼓打つて、澁から草津へ、草津から澁へ越す旅人の茶話に耳を傾けたのも、ついこのあひだのやうな氣がする。それが

今は汚れた天幕の中から土工達の歌ふ、聞くに堪えないやうな俗謡が漂つて來やうと言ふのだ。

春はツ、ジが、秋は七草が咲き亂れる朝日山のなだらかな北の裾をまはると、琵琶池の青く静まりかへつてゐるのが望まれる。水に浸つた池畔の残雪の蒼白色に見枕れながら、峠越えの雪を氣遣つたのは五年前の春、煙る雨の中を萬座温泉から草津白根越えて、短い日を氣にしつゝ、始めて訪ふ發哺の湯を心に描きながら、ともすれば足を奪はれさうな赤土の道を辿つた時、ふと重い夕霧の中に見付けた鉛色の琵琶池、それは七年前の秋だつた。その池も近い日には涸れて了ふか、涸れぬにしても無残な姿に變はるであらう。

赤石山の絶頂から見下した大沼池は、四月の末といふのに、西北隅の一部がかすかに融けかゝつたのか、青みを帯びてゐたばかりで一面の水雪に蔽はれてゐた。四周を繞る針葉樹林も地はまだ雪の融けやらず、長い影をひいてゐた。いつかこの池畔に立つて、山湖の持つ神秘を囁きに聴き入りたいと思つてゐたのであるが、それも今は儚い望

みとなつて了つた、仰山な水門だの、ペンキ塗りの水位測定標などがあつては、たとへ湖心に宿る空行く雲の影は美しくとも、林の中に郭公の聲がこだましやうとも、到底汚されざる自然の心に觸れることは出来まい。

去年の秋、戰場ヶ原の夜を、つめたい雨に濡れながら、疲れた足を引摺つてゐた私は、山の端を廻つてふと目前に皎々と電燈の輝く梓山の部落を見出して、文明の波の押寄せる勢に驚かされたのであつたが、發哺の湯にも近く瓦斯入電球とやらがキラ／＼して、飛び入る夏の蟲を驚かすやうになるであらう。しかし蟲は驚くだけで済む、自然を愛するものゝ心は、ランプが電燈に變つて部屋が明るくなればなるほど、そのために犠牲になつた湖沼を想つて、暗くならずにはゐられない。殊に琵琶池、大沼池のやうに親しみ深いものゝ破壊を、私は涙なしに考へることは出来ない。

草津の奥花敷温泉から三里、魚野川の水源、一度訪れた人は誰しも激賞して惜かぬあの野反池も、北端の落口近くに、測量隊でも泊つたらしい

小舎が五六軒立並んでゐるといふ話である。雑魚川、魚野川の合流點、切明附近まで電力でトロツコを通してゐたのも、或は野反池破壊の前提かも知れない。

かう擧げて見ると限りがない。私は電力のことなど全くの門外漢であるが、果してかくの如く自然の破壊を無遠慮に行はねばならぬほど、電力が不足してゐると思はれない。また水力電氣事業が発達して、山中の一軒家まで晝を欺く(?)やうに耀かさうとも、文明開化を呪ひこそすれ、喜ぶ氣には斷じてなれない。まして出水、濁水の大びごとに大騒ぎをするやうな電燈は寧ろ無くもがないのである。否、そんなものゝために掛換へのない寶玉にも比すべき湖沼溪谷を打毀はされては堪らないと思ふ。

愛する二三の湖沼が、沒義道な人間の毀つ所となるのを惜しんで起こした筆が、とんだ方角へ脱線して了つた、しかし、何と慨嘆しても始らない。たゞ私の追憶の庫には、それ等の湖沼の美しい姿が、長く／＼いつまでも残つてゐるであらう、そ

れがせめてもの心遣りである。(藤島)

○山岳漫言

◆山に行く人の數は著しくふへた。然し、山を愛する人、人を了解する人、山に親しむ人、山を研究する人の割合は、増加しないと、登山家中の故參者は言ふ。増したか減つたか、バーセンティチ等の中々わからないが、近頃山登りを初めた人達の中にも、猛烈に熱心な人が少くないことは事實である。眞面白な研究者も中々ある。

◆一體、山に登りさへすれば、それを區別なしに登山家と見做すから、とかく文句も言ひ度くなるのだらう。出來心や流行に追はれて、槍や白馬に登る有象無象を、登山家に算入するから、近頃の登山家の質が低落した等と、入らぬ心配をする人も出來る譯であらう。

◆然し、その有象無象の中から、眞に山の味ひや嗅ひを會得して、立派な登山家も出ることがないでもないのだから、あながち、有象無象を毛嫌ひするにも當るまい。同じ出來心からとは言へ、ル

「ナバークの代りにとに角山にでも行つて見よう」といふ位の人物なら、適當に指導されれば、十の九迄は熱心な、そして敬虔な登山家になれるよう。登山界の缺點は、有象無象の輩出よりも、有象無象の良い教導者が、殆ど出ないことである。

◆山に行く人が、山の自然界に注目することは、昔よりも今の方が、多い様に思はれる。昔は自然界を見る爲めに山に登る人の割合が多く、今では自然界の研究者以外で、山の自然界に注意する人の方が慥に多い。そして自然科学者中、山に足を踏み入れる人は、却つて鮮いものではあるまいか、例へば、動物學者で山に登る人なんて、聞いた事も、見たこともない。

◆登山家でなくとも、自然界に興味を持ち、觀察や研究を試みることは結構であるが、生物知りの地形學や、出たらめな植物觀を、相當信用の價值ありげな紀行や報告やに、麗々と載せられるだけは、相互の爲めに慚まれ度いものである。

◆何かの雜誌か案内書だかに、乾徳山の中腹に、山毛櫨林がある様に書いてあつたが、闊葉樹をへ

見れば、一概にブナと心得てか、さも知つた風に山毛櫨林などと書かれるには閉口する。

◆スキ一の雜誌か何かに、用材の種類について去る學者が書いて居られるのを見ると「洋書に *Alnus* (*Esche*) とあるをトネリコと譯してあるのは大なる誤謬であるといふ。「アッシュとは、シホデ屬の下に包括される種類の總てを言ふので、單に *Taxus pubinervis* (トネリコ) を指すのではない」とある(此處で、*pubinervis* は *pubinervis* の誤植か誤記であらうと註記するの必要がありそうです)。そして本邦産同屬の諸種の目録まで添へてある。それから、いろ／＼のスキ一家が、用材について植物學上の知識のない爲めに、よい加減にあてはめた名稱を、臆面もなく公表して居ることを痛罵し、最後に、「本邦で研究の結果、イタヤが用材として最も良好なものとされるが、歐洲でも、*Der Schi* と云ふ書物による *Alorn* へ *Akazie* によ *スキ* が出來るといふ記事がある。*Alorn* はモミデ屬を指すので、イタヤも此の屬に入る。*Akazie* は熱帯産のものである」と述べてある。

日本でも學者の用ひる名と、俗稱とは、同一でも往々意味の狹廣とか、時には全く異物を指す場合がある通り、歐洲でも同様なことが見られる。アッシュは御説の通り、フラクス・イナス屬の諸種に適用されるが、普通には大抵 Common Ash 即ち *Fraxinus excelsior* を指すと見て大過はない。又獨乙でアーホルンと呼び、それでスキーでも造らうと云ふのなら、がび *Acer campestre* か *Acer pseudoplatanus* であると言へよう。

滑稽なのは、最後のアカツィエである。几帳面に言へば、熱帯産の *Acacia* に當る筈であるが、俗にはイヌアカシア即ちハリエンジュを云ふのである。丁度、先年英國に渡つて、俗に *Chestnut* と呼ぶ木の花を見た岡本某といふ人が、字書を引いて見てクリとあるので喫驚し、日本のクリの花は見だてがないが、英國のクリは斯くも立派な花を咲くかと嘆聲を發し、讀賣新聞にゑらい感想文だか隨筆といふのかを書いてよこしたのに似て居る。俗稱 *Chestnut* はクリではなくて、*Horse chestnut* と云ふトチ屬の一種なのである。本當

のクリは英國では通例 *Spanish chestnut* とか又は *Sweet chestnut* と呼んで居る。御ことはりして置くが、岡本某なるものは決して登山家ではない。何でも劇作家とかいふ様なもので、その社會では名の有る人とか聞くが、名が有るからとて何も偉いといふの譯はない筈である、まして植物學には全然關係のなさそうな人物であれば咎めるだけ愚かかも知れないが、植物學に縁のある者だとして、言ふ事が必ず正しいとは限らない。

◆その歴然たる證據は、坊間に見る植物の教科書を手につけて見給へ。眼を開いて山に登つた人ならば、誤謬に充滿した御花晶の圖を見出すに何の造作があるものでない。中には帝國の最高學府で植物學の講義を擔當する人が著者となつて居て、文部省といふ役所で檢定済の極印を捺した書物に、イハウメの花とコケモ、の實とが同時に見られたり、コマクサとチングルマとイハキンバイとナンキンコザクラと皆一緒に生えて居る繪が掲げてある。これが縁日の夜店にでも並べて、十枚一錢位で子供に買はせる代物であつたら、子供欺し

セ
ン
ブ
リ



タ
ウ
ヤ
タ
リ
ン
グ
ウ



位と大目に見られようが、中學校や師範學校の教科書に入れてあるのだから驚くの外はない。萬一擔當教員が實地を知つて居る人であつたら、どんな説明をして子供達を煙に巻くものか、恐らく奇觀であらうと推測する。

◆こんな事が白晝行はれ、ばこそ、世人の多くは、高山植物は一種不可思議なものとでも誤解すると見え、毎年夏になると、新聞や雜誌に、高山植物奇談が、話を唆かせることになるのであらう。去年も、雜誌の中では、『科學』と『子供の科學』等に、大それた圖を挿んで、高山植物の記事が見えた。その中で最も滑稽なのは、『科學』七月號に、理學士何の某と名乗つて、架空か虚構か、夫共未來の人が、とに角現在では名も聞いた事のない人物が、『日本高山植物分布』と題して、嘘と本當とたゞきまぜた珍説を掲げて居る。それに、その插圖と來たら、夢にでもスケッチしたのでもあらうかと思はれる様な、あかしなのがある。殊に「立山キンバイ」と銘打つてあるものゝ如き、ふたゝいのわからぬものである。本文中殊に噴飯を禁じ得

られないのは、高山植物の種類中、キンバイサウに並んでギンバイサウがあるやら、タヌキラン、シラネアフリカの外、トダクレシヨウマ（原文には平假名で認めてあるのだから、片假名のシとレとの間違ひでは、よもあるまい）といふ奇品がある。

◆尤も、日本の植物學は、甚だ幼稚な現狀にあると見えて、専門家の筆に成つた書物でも、實物と大に齟齬した記事や圖が、平然と掲げてあるには、吾々素人も大に驚かざるを得ない。最近の大著である『日本植物圖鑑』の如き、圖を生命とする書物でさへ、三色刷の美事な高山植物の口繪に、一株のナンキンコザクラから、二本の莖が立つて、その銘々が頂に數個の花を着けたのが描いてある。これ等は、怪し氣な教科書から寫したのではなくて、必ずや實物から寫生されたものであらうが、若し斯様なものがあつたとしたら、極めて珍らしい事である。ナンキンコザクラに限らずサクラサウの類では、一株から一本より多く花莖が出ることは、あり得べきことでは無い。尤もユキワリサウの如きは、一株から二三本位出る様

に見える事もないではないが、あれは前年の一株が枝を打つて、今年は二株にも三株にもなつたものが、コチャ／＼と固まつて居る故で、土を洗ひ落せば別々の株になるものだ。

◆信州の上高地を、水電の貯水池とする計畫があると聞いて、討論會とか何會とかを催してまで、反對の氣聲を擧げた御歴々がある。その大部分の人達は、徳本峠から見た穂高の寫眞位を見て、上高地とは佳い所と思つて居る位の處で、其地の現状は御存知ないと見える。今日眞面目の山岳家の間には、上高地を水底に没し去ることに、反對どころか賛成の意を、公然筆や口にする人さへ少くない。聞けば、上高地には更に宿屋が二軒とか殖えるそうだ。尤も、害蟲の蟬蟬たる蟻を釣る梨の心といふ格で、上高地の存在も無益でもあるまい。

◆道具立式登山流行の今日、外國語陳列會の觀ある紀行に逢着すること、また止むを得ないことであらうが、「未明に出發、ラテルネを頼りに、雪のクルステの上を、ツイックツァックに登り、漸く急峻の度を加ふるに及んで一行アンザイレンし、や

がてザツテルに達して休憩、コッホアバラートの暖いズッベに舌鼓打つて……」となると、登る人には元氣も出ようが、讀む方になると、息が止まりそうだ。今に日本の山にも、ドイツタウヒが植林されようから、フィヒテの林を穿つことも出来やう。精々タンネの苗木でも仕立てることだ。

◆外國語の濫用もよいが、或るスキの雜誌に、「私はシローイファアでなく單なるシロカメラードンである」と書いてあつたのを讀んだ覺えがある。單數と複數で名詞の形の變らない言語を國語とする人には、無理な注文かも知れないが、外國語を、假令假名でても、書き度い時には、もう少し書くだけの態度でやつて貰はないと、折角の明文も、この一語で、うんざりして讀み續ける氣にならない、さればといつて、雜誌の上でフランス語の稽古などされては、なほ更たまりません。

◆登山道具も、近來の様に、續々と目馴れないものや耳馴れないものが輸入されると、そんなものを身につけて登山した紀行など讀んでも、勇氣凜凜として上つて居るのやら、へたばつて苦しんで

居るのやら、見當のつかぬことがないでもない。携帶品目録を拜見に及ぶと、我がリュックの中に「……」と来る。何もリュックザックと言はうとルックザックと書かうと、異議は申し立てないが、長いからとて半分でチョン切つて、「リュック」ではチト恐れ入る。雨天に蝙蝠率を持つて出るといふ處を、蝙蝠と略されたり、炎天に麥藁帽子を被つてといふのを、麥藁と略したのと同じ格だから、西洋ではあれでよくわかるのかも知れないが、まさかカンガルーの向を張る氣か、オッボザムの眞似か、夫共 *Surinam Toad* 宜しくといふのでもあるまいが、何だか人間が山に登るのだといふ感じは、殘念乍ら一向に出ない。

◆各地に、大小種々の、登山會見たようなものが、雨後の筍や秋の蕈程でもあるまいが、誕生する。善い事か、悪いことか知らない。が、その各々が、別々のものとして存在する價值とか意義とかいふものも、甚だしく影が淡い。地方々々に、しつかりした團體が一つ、それを連絡し統轄する會が、東京に一つで足りそうなものだ。あとは、

低級なもの二ツ三ツは我慢して置く。連絡のない、朦朧たる會が、無暗と存在することは、現在の我が國には、餘りに不經濟である。

◆キャンピングをやり度い爲めに、山岳旅行を試みる人が、大分にあるといふ噂である。又中には、高原とか、山麓とかの或る地を選んで、一週間なり十日間なり、天幕を張つて滞在することも流行だと聞く。それは各自の嗜好によるのだから、苦情は言はないが、跡を荒して行かれるには、随分とはた迷惑である。ミルクキャラメル箱、空罐等でさへ、地上に落ちて居れば、斷じて良い心地はせぬものなのに、天幕生活の跡の汚物、附近の樹林や草地の蹂躪された有様など、これ程不愉快なことはたんとない。

◆山路で見て心持のわるいのは、フィルムバックの黒い紙の裂つ端である。あの紙を引き出して、切り取れといふ線は明示してあるが、引き裂いた紙裂を、地上に投げ棄てるとは、和製のバックで、さもあつたら知らんこと、斷然書いてない。本來あれには、撮影地、被寫體、絞、露光其等を記入

して、參考に供へる様に出來て居るもので、イーストマン製のものでは、各々相當の欄造設けてある。それを無暗と切り取つては投げ棄てる阿呆者が、寫眞界にはむしろ多い。

◆そこへ行くと、ミルクキャラメルなるものは、空箱を路に投棄すれば、路しるべになると、麗々と廣告してゐる。製造者は一體どの國人なのだらう。第一キャラメルをしやぶり乍ら、山に登るなんて愚な話で、あんな飴製の子供だましに、渴を醫する効能などてんでありはしない。

◆飴で思ひ出したが、富士山に登ると、到る所の巨岩に、咳止飴と白ペンキで書きつけてある。何も日本の景色が好過ぎる譯はないのだから、殊更に風景破壊をして貰はなくともよい。

◆これと、見る度に癪にさはるのは、富士山上の室毎に、カルピスの廣告のある事で、それも一通りのものなら文句もないが、「六根清淨カルピス清淨」と連書してあるのがけしからぬ。一體あれは米國か獨逸あたりから輸入した代物でやもあるのか、禮儀正しき帝國臣民の仕業ではあるま

い。

◆山岳地と言はず、何處でもそうであるが、近年風景の害されて行くことは、益々甚しい。これでは東洋のスキスと誇る我が帝國の前途、大に心細い譯である。一方風景を呼び物にして、外客誘致に焦慮する、半官半民の何とか局があるかと思ふと、風景の保護に盡瘁する機關は、全く等閑に付せられて居る。一體日本人の愛國心といふものは、どういふ意味のものか、米國あたりの雜誌でも見たら、正しい解釋が得られるのかも知れない。

◆山岳に關する出鱈目記事も、年一年と増加して行くが、紀行等で勝手な法螺を吹くのは別として、思ひ切つた嘘を書いたものに、去る中學の教師が『科學』といふ雜誌に掲げた「日本アルプス分布」とか題する一文である。それによると、火山は孤立して山脈をなさないといふ。陸中と羽後の國境山脈、上信國境の山脈、八ヶ岳山麓、吾妻山麓等々、あれは火山ではなかつたかしら。

◆同じ記文中に、水成岩や火成岩の山脈は、生立

ちが古いから、谷は幾千萬年激流奔湍のために消磨されて、瀑布を懸けることはないと斷定してある。鳳凰山の精進瀑、駒ヶ岳の七丈瀑、仙丈の大瀑、あれ等は只水が落下して居る丈けの話なのだらうか。それに反して、八ヶ岳火山彙には、瀑らしい瀑は二三に過ぎない。笛吹川の一ノ釜、西澤の七ツ釜。あれ等は一體どうする心算かしら。いくら私立中學だとして、斯ういふ教員に理科を擔當させられては、生徒が氣の毒である。

◆出鱈目紀行同様見て胸のわるくなるものは、近頃流行(?)の、甘つ垂れ紀行である。……鞍部を越えて谷に下つて参りますと、路が段々かすかになります、だとか……輕装して出發致しました、とか……やがて中腹に達します。四時半でしたと言つた様なのを、女學生の登山記でもあるかと思ひ乍ら讀んで見ると、何の事だ、勇氣満々たる青年が、元氣で登つて居るので御坐いますのだ……どうです、モ少し男らしい紀行の一頁や半頁書いて貰へませんか、そうすれば、何も「皆様の御興味に値するかどうかと思はれますが、簡単に書か

せて戴きます」なんて謙遜しないで、方々の雜誌で投稿を歓迎すること受合です。

◆繪畫や彫刻の如き、藝術的作品が、麗々と定價を附けて上野あたりに陳列され、神聖なる可きスポーツが、職業スポーツメンに由つて興業される現在であつて見れば、追つては登山の職業化も亦免れ得ないかも知れないが、少くも我が帝國ではもう半世紀位でも、こんなことは見聞さし度くないものである。それは杞憂だと言はれるかも知れないが、現に此の春も上高地とかへ、活動映畫の種になる爲めに、御苦勞にもルックザックをかついで行つた輩があるそうだ。いくら灰だらけな穂高の雪溪でも、活動俳優等に這ひ上つて貰ひ度くは、斷じてない。登り度くばモット純真な、俯仰天地に恥ぢざる心で山に行く可しである。僅許りの金を欲しい許りに、スクリーンに寫されて恥陋しをしなくとも、仕方はありそんなものだが? これも不景氣の故か因 (笹 魚 生)

雜 報

〇燒岳の噴火

【松本支局特電】 昨年十一月十七日から活動をはじめた燒ヶ岳は、十二月にも四回の降灰あり、本年になつてまた十三日灰を降らせたが飛驒方面が多く、松本測候所は高山と連絡して觀測をつゞけて居るが、噴火口に變化ある模様で、雪深く調査に登る事困難なため、雪解けをまつて實況調査するが、それまで大きな變化のないものと見てゐる。(大正十四年一月)

【奈川電報】 今朝五時燒嶽爆發し、鳴動盛にして家屋の震動甚し。

(一月二十二日)

【松本電話】 二十三日夜から松本平一帯に降灰あり、二十四日朝は松本市の如きは屋根瓦が白く見へた程である。(二月二十五日)

【松本電話】 廿七日午後九時五十分頃より約五分間に亘つて燒岳は大音響を發して噴火した、其のため松本地方は強度の震動を感じ驚いて戸外に飛び出したものも少くなかつた、噴火は一時松本市の上空に擴がつたが之れは更に延びたので、松本附近はために降灰を免れたもの、東筑摩郡南部方面に亘り可成りの降灰を見た模様である併し農作物等には被害は餘りない模様である。

【上諏訪電話】 二十七日午後から降り出した燒岳の灰は諏訪地方迄に及び、廿八日から霞のかゝつたやうで、岡谷方面は一位位上諏

訪は地が白くなる程度に積つたが正午頃は猶盛に降り續いてゐる。

【伊那電話】 燒岳噴火の爲め上伊那郡小野村地方は二十八日朝来夥しき降灰あり瓦屋根に一寸以上積つた。(四月二十九日)

【松本電話】 二日午後三時十五分頃日本アルプス燒岳は大噴煙をした、之れが松本地方へ鳴動の聞へたのは凡そ五分間に亘り、今回の噴煙は最近に於て未曾有の大噴煙で其天に冲した有様は去る大正二年の大噴火の際大正池が出来た時よりも大きな噴煙の模様だつた。(五月二日)【以上信濃毎日新聞】

【岐阜電話】 從來燒ヶ岳爆發の際には同山麓温泉の温度低下して居たが今回の大爆發前も著しく温度の低下を示したので、附近住民は恟々として居る。尙ほ今回の爆發にて從來の噴火口の北方に新火口を生じた、高山測候所長山澤氏は調査の爲め出發した。

(五月四日國民新聞)

【松本電話】 燒ヶ岳の噴煙は其後益々猛烈を極め、松本地方は夕立前の空模様の如く黑暗々たる光景を呈し、午後五時室内はほとんど讀書出来ぬ程度になり、ロソクを點けて一時をしのいだ者もあつた、五時半頃より猛烈な降灰あり、手拭や羽織でほ、被りを爲し又は雨傘をさして往來するものも見受けられ、此地方空前の奇觀を呈して居る、尙四時四十分頃より一時間に亘り北日本アルプス前山通りに降り注いだ灰はあだかも夕立ちの雨脚の如く壯觀の極みてあつた。(五月四日東京朝日新聞)

【松本電話】 日本アルプス燒岳は十八日未明またく久しい鳴動を續けて大爆發をしたが、これがために松本地方における人々は

深夜の出来事として深い眠りに陥つてゐる間のことであるため、非常に驚いてはれ起きたものも少なくはなかつた、なほ松本地方には少からず降灰があつた模様で、現在桑の芽の出つゝある折柄として養蠶家は戦々惴々たる状態である。

上田地方は十八日未明降灰あり、上田製業試験場の調査によると一坪へ四勾強の降灰であつて、一合の重量四十五匁あり従来の降灰に比較して非常に多い處の物である、同地方蠶種家の蠶兒は概ね一眠覺過養蠶者の方は上田附近は目下蠶立最中であるが、大切の蠶繭季節にかやうな多量の降灰は近年類例がないので一般に大狼狽してゐる。

【前橋電話】 今朝六時半頃より八時十五分に至る間に前橋地方に夥しき降灰あり、一時通行人は傘を差して歩く程であつたが、前橋酒候所の發表に依れば降灰量は一坪五匁二分の割合である、右は淺間の爆發でないかと豫想されたが淺間山麓の輕井澤長野原兩分署及松井田分署よりの報告を綜合すれば、昨夜から今朝に亘り淺間山には何等爆發鳴動等の異狀を認めず、或は燒岳の噴煙の爲めであらうと、尙養蠶家は非常に憂慮して居る。(五月十九日)

【松本電話】 日本アルプス燒岳は十九日午後七時四十分頃又復大鳴動を發して噴火し、松本南安藝地方は戸障子に強度の震動を感じたるため驚いて屋外に飛び出した人達も少くなかつた、折しも天氣は晴朗にて風なく其の噴煙は高く天に沖し十數分間は形が崩れずに一大壯觀を呈したが、次第に之れは東北に延びて松本地方は少からざる降灰を見た。猶南安藝地方には一坪當り約九十五匁程に達する多量の降灰を見た。(五月二十一日)

【松本電話】 日本アルプス燒岳は近來殆ど間斷なく活動を續けて居るが、之れが爲め松本地方へは二十一日夜降灰があり、二十二日午後一時頃又復盛んな噴煙をなして松本地方では少なからざる降灰を見た。

【松本電話】 先般來松本地方には燒岳の降灰と前後して綿のちぎれたやうなものを頻りに降らしたが、之れは燒岳の噴火に依つて溶岩が噴出せる際引き延ばされたもので火山毛と稱するものではないかと言はれてゐる、由來火山が噴火する際溶岩は其時の状態に依つて火山毛、火山灰、火山砂、火山礫、火山彈等が噴出するものであつて、火山毛の細粉となつたものが火山灰であつて、火山毛及び火山灰は通常の噴火の場合であり、火山砂、火山礫、火山彈等は大爆發の場合に噴出するものであると。

【松本電話】 燒岳は二十三日午前十一時過ぎ大噴煙したが、午後三時頃松本地方は一帯に亘り雨の降る如く降灰があつた、最近の降灰は非常にあつくなつてゐる。(五月二十四日)

【松本電話】 松本營林署島々出張所の小吹主事は日本アルプス燒岳の爆發につき調査のため先頃から登山中であつたが二十六日下山した、其話によると上高地から眺望すれば燒岳の七合目邊りの右の方にある噴火口が最も活動して居るので火口は飛驒に面して居る更に危険を冒して登山して見たところが、一番大きな噴火口は直徑四間半のものである、直徑三間半のものもあるそれが五箇並んで居て近くは水蒸氣のやうな煙を吐き、活動する時には盛んに灰を噴き出し、灰は近頃段々あつくなつて居る、二十三日に二回噴煙した時の如きは、大正池田代池方面へ小豆大の砂を降らし

たといふ。併し上高地には大した被害はないから、登山者は燒岳に登ることさへ注意すれば危険はない、其他穂高岳や槍ヶ岳に登るのは何の變りはない、又松本高等學校山岳部の學生が四名乗鞍登山の歸りに上高地に廻り、二十五日に燒岳の麓を通過したが灰が五分ばかりの厚さに積つて居るだけで別に何等の異状はなかつたと云ふ。(五月二十八日)【以上信濃毎日新聞】

【東京に灰降る】けふの廿七日は晴れて蒸し暑くあけかけたが、やがてばんやりと霜のやうなものがかゝつてどんよりとしたが、八時ごろから何處からともなく東京市内に灰が降つて來た、中にも田端、王子、巢鴨、本郷、下谷根岸、日暮里、三河島方面から王子板橋界隈にひどく、所によつては屋根の上につすりと積雪のごとく降らした、道行く人の黒いアルパカの洋服にも白くかつたこれは別項の通り燒ヶ岳の爆發のためである。

【松本電】日本アルプス燒ヶ岳は去る十七日以来休息状態にあつたが廿七日午前二時半ごろ大鳴動と共に爆發し、松本地方の戸障子はメリ／＼と響き中には戸外に飛び出したものもあつたが、これと同時に燒ヶ岳方面は火の柱が立ち間もなく黒煙に變じ深々たる煙は天に沖した、松本地方は午前四時半ごろより降灰あり満目薄雪の降りたがたる如くなり、午前六時ごろには全く天日くらくなつたが、懸崖方面は最も甚だしく降灰があつた、同地方は傘をさして道行くものもあり、また松本平一市三郷は目下春嵐の上寒間際にあり、何分にも深夜のこととて柔を取入れることが出来なかつたので養蠶家の打撃は頗る大きなものである、各郡市役所は技術員を派して被害の調査に着手した。

【浦和發】廿七日午前六時ごろから埼玉縣下の秩父方面から入間郡飯能、越生、川越、所澤、比企郡松山、小川、北足立郡大宮浦和地方一帯に亘り、マケネシユームのやうな降灰があり十時半ごろも盛んに降つてゐた目下養蠶の時期であるから多少桑に影響があるだらう。(六月二十八日東京日日新聞)

○金峰の雪で遭難

【甲府電話】甲州金峰山から御嶽上黒平に下山の途中行衛不明となつた東京市本郷區春木町二ノ二二慶大理財科豫科二年山口磨吉郎(一八)の行方については、消息を斷つて八月の卅一日も早曉から親戚初め本郷青年團員及び有志學生等が東京から駆けつけた三十餘名と地元中巨摩郡宮本村青年團員四十餘名計八十名が三手に別れ、金峰下りの斷崖を主として詳細なる搜索を行つた結果、午後一時半に至り金峰山頂から約三里半を隔てた御嶽金櫻神社奥の院俗稱片手まはしの密林中で慘死してゐたのを發見し、急を甲府市名古屋旅館に滞在ひたすら愛息の安否を氣遣つてゐた藤吉郎實母でい子(三九)に報じて一日午前八時頃死體のまゝ甲府に運び、續體供養の上そのまゝ東京に引あげることになつた遭難現場は登山路から約一丁ほど深に入つた所で食パン其他の所持品は全部そのまゝとなり、着衣靴なども何等破れた形跡なく、飲料水に窮しこれを求めるため深に降り立つたが疲勞と寒さの爲めそのまゝ同所に昏倒したものである。(十一月一日)

【甲府電話】金峰下山の途中行方不明となつた慶大理財科豫科二年生東京市本郷春木町醫藥機械商山口延次郎氏長男磨吉郎君(一八)

は三十一日搜索の結果金峰山頂より約三里半の密林中で死體となつてゐるのを発見したので遺骸は來授した本郷區春木町青年團員中巨摩郡宮本村青年團員親戚有志等に守られて一日午前三時三十分甲府市泉町天然寺に運ばれた。同君は二十四日金峰登山の際も寒氣のため漸く頂上を極め、午後四時十分下山の途中頂上から約十五町を這つた御嶽金櫻神社奥の院付近俗稱片手まはし地先に辿りつたのは既に五時近く、前夜キャンピングを營んだため寒さで眠れなかつたのと強行軍に身心疲弊し加ふるに登山の一兩日前金峰に初登がありそのため道を過つて百餘尺の斷崖から墜落し、前額部に裂傷を負ひ頭がい骨折を起し、鼻口から出血し即死を遂げたものと判明した。(十二月二日)【以上二項東京朝日新聞】

○日本アルプス新登山道

【松本電報】信州と日本アルプスを境にしてゐる飛驒地方では、今回飛驒山岳會を組織しこれが開發に努めることとなり、岐阜縣では昨年縣會で登山路の改修に着手する意向を言明し、十五年にはアルプス開發のため小坂町から御嶽山麓湯川温泉へ道幅五尺急傾斜勾配八寸の道路を開鑿することとなつたが飛驒口は中山七里以内に勝景の地が多いため高山線の完成と共に信州口を見飽きた登山者は、上り下りが必ず片道を飛驒口に取り、觀測されてゐる、信州側でも之に對抗すべく運動することになるらしい。(十二月二十日東京朝日新聞)

○會員通信

雜 報 ○日本アルプス新登山道○會員通信

△一昨日(土)午前十二時十六分飯田町發、午後二時半二俣尾着、同五時半川乗山南麓の峰着、同夜は同地福島家の好意に心地良き一夜を明かし、翌朝午前六時四十五分折から小雨降る中を川乗山に向ひ、午前八時四十五分、一、三六三、七米突の三等三角點へ到着仕り候へ共、周圍の雜木に遮られて期待致候眺望無く、只北方蕎麥粒山(一、四七二、九米)へ續く尾根の見通しを得るのみ、且附近一帯心なき伐採の魔手意外に伸び、實に失望を感じ申候。

右の三角點より北方急傾斜の尾根を横穿(澤の名)へ下り、同所に有之候炭焼小屋にて茶の馳走を受、川乗谷の源頭にある數條の澤に就て詳しく教えを乞ひ、一時間計り休憩の後、小屋の背後から北方へ續く尾根上より、雲取方面の展望に獨り快哉を叫びつゝ日向澤の頭にある郡境の防火線上に出ては午前十一時半に候ひき、此防火線は中々立派なものにて、極めて最近に擴げられたるが如く、蕎麥粒山迄は自働車にても通れるやうな大道に御座候、併し蕎麥粒山より峠への徑は未だ昔の儘にて淺間様へ御意得たりしは十二時半。小憩の後細久保谷の新緑と躑躅花の美を賞しつつ、川俣を経て影森迄は可なり馬力を掛け、驛へ午後四時半到着いたし、同五時七分發の電車にて九時上野着、此行程を了り申候。

上述炭焼小屋にて教えられ候川乗谷源頭に有之候澤の名及び其附近の名稱御參考迄に御報申上候。(地圖五萬分の一の秩父大宮、五日市御參照被下度候。)

蕎麥粒山三角點直下にあるものを桂谷、蕎麥粒と日向澤の頭との間に來れるものを『ショウジ谷』、次に川乗より郡境に續く尾根と

日向澤の頭より西南へ落ちむ尾根との間にある澤を火打石谷と申し、其附近には火打石數多發見せられ候。川乘山三角點北側を廻れる澤を横置(宛字)と云ひ、其南側を廻るものを『道川』と申居候。川乘山三角點の東方にある平地を猿住堂(宛字)と云ひ居り候。日向澤の頭より秩父側廣河原の谷へ下れば、立派な林道出來候間、此道を経て川俣へ出づる時は、小生の行程より一時間位は充分節約出來得る事と存じ申候。終りに川俣方面御出での方は、峰を起點とせらるが最も便利よろしく、同地の豪家福島文長氏方へ依頼せらるれば快よく宿泊し得べく候間、一寸申添候。(大正十四年五月四日野谷恭)

△梅雨空にたゞられて六月廿五日の出發が二十七日になつた、一行は五氏五氏と予との三人。箱崎驛を朝立つて熊本に盡の數時間を費やし、水前寺海苔などを視て宮地線に乗り、濃霧の高原を宮地に着き藤門館の一室に落ち着いた。夜來の暴雨は朝になつて幾分小やみになつた。登らうと云ふ阿蘇の山姿は厚い雨雲に包まれて午後になつて漸くその姿は現はしはじめた。

午後意を決して宮地から直ちに登路にかゝる。途中で餘り道草をし過ぎたので、中岳の裸出部を横ぎる頃には又雨と霧で可成苦しめられ日が落ちてから山上本堂前の宿屋についた。

二十九日は早朝少時晴れたのみで又雨となつた。高岳行を断念し、中岳の火口を視て千里ヶ濱から直ちに高森へ向ふ。途中山腹より雲の隙間に近く猫岳の峻峭を見、遠く祖母山の雄拔を望んで夕景高森町に着く。

三十日早晩より晴れわたりはじめて阿蘇の全容を仰ぐ。高森よ

り村山の峠にかゝり、阿蘇大外輪の南東部の高原を祖母山麓津留に向つた。午後又雨となり、行人稀なる高原の路は一人の寂寥さを加へた。夕方津留に着き角屋に入る。雨は翌日に至るもやまず。一日を無聊に過ごす。

七月二日快晴。津留より上津留・神原を経て溪流を登り祖母山頂より、西に斗出せる尾根にかゝり二時山頂に立つ。三時下山の途につき、登路と同じ路をとりて下の方にて左折して五ヶ所に下り津留に歸泊す。

七月三日快晴。津留より自動車にて午前中に竹田町に至り、警林署等訪問し同地に宿泊す。

七月四日快晴。朝自動車にて竹田を發し久住町に至り、久住郵便局長工藤元平氏を訪れ、種々九重山に關する談話など承はり、更に大分縣種薯場を訪問し、午後一行は小野種薯場長と警林署の岩永氏と久住町の一青年とを加へ裾野から峠へ、峠より法華院温泉への路を辿つた。温泉にて猪先きの旅を急がる、小野氏を送り、久住の青年を歸し、一行四人温泉の第一夜をにぎやかにすごした。

七月五日朝風雲霧を捲き山容定まらず、今日は日曜なるを以て土曜日より登山客旅舎に満ち、一組は早旦旅舎を發し、他の一組は予等と行を共にして千里ヶ濱への峠を登る。千里ヶ濱の登り口にて岩永氏及び他の一行と別れ予等は三股山に登る。五氏と五氏とは約一六八〇米の一峯に止まり、予は更に尾根つたひに最初に東部の峯を攀ち、更に西部の最高峯を攀ち下りて一行に合し、千里ヶ濱に直下してその谷を登り尾根に出て、四千里ヶ濱を通過

して肥前ヶ城北麓の沼地に至り更に引返へして久住山頂に至る。雲霧は遂に雨となり予等を山頂から追つ立てた。本山北方の低地に下り更に御池に登つた頃から遂に風雨となり附近高地の石室に入つたがやむ見込もないので、北方の岩石裸出せる斜面を直下して千里ヶ濱の登り口の下り法華院温泉に歸つた。可なり變化に富んだ日であつた。

七月六日氏と予と温泉を發し豪雨中を大湯原を横斷して大船山への新道を辿り左折して平治岳に登る。平治岳は南西部の一峯に登りたるのみにて下り、更に大船山に登り登路をとりて下る。雲霧漸く晴ればじめて平治・大船の山峯を仰ぐ。

七月七日朝温泉を發し千里ヶ濱より西千里ヶ濱に登り、肥前ヶ城北麓の沼地の觀察に數時間を費やし、夕方温泉に歸つた。朝來の霧は午後に入りて更に甚しく木山方面の踏査豫定を斷念した。

七月八日早朝法華院温泉を發し鳴子川に沿へる細徑を辿り千町無田高原に下り、高原の植物を漁り更に硫黄嶺山道路に登り中野温泉に到る。朝晴天なりしも千町無田にて雷雨に遇ひ、一時晴れたれども夕方より又大雷雨となる。

七月九日中野温泉の早曉の空の色は紫の由布岳を配して又なき壯嚴なものであつた。

早朝出發瀨の本へ通ずる山路を右折して黒岳の南方に出て筋湯に下り旅舎入福屋に荷物を置き、輕装して八町原より獺師岳に登り予は別途をとりて八町原に下り、更に一目山に登り下山の途中尾根にて雷雲に包まれ一時危険を感じたるも少時にして北東方に經過し去れり。

濡れたる衣服を解き清澄なる温泉に浴せる気分は又なく爽快なものであつた。

七月十日筋湯を發し湯坪・地蔵原を経て山田村に下り炎天下の路を縁脇より森町に至り大有軒に入る。

七月十一日森町より自動車にて新耶馬溪を下り柿坂にて汽車に乗り羅漢寺驛に下車、スツカリお上りさん気分にて羅漢寺見物などして、更に自動車にて中津に出て汽車にて箱崎に歸つた。

(大正十四年七月竹内亮)

△去る七月廿六日(曇) 上野發午前七時四十分の沼田行二番列車に乗り、午後十二時五十七分沼田に下車、湯宿まで岡太郎馬車の厄介になり、法師行の馬車の出たあとなので、重い荷を肩に、四時三十分此温泉場を離れました。途中猿ヶ京などの部落を経て、夜七時十五分法師長壽館に荷を下しました。

七月廿七日(曇) 餘り雲が低いので三國山へ登らぬつもりで、ゆつくりして此處を立たたのは、八時五分。三國峠に着た時には、追々晴さうに見えて來たので、眺望の好い三國山へ登らぬのも残念なので、日光キスゲの一面に咲いて居る間を縫て、十時四十五分三角點に着きました。併し思た程天氣も好くならず、稲包からセバト連嶺の山が薄く見へたのみで、目指す苗場山はおろか淺澤山より北に連る上越境の雄姿も雲の内東の方も全く雲に蔽はれて居ります。峠を経て越後淺貝へと下り、煮食をして此處を立たたのは午後二時十分。梓山の戦場ヶ原邊に似て居る此高原から、燦々火打峠を越へ、元福の手前を左折、暫く進んで、左赤湯林道、右赤湯近道と書いた杭の處を右に清津川の河原に下り、十五六町來た

かと思はれる處で川と離れ、林道と合し吊橋を渡り、椿澤より上下廿八町と云ふいやな感巢峠を越へ、赤澤へ着いたのは七時四十五分。岩陰や河原にある原始的な温泉で汗を流し昨日小赤澤から苗場を越へ三俣へ抜け様として頂上で路を間違へ此處へ下つた十日町の新聞記者の方から山の様子等を聞き、明日の天候を氣にしながら、木賃式の宿の二階で體を休めました。此處の湯は河原の四五ヶ所から湧いて居る、天狗湯は宿の對岸の岩陰に湧出し赤土色で手拭等も直ぐ赤く染り、三十間程下流にある青湯は名の如く、氣味悪い程青い湯花を周りの石に附けて居ります。此外に藥師湯黄金湯と云ふ稍透明の湯が宿の直ぐ前に在ります。それで此湯の温度は、天狗湯と青湯は少し熱く、黄金、藥師の湯は丁度好い加減で、這入て居ると底の石の間からブク／＼湯が湧いて來るので、實に氣持の好いものでした。

廿八日(晴後曇) 赤湯發七時四十五分、宿より一町位上て清津川を渡り赤倉山にかゝり、苗場頂上の一部を時々眺めながら頂上に辿りついたのは九時十五分、三角點(三等)は十間程南方の笹藪の中にありました。此處で第一回の食事(木暮様より承て居たので、赤湯で特に作つて貰つたチマキ)をして苗場へと尾根を下りました。愈々苗場へ登りつければ路は至て緩勾配で略國境線に沿って北に進んで居り、右は急傾斜で清津川に落込んで居り、遂に仙倉邊かと思はれる上越界の山が薄霧の内に見へました、左は主に、ツガ、アラモリトマツ類の間に笹が密生して居るので、一步を踏み入れる事も出来ない程です。此處からの路は大八車の轍の様な兩方に溝(?)のある立派なものですから、思はず足も持ちます。

雪田から流れ出る澤で第二回の食事を済せ、二〇三七米突の三等三角點を過ぎ間もなく、幾多の小さい針葉樹の林と小沼のある尾瀬ヶ原の規模を小さくした様な高原に出ました、併し高山植物は餘り無い様で、此處から始めて三個の雪田を東側の斜面に残す。尤大な頂上邊を眺める事が出来ました。之等の沼と林の間を縫て進み、雪に埋る賽の磧を経て、苗場山大神奥の院に參拜、きもち好き雪田の上を歩き拾個程ある作神様の石碑を左に見て岩上に鎮座する金佛様の脇に荷を下しました、時に午後一時二十分 三角點(二等)は二町餘北の針葉樹林の中にあります。

金佛様の立像の脇から大岩山と佐武流かと思はれる山が鐵の切れ目に一寸見へたのみで間もなく何物も眺められない程の濃霧に包まれました。此處を午後二時に出發半壞の小屋の前を廻り一町程南して針葉樹の林の中へ這入て居る路を捜し出し、それを進んで其林を抜けきると再び美しい、北より南へとゆるやかな傾斜を有した草原に出ました。

二十米突圓の峯の下(東)の林區畧の高山植物の注意が誌してある白い標木の立て居る處で路は左右に分岐します、右は舊道らしく今は廢道になつて居り昨年も會員の方が之を下て大分苦まれたと云ふ事で、吾々二人は左の新道へと進みました。二十米突圓の峯の左をからんでから霧は益々濃くなり、三四間先は見へませんから何處をどふ歩いて居るのか少しもわかりません。磁石によつて西方へと緩傾斜を下て居る事だけはわかりました。愈々急の下りにかゝつたのは金佛様の處を立てから約一時間過ぎた三時十分でした。其路の峻險なものには今更驚かされました、稍傾斜を減じ

て、遠くに澤の音を聞く様になつて、暫く下てから舊道らしい右方から出て居る路と合し、之からは樂な下りで澤に沿て小赤澤秋山旅舎に六時十分に着きました。

七月廿九日(晴) 午前十時秋山旅舎を後に中津川を屋敷に渡り、水力電氣の日蔭の無ひ廢軌道の上を暑さに閉口しながら、二拾餘町來た處で軌道と分れ、林道へと這入りました。昨日の苗場も其右に續く大岩山も、頂上邊は雲にかくれて居ります。切明への分岐點を過ぎてから、路は烏甲山の嶺を西に廻り、美しい森林の中を歩く様になるので、大分樂になりました。親ミズミズの殘雪で喉を潤はし、マルセン、オーセンの瀧を見て清水の磐城木材の小屋に今夜の宿を頼みました、時に午後七時。

七月三十日(晴) 午前七時三十分、親切な小屋と別れて、難魚川を對岸に渡り、木材運搬の馬道を最後迄進みました。(カツギダシの少し北部)。難魚川の谷も此邊の周圍の山が低いせいか反て烏甲山下の方が深く谷らしく思へます。尙小路を一町程進んで河原に下り、對岸に路を得て徒渉、熟平小屋への路と分れ、發補へと向ひました、岩管山を左に眺めながら途中或小屋で殘りのチマキを食べ、駄菓子等を御馳走になつて無駄話に時を費しました、燒額山側の美しい高原を通り、高天ヶ原に出て岩管の第二の鳥居の處から今にも雲に包まれさうな笠ヶ岳を眺め、午後三時發補天狗の湯へと下りました。

七月三十一日(晴後雷雨) 宿を出たのが六時四十分高天ヶ原を過ぎ、昨日の路と分れ、上條堰に沿て進む事約一里、堰と離れ、下て難魚川を渡り、倒木の多い梯子澤を登り鞍部に出て、十時一等

三角點を持つ岩管の頂上に着きました。今夏の山旅は天氣に恵まれないのか此處でも遠望無く一昨日越へた苗場すら姿を見せません。其食を濟せ尾根俵ひに四十分かゝつて裏岩管の頂に立ちました、雲の往來はげしく、岩管も烏帽子をも包んで、益々怪しくなつて來たので、直ちに踵を返しましたが間に合ひませんでした。背に脅かされながらづぶ濡れとなつて岩管の小屋へ飛込み、ストーブで體を暖め雨のやむのを待て居りました。雷も遠のき小降りとなつたので午後二時十分下山の途に就きました。梯子澤も水量を増して下るのに相當の注意も要します、堰に出てから二度雷に遇ひ、五時三十五分天狗湯へと歸りました。

八月一日(曇) 朝から暗雲が棚引いて雷鳴を聞きます。大沼行もあきらめて午後二時發補を下りました。琵琶池で遊んで前橋街道に合し、長い波坂を下り、暑苦しい瀧の町を過ぎ、五時湯田中の大見崎屋に休み自働車で豊野に向ひ、午後九時五十分發の列車で翌早朝歸京此行を終へました。(大正十四年八月野口末延)

△友人岡室熊男君から誘はれて、八月廿五日紀州から出て來た同君と名古屋で落合ひ、廿六日山中房温泉、廿七日燕岳、廿八日燕小屋より大天井岳・西岳・槍ヶ岳を攀ぢ、殺生小屋泊、廿九日大喰岳より穂高岳を北穂高・空澤・奥穂高・前穂高と縦走して上高地五千尺旅館泊、卅日上高地滞在、卅一日上高地より徳木峠を踰えて島々に出て松木泊、九月一日松本より四ツ屋に至り一泊、二日白馬岳に登り鍾温泉泊、三日鍾温泉より早朝四ツ屋に下り、自働車にて大町を経て明科に出て、名古屋について山行を終りました。

山は雪と花の美がやゝ物足りなかつたけれど、人が込合はずゆ

つくりした氣持で連日の好晴のもとに思ふまゝに楽しんで來ました。(竹内亮)

△拜啓 小生去る七月三十日より八月八日迄北アルプス燕小舎に赤沼兄を訪れて滞在、八月三日天候の定まるを待つて小槍登攀で有名な中山彦市を連れ牛首岳の南より貧乏澤を下り天上澤に露營、翌四日槍北鎧尾根に取つき獨立標高の岩峯より約二時間の極めて小さな岩の御殿に露營、五日は早朝に出發、馬背の如き山稜を経て槍ヶ岳の眞裏より登攀、大槍小舎に下りて祝盃を重ね一睡の後、その夜美くしい月光を浴びつゝ常念山脈を燕へ戻り申候。貧乏澤下りの藪と北鎧尾根第一峯へ取つく附近の這松の藪には少々閉口致し候。

北鎧尾根獨立標高點よりは赤裸の岩壁にて稜高や小槍より危険は多く候得共、兩者より遙かに愉快を感じ候、獨立標高點(二九〇七米)附近に天幕を張りてロッククライミングのテクニツクをなさば一層北鎧尾根の意義を味ひ得らるべく候。

最後に槍の登攀は槍の持つ山稜の内一帯男性的な場面にて頂上の御宮の脇へぬつと顔が出る譯にて候、垂直の岩壁ゆへ頂上よりは登り來る人を見定めるは困難だけ、顔を突出した瞬間の愉快さは格別に候、兎に角槍の北山稜は槍が四方へ派出するどの尾根よりもするどい印象とどの尾根よりも愉快さを味ひ得らる事が特色にて候(西田誠一)

會 報

○第二十九回小集會記事

大正十四年九月廿日午後一時より麴町區紀尾井町皆香園に於て開催、左の講演があつた。

瑞西漫談

別 宮 貞 俊氏

題は瑞西漫談であつても、其實は氏が滯歐約二年の間に登られた瑞西の山の中で、ベルネース・アルプスの東北端に位する三千七百三米のウエッタ・ホーンと、之とローゼンラウイ・グレッチャを隔て、東北に連立する岩崖の一峯二千七百八十三米のエンゲルホーンとに登られた時の話であつて、小屋で何かの食物を口にして、食はぬも残念と丸呑みにし、爲に腹をいためて其日の登攀を危まれたが、再び之を吐き出して差支なく出發することを得たなどの滑稽談もあり、多數の優秀なる寫眞や地圖と相待つて、知らぬ他國の山話しも親

しみ深く聞きなされた。

加奈陀ロツキより歸りて

槇 有 恒氏

先づ氏が本會幹事としての立場に就て說かれ、夫より加奈陀ロツキ遠征隊の成立するに至りし前後の事情を述べ次で該地方の山岳の風貌、交通の便否、準備、山行の大略、携帶品の適否等に関し、一時間半に亘りて説明された。

當日の來會者は小松喜一、三輪勳、柳直次郎、別宮貞俊、野口末延、大熊保夫、神谷恭、高畑棟材、酒井忠一、沼井鐵太郎、山田應水、山下助四郎、石井鶴三、中野謙、若林祐治郎、中澤眞二、濱名増雄、又木周夫、杉浦晋、西田誠一、渡邊昇、松澤幸三郎、山崎金次郎、田澤昌介、鹽野叙光、佐藤文二、中條常七、岩井三郎、吉田次男、堀龜雄、本多友司、星野光之助、早川種三、吉澤一郎、高頭仁兵衛、木暮理太郎、冠松次郎、槇有恒、鳥山悌成、梅澤親光の四十氏であつて、他に十二名の來會者があつた。

○第三十回小集會記事

大正十四年十一月十五日午後一時より清水谷皆香園に於て冠幹事司會者として開會、左の講演があつた。

平ヶ岳へ

高頭 仁兵衛氏

名譽會員大平晟氏と共に大正十四年十月中旬、大湯より中岐川を溯つて、平ヶ岳登攀を試みられた登山話で、雨が多かつたので水嵩が大きく、途中灰の又澤西の又澤の合で、可なり困難され、平ヶ岳迄半日行程の處で雨に拒まれ、已むを得ずもと來た道を戻られた、それで平ヶ岳の山巔は極めなかつたが、中岐川の秋色を思ふまゝ、味ふことを得たといふ。

鐘釣溫泉から平の小屋まで

冠松次郎氏

黒部川中での絶險、下廊下の最も險惡壯大な部分、未だ曾て人の入り得なかつた棒小屋澤と劍澤の落口から上流黒部別山澤の落口までを主眼として、今夏(大正十四年)會員沼井鐵太郎、岩永信雄

の二氏と共に溯行された旅行談で、人夫九人、ロップ四百呎、ビトン其他の用意をして、水の最も少い八月末から九月初めにかけて目的を果して歸られた。鐘釣溫泉から東谷の落口までは路が付いてゐる、東谷から棒小屋澤の小屋場までは日本電力が作郎越と云ふ峠路を最近に切り開いた。然しそれから上は最早路などは全くなく、先づ棒小屋の小屋場から棒小屋澤の落口に到る間に二ヶ所險惡なへづりをして、劍澤と棒小屋澤の落口に出て、初めて兩澤とも黒部本流に差し向ひに落ち込んでゐる奇景に接し、劍澤落口の瀑と釜を見、棒小屋澤の瀧を途中で横きり、峻急七十餘度の崖側を四百呎のロープを殆ど使ひつくして約五百米突上り、又黒部川に向つて下り、それから豪宕雄麗なる黒部川下廊下の大壁を、ロープやビトンを用ひて通過し、漸く岩小屋澤の支尾根の下手の無名の澤に辿りつきて野營、更に山側を千八百餘米突の尾根上に達し曾て同氏が跋涉した行路を逆に黒部別山澤の落口にあたる下廊下唯一の徒涉點に下り、黒部別山澤の下流を觀察し、その翌日は廊下

の大へづりを終へて新越澤の瀑を見、それより上流は日本電力の歩道に従ひ、内藏之介澤御前澤御山澤の落口を横ぎり、平の小屋に着いた。鐘釣温泉より一週間を費したが、其間幸に天候が良好で且河水少なき爲に、目的を達することを得た、夫には勿論長次郎の熟練が與つてゐる。當時食糧缺乏してゐたので、岩小屋澤の尾根で東信電氣の路にぶつからなかつたならば、廊下へ下られずに信州へ又下らなければならなかつたとの事である。

いづれ本誌上に詳細の記事を掲げる筈である。

當日の來會者は岩永信雄、別宮貞俊、權田邦彦、吉澤一郎、米谷稔、村形吉富、茨木猪之吉、高畑棟材、野口末延、木村鑛吉、磯貝藤太郎、神谷恭、高橋鑑三郎、岡田喜一、柳直次郎、堀龜雄、松澤幸三郎、本多友司、田澤昌介、松井幹雄、石川孟範、吉田直吉、川口敏郎、中原萬次郎、築山茂俊、田中菅雄、長谷川孝一、山崎金次郎、岩井三郎、田部重治、大熊保夫、武田久吉、梅澤親光、横有恒、冠松次郎、近藤茂吉、沼井鐵太郎、高頭仁兵衛、鳥山悌成の三十九氏にして他に十數名の來會

者があつた。

○幹事改選

本會幹事の任期は三年の規定であるから、大正十二年に就任した幹事は、同十四年の終に於て満期となる譯である。依て本會は會則第七條に據りて幹事の改選を行ふこととし、同年十一月十日に小集會の通知を兼ねて、「適任と認めたる者五名を會員中より選舉し十一月三十日迄に折返し投函ありたき旨」、往復葉書で全會員に通牒したのであつた。勿論前に頒布した會員名簿は大正十三年十月現在のものであつたから、其後新に入會された會員諸君に對しては不行届であつたことを謝さなければならぬ。適任者五名としたのは別に深い理由のある譯ではなく、相當數の候補者を得て、評議員會の選擇に任せたい爲であつた。かくて十二月四日高輪南町の會計取扱所に於て評議員會を開き十票以上の得票ありたる十三名の候補者中より、審議の結果、左記の七名を新幹事に推薦することゝし、其承諾を得た。各自の分擔任務は後に

取極めたものである。

編輯 木暮理太郎 庶務 高頭仁兵衛
編輯 冠 松次郎 外交 榎 有 恒
會計 鳥 山 悌 成 圖書 藤 島 敏 男
記録 沼井鐵太郎

沼井氏の外は皆重任である。或は人員を増してはとの議もあつたが、夫は必要の生じた場合に改めて審議することになった。尙ほ大阪の榎谷徹藏氏、神戸の毛馬新次郎氏も十五票以上の得票はあつたが、何分遠隔の地に居住されるので、遺憾ながら薦に洩れた。然し關西方面、中でも大阪や神戸は多數の會員が居られることであるから、適當な人に地方委員を囑託して、其地方に於ける本會の事務を取扱つていただくことは、相互に便利であらうと考へられるけれども、夫にはよく本會の性質、主義、方針等を充分に諒解して、慎重な行動を取つて呉れる方でないと、つまらぬ紛擾の種が持ち上らぬとも限らぬ。これに就ては大阪を中心とする附近會員の意向を尋ね、本會よりも幹事なり評議員なりが出張して親しく會談を試み、憾

みを後日に遺すやうなことのないやうにして、希望者が多ければ決行したい考である。他に別所梅之助、松本善二の二氏も相當の得票があつた。幹事の詮衡が終つてから、會則第八條に據り、元幹事から互選に依りて五名の評議員を選んだ。それで評議員は、

小島久太、高頭仁兵衛、武田久吉、梅澤親光、
高野應藏、山川默（以上發起人）
辻本満丸、中村清太郎、田部重治、三枝守博、
近藤茂吉（以上元幹事）

之に高頭氏を除きたる現任幹事六名を加へた十七名と決した。そして二名の常任評議員は武田久吉、梅澤親光の二氏が就任されることになつた。然るに梅澤氏の逝去により高野應藏氏が之に代られた、評議員も十六名となつた。

○會費滯納に就て

毎年度の始に於ける會費未納の會員は、百數十名の多きに達する有様であるが、再三の警告又は集金郵便等の方法で、次第に其數は減するけれど

も尙ほ絶無とはならない。勿論旅行其他の事情で時に二三ヶ月の遅延を來すの止むなき場合も認めなければならぬとしても、一ヶ年或は夫以上も滞納してゐて、しかも確に本會からの通知を手にしながら、遂に一片の返信さへも寄せないのは、どういふ意志なのか全く了解に苦しむ次第である。退會を欲するならば何も會費を滞納して退會を命ぜられるのを待つといふ迂遠な方法を執らないで、簡単に退會の通知を出したらばよさうに思へる。本會は營利を目的とするものではないし、幹事の如きも皆忙しい中を無報酬で働いてゐるのである。退會の通知に接したとて、之を握り潰して、會費を徴收せんとしたり、強いて會籍に名を列ねて會員の多數を誇らんとするなどの念は毛頭ない、従つて會費を納付するのが嫌になつたならば、退會して頂く方がお互に手数が省けてよいのである。それに就て次號即ち二十年一號からは大正十四年度に當る譯になるので、同年度の會費未納者へは配本を停止し、尙ほ紹介者となつた評議員から念の爲め一應の問合せをなし、返信なき者

に對しては、會則第十九條に依りて退會を命ずることに一決したのであるから、豫め此旨を領知せられたい。

夫から今後の入會希望者及紹介者とならるゝ會員諸賢に對しても、御注意申上げて置きたいのは今迄の例に依ると、入會して未だ半歳も經ざるに退會される人のあることである。勿論本會としては入會者が多ければ、入會金が増し、基金が殖へるのであるから、單に其點から言へば假令入會の翌日退會するとしても、入會者さへ多ければよい筈であるが、本會は斷じて左様のことを望むものではない、さりとて會員の減少は目下のところ會の成立並に經營を困難ならしめ、或は危殆ならしむる虞が充分にあることも否めない。それで本會としては結局會員の一人でも多い方が望ましいにも拘はらず、敢て如上のやうに公言して憚らない所以は、本會は今迄決して他力を借らず。本會自身の力即ち會員と役員との努力で、健全なる發達を遂げて來たのである、將來とてもこの着實な方針に依りて進みたい、それには熱心なる會員

の助力を必要とするので、一時の感激に驅られたり、若しくは本會の主旨を誤解して入會されるやうなことがあると、後になつて助力どころか反て迷惑ともなり、甚しきは妨害とならぬとも限らぬ、それでは遺憾であるから、入會希望者も又其紹介者となる可き會員諸賢も、此點に留意して頂きたいのである。要するに本會は確かな岩間に深く根を下した高山植物のやうに、いつまでも山に對する強い、寧ろしつこい位の執着を持つ人の集りでありたい、それがたとへ山に登らぬ人であらうとも。

○臨時大會記事

大正十四年十一月二十九日午後六時より、芝區高輪南町三十番地調和道協會に於て、本會臨時大會を開き、左の講演があつた。

マウント・アルバータの登攀に就て

幹事 榎 有 恒氏

榎幹事が一行五名と共に加奈陀ロッキのマウント・アルバータを直指して、遠征の途に上つた

ことに就ては、先に第二十八回小集會の席上に於て、木暮幹事より報告する所があり、又第二十九回の小集會に於て、榎幹事自身の報告があつた。加之のみならず東京日々及大阪毎日兩新聞社の主催で、各地で活動寫眞の映寫と共に講演も行はれたことであるから、今更こと新らしく繰返す必要もないやうであるが、大部分は物珍らしさに集る一般聴衆を相手の會とは自ら異なる所もあり、旁本會に於て講演會を開催するも無意味なりとせず、榎幹事も亦會に對して講演の義務ありとし、開催に同意されたので、臨時大會を開催することに決したのである。

當日は種々の參考品を陳列する筈であつたが、會場の都合で、地圖と化石などの重要なもの二三を陳列したに過ぎなかつたのは、お詫しなればならない。

講演は、加奈陀ロッキの位置其山群等に就て畧説し、探檢の歴史を述べ、更に今回登攀の目的たるマウント・アルバータの屬するコロンビヤ山群の地形より説き起して、之に近づく行程の概畧を

叙し、其準備に就て語り、最後にアルバータ及ウーレーの登攀、スタットフィールドの頂上間近く登りたるも天候不良の爲引返したること、さて一般の天候次第に不良に向ひつゝありし爲に、これより來路を必發點のジャスパーに歸著したりと結び、次に百二十枚の幻燈を映寫して、詳細なる説明を加へ、目のあたり當時の狀況に接するの思あらしめた。かくて講演を終りたるは午後九時半であつて、百餘名の來會者があつた。

○會務報告

大正十四年九月廿日午前十時、麴町區清水谷皆香園に於て幹事會開催、左の件に就て協議す。

- 一、幹事改選に關する件。
- 一、臨時大會開催の件。
- 一、會費未納者に關する件。

次で入會申込者の詮衡を行ふ。入會を許可せられたる者左の如し。

大正十四年十一月十五日午前十時、右同所に於て幹事會開催、左の件を議決す。

- 一、幹事改選に件する件。
- 一、臨時大會開催の件
- 出席幹事 櫻、鳥山、冠、高頭、木暮。
- 評議員 武田。

此日左の六名入會を許可せらる。

西谷逸郎、岩永利夫、田中智雄、山崎和一、渡邊漸、馬場忠三郎。

大正十四年十二月四日午後四時、芝區高輪南町三十番地日本山岳會會計取扱所に於て、評議員會を開き左の件を決議履行す。

- 一、會則第七條によりて會員より選舉されたる新幹事決定の件。
- 一、元幹事より互選によりて五人の評議員を選出する件。
- 「山岳」特別號發行の件。

此日左の三名入會を許可せらる。

岩瀬昌治、大木宏、白倉秋也。

出席評議員 武田、梅澤、高頭、冠、鳥山、木暮、櫻(委任)、田部(委任)、高野(委任)。

○梅澤親光君の訃

本會の會員並びに本誌の購讀者にして、梅澤君の訃を聞いて、且つ驚き且つ悲まない者はなから

う。人生一度は死ありと覺悟はするものゝ、それが餘りに急に君を襲つたことゝ、そして前途ある君を失つたことは、寔に悲痛なことゝ言はなければならぬ、殊に本會の發起人として、今は又評議員として重要な位置にあり、且つ會の爲めに昔も今も努力を吝まれなかつた君を喪ふことは、本會として哀惜に堪えない次第である。

君は明治十八年八月に東京市麴町區飯田町に於て産れた。嚴父の經營された稚松小學校を卒業してから、東京府立第一中學校に入學されたが、幼にして理科に興味を有した君は、中學に學んで、殊に故歸山先生の熱心な薰陶によつて、益々自然科学の研鑽に力を注ぐ様になつた。動植物の採集であるとか物理化學の實驗であるとかは、君が好むで行つたことで、甲蟲類の標品は殊に數多く蒐集して居られた。

明治三十四年頃であつたか、中學同級生の間に、數名の博物學同好者が集つて、日本博物學同志會を起すや、君も亦これに加はり、幹事となつて大に活躍せられた。

三十八年の秋、本會設立の議が起つた時、發起人の一人として立ち、又幹事となられたのは、一同志會の關係からで、その時本會は、同志會の一支會として、呱呱の聲を擧げたからである。

設立當初から事務所難に惱まされた本會は、明治四十一年に城幹事が京城に赴任の際、横濱の高野幹事方に事務所を移すの止むなきに至つた。そしてそれ以來高野君の熱身的努力によつて、本會は目ざましい發展をなしたが、事務の殆ど全部を一手に引受けて遂行された高野君が、大正八年初から病魔の犯す處となり、秋に入つてから醫師に執務を禁じられるに至つて、再び事務所を東京に移すと同時に、事務の整理を行ふ必要に迫られたるに、高野幹事が單身執つて居られた事務も、實際これを引ついで見ると、到底一人の幹事のみでは急速に整理出來ない程の龐大なものであつたのと、會則の變更によつて既納會費の改算を必要としたのであつたが、梅澤君はこの時に方つて、その天稟を發揮し、日夜執務に執掌され、驚く可き短時日内に、會費の改算を初め、基本金の整理

等重要な事件を處理し、會員章の變更を斷行する等寸暇もなく活動された。そして會務に一の簡明なシステムを設けて、苟も常識的に行へば、何人にも容易に會務を執り得る様に制定されたのであつた。爾來會計幹事として實務に當られ、大正十一年末迄、熱心に執務されたのであつた。

高等學校から大學に入つてからは、君は物理學を専攻されたが、元來多能の同君は、科學と名のつくものなら、何でも一と通りの心得はあつたのだし、それにスポーツには甚大な興味を持ち、殊に水泳は神傳流の奥義を究められ、その道の著述もあつて斯道でも大家として、許されて居た。

君の登山は、一つは採集旅行といふ方面と、一つは地理上の知識慾から出發したものではなかつたらうか。明治三十四年の富士採集登山を振出しに、秩父の御岳、高尾山等は幾度となく行かれ、三十五年かの夏には木曾御岳に、三十八年の春には仙元峠、夏には日光諸山、三十九年の春には大菩薩、その秋には御岳、大岳やら景信、陣場等に四十一年には白崩、仙丈に、大正二年の夏の荒川

仙丈等と、追々深入りされて行つた。

何分海山の兩刀を使ふのでもあるし、逐年肥滿される爲め、登山は實行の機が少なかつたが、山に關する知識の深遠なものには、いつも人をして驚嘆せしめずには置かなかつた。これ蓋し君の明晰な頭腦と非凡な記憶力の然らしむるところで、一旦耳目に觸れたことなら、盡くこれを自家藥籠のものとする事が出來たからである。

豊富な知識と科學の蘊蓄に立脚した君の批評眼は、標準が高く君の裁斷は、又極めて銳利であつた。それ故苟も非科學的や非常識な言辭行動は、君の批評の前に顔色を失ふのが常であつた。されば君を目して毒舌家毒筆家となす人もないではなかつたが、それは恐らく低能兒を標準として凡人を見るが如きもので、君は常に黒を黒、白を白としたに過ぎなかつたのである。そして如何なる場合にでも、名利の爲めに言を曲げたことなく、當今罕に見る廉潔の士であつた。そして約束を守り義理を重んずることは、常人に倍して居つた。理論物理を大上段に振り冠つて、科學一點張り

の理屈を推し通す半面にも、長唄、淨瑠璃、さては輕業、玉乗、見世物の類に至る迄興味を持ち、加之小供好きのよいおぢさんとして、人間味のたつぷりあつた點も、記して置く必要があらうと思ふ。そして根氣の良かつたことは、本誌第二年第二號に添えた、「山岳高度表」によつても、容易に察することが出來よう。

近頃は餘り「山岳」誌上に筆を執られなかつたけれども、小集會や評議員會には缺さず參會して適切な助言や注意を與へることを怠らなかつた。現に昨年十二月四日の評議員會にも出席され、會務果てゝ後の雜談に例の呵々大笑した有様など、未だ耳目に新なるに、一ヶ月をも經過せざる今年の一月一日の午後には、最早白玉樓中の人となつてしまはれた、病の爲とはいへ實に感慨無量といふの外はない。

○交換及寄贈圖書目

ツーリスト 第十三年第四號、第五號
 ペデスツリヤン 第八十號
 友 第一年五號—十二號、第二年第一號

Die Alpen I-*No.* 7, 8.

The Geographical Journal, Vol. LXV-No. 1, 2

又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベ

大正十五年二月十五日印刷
大正十五年二月十七日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

發行兼編輯者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

新潟縣三島郡深才村深澤

日本山岳會

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會會計取扱所

振替口座東京四八二九番

東京市神田區表神保町

東京堂

發賣所



山岳圖書販賣

奧上州號 山岳 第十六年 第三號

本欄及雜錄二百十二頁 定價金貳圓五拾錢

奧上州は巨流利根及其貢流の發源する所、山や谷や殘雪や森林や登路や果して如何に、奧上州號は其詳を盡して餘蘊なし。

高頭式編纂
日本山嶽志 全一冊

(會員に限り) 賣價金五圓
送料金貳拾七錢

山岳

第五年第三號、第六年、第七年、第八年、第九年、第十四年、第十五年、第十六年、第十七年、第十八年、以上孰れも各號。第十年第二號。第十一年第二號。第十二年第一號。第十三年第二號。以上何れも定價異り、部數僅少につき御注文に先立ち往復葉書(又は返信切手附)にて一應御照會願上候。

東京市芝區高輪南町三〇

健全書店

振替口座東京三二〇五二番

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XIX

1926

No. 3